

女子現代文學新鈔教授參考

卷五

325
31



0049900000

0049900-000

特201-810

女子現代文學新鈔教授參考

金子彦二郎・編

光風館書店

卷5

昭和4

AHJ

特

特201
810

子女 現代文學新鈔教授參考 卷五

目次



一	嵐	島崎藤村(一)
二	詩歌の城(詩)	室生犀星(六)
三	魔眠時より黎明まで	豊島與志雄(七)
四	神祕の日本	野口米次郎(三)
五	滑稽の大きな力	島崎藤村(興)
六	岳の日没(詩)	富田碎花(五)
七	水が生きてゐる	中里介山(畜)
八	鶴鴿走る(俳句)	(六)
	螢籠	中塚一碧樓(六)

目次



鶴鶴走る	村上鬼城(八〇)
金魚の子	白田亞浪(八三)
麥打つや	松根東洋城(八四)
新樹	青木月斗(八六)
九 丈草庵の秋	吉田絃二郎(九〇)
一〇 山庵雜記	北村透谷(二三)
二 鴉(詩)	加藤信春(二七)
三 「夜」の眠り	矢代幸雄(三〇)
三 芭蕉	島崎藤村(三四)
四 夕映・早春の大地(詩)	千家元麿(三五)
夕映	白鳥省吾(三五)
早春の大地	國木田獨歩(三五)
五 牛肉と馬鈴薯	
六 千曲川のほとりにて(詩)	島崎藤村(八九)
七 生の寂しみ	相馬御風(九五)
八 高僧の一喝	幸田露伴(二三)

目次終

子女現代文學新鈔教授參考卷五

一 嵐

【作者の意圖】 作者が長い間四人の幼い者達のために、自分を犠牲にして來た痛ましい受難の年月、その年月の間のいろ／＼な親子の生活を描かうとしたものである。人の子の父の心の尊い告白とでも言ふべきであらうか。

【作者の個人的特徴】

第一卷の四「水の御馳走」参照

【作者の小傳】 明治五年二月十七日信濃木曾神坂村字馬籠みさかに生れた。明治十三年九歳のとき、次兄とともに東京へ遊學した。明治二十年明治學院に入つたが、今慶應大學の教授をしてゐる戸川秋

骨・馬場孤蝶氏等と同窓たつた。卒業したのは明治二十四年二十歳の時で、その翌年私立明治女學校へ英語の教師として赴任した。けれどそれも一年程で、或る戀愛の爲に苦しんで家を出で、明治二十六年一月はじめから漂泊の旅に上つた。僧形になつて徒歩で東海道を熱田に出、そこから伊勢に渡り、伊賀を越えて近江に入り、吉野から神戸へ、神戸から土佐へ、あてない旅を続けること一年ほど、或る時は鎌倉の海に身を投げて死なうとしたこともあつた。明治二十七年二十三歳のころから雑誌「文學界」の同人として初めて文學生活に入つて行つた。そしてその年の五月からは再び明治女學校に教師となつた。後に京都帝大の教授となつた柳村上田敏氏等と相知つたのもこの頃だつた。

明治二十九年には仙臺の東北學院へ教師となつて赴いた。此處での靜かな生活は、多くの秀れた抒情詩を生んだ。それらはみな翌年處女詩集「若葉集」の中に纏められて春陽堂から出版された。翌三十一年には「一葉舟」が出、「夏草」が出た。三十二年二十八歳の時から、信濃の高原淺間山麓の小諸の町——今丈餘の自然石に名高い「小諸なる古城のほとり」の詩を銅版に刻んで嵌込んだ藤村詩碑(教科書一七二頁)の立つてゐる小諸の町へ、私立小諸義塾へ國語の教師として赴いた。

「千曲川旅情の歌」其の他を収めた「落梅集」はこの間に成つた。結婚も此處でした。長女「綠」の生れたのも此處であつた。小諸は藤村氏にとつて、初めて人の夫となり、人の父となつた思ひ出深い土地なのである。そののみか、氏の出世作「破戒」もこの生活の中で脱稿した。明治三十九年三十五歳になつた氏は、八年間の小諸の生活を捨て、再び東京へ出て來た。この頃三人の女兒を相次いで失つてしまつた。翌年から長篇「春」に取りかゝつた。東京朝日新聞に掲載したので、新聞の爲に筆を取る最初の經驗であつた。それから「家」が出た。これは讀賣新聞に掲載された。「千曲川のスケッチ」「眼鏡」「微風」と相次いで公にされた。そして大正二年四十二歳のときエルネスト・シモレ號で佛蘭西への旅に立つた、三人の幼いものを後に残して。

巴里ではポールロワイヤルの下宿で朝日新聞にのせる「佛蘭西だより」を書いた。長篇「櫻の實の熟する時」にも筆をつけた。新潮社からは「平和の巴里」が出版された。丁度歐洲戰亂が始まるころであつたので、一時巴里を後にオートギエヌ州リモモオジェの町へ戦を避けたこともあつた。大正五年、三年の旅を終へて歸つて來た氏は、芝二本榎に家を定めて、二人の子供を引き取り、「幼きものに」を書き初めた。航海記「海へ」も書いた。大正七年からは大作「新生」を起稿、朝日新

聞に掲載しはじめた。それから「ふるさと」「エトランゼ」「ある女の生活」「貧しい理學士」「食堂」「三人」等相次いで發表された。最近には「嵐」「分配」等で文壇に大きなセンセーションを惹起した。

【解釋】

◇擲捨ふ カラカフ

◇住居 スマキ

◇ある洋畫研究所 川端畫學校のこと。(川端玉章氏の創めた畫塾)

◇麻布笄町から高樹町あたり 青山墓地の裏手にあたる、ひつそりとした住宅街である。

◇椽 トチ 綠色を帯びて淡褐黑色の樹肌をした落葉喬木で、大きな掌のやうな葉をつけてゐる。五月頃になると 淡紅い花が穂のやうな形に咲く。

◇何となく見直す時だ 何となく眼新しく感ぜられるといふこと。

◇愛宕下 アタゴシタ 新橋停車場と芝公園との間あたり、ずつと海近い低地である。

◇泣いちやつた 寢小便をしたといふことの隠語。

◇みそ萩 しやうりやうばな。みぞかけぐさ。

◇酸漿 ホホヅキ

◇精靈棚 シヤウリヤウダナ 先祖の位牌を安置するために設けた棚。たまだな。

◇迎へ火 七月十三日の夜、夕ぐれごろ、門前に麻幹を焚いて、亡き人の靈を迎へること。

◇額に汗する思ひで 苦しい思をして、苦勞して。

◇風琴 オルガンのこと。

◇築地小劇場 死んだ小山内薫氏が統率し、土方與志氏が經營に任じてゐた小劇場で、文藝的價値の高い戯曲を、研究的な態度で演出するので名高かつた。初は翻譯戯曲を専門にしてゐたが、後には日本の創作戯曲の上演をもするやうになつた。

◇子供の日 幼い人達に見せるために特に面白い、童話的な戯曲を選んで上演する日。

◇そら豆の煮えるまで 劇の題名。

【鑑賞批評】

一 この課の鑑賞の生命は、いみじくもこゝに描き出された、深く温い愛の世界をしつかりと把握することである。母のない四人の幼いものを羽がいの下に抱き育んで、世界の嵐からかばひなが

ら、じつとその成長をみつめてゐる父の心を深く味はふことである。それをせずして此の文章を何度讀んだところで何にもならぬ。

二 一篇の主調は父性の愛である。句々の間ににじみ出てゐる涙ぐましいまでの犠牲的な愛情である。

◇次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で一番高い。かの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで届きさうに見える。毎年の暮に郷里の方から年取りに上京して、其の時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方がずっと高くなつた。(二頁)――

◇私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸程しか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。(三頁二行)――

◇四人ある私の子供の中で、身長の發育にかけては三郎が一番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃次郎最眞の下女は、何かにつけて「次郎ちゃんく」で、そんな背の低い事でも三郎を揶揄ふと、其の度に三郎は口惜しがつて

「悲観しちまふなあ――背はもう諦めた。」

とよく嘆息した。其の三郎がめきくと伸びて來た時は何時の間にか妹を超越してしまつた許りでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎は嬉しさの餘り、手を振つて茶の間の柱の側を歩き廻つたくらゐだ。(三頁五行以下)――

◇私は春先の筈のやうな勢ですんぐ成長して來た次郎や三郎や、それから末子を見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。(四頁初行)――

「あの兒の頭はもう一寸四分位で鴨居にまで届きさうに見える。」と言ひ、「太郎よりも次郎の方がずっと高くなつた。」と言ひ、「その末子が最早九文の足袋をはいた。」と言ひ、さては、其の三郎がめきくと伸びて來た時は、何時の間にか妹を超越してしまつた許りでなく、兄の太郎よりも高くなつた。」と言つてゐる語の蔭に、わが子の成長に細かな心をくばつてゐる父親の包むに包みきれぬ喜びと満足との氣持がうかゞはれはしないか。

こゝまでが第一節で、四人の子供達の急激な成長を語つてゐる。そして

三 次の節では、今の住居を見捨て、もつと廣い住家へ移らうとしてゐる親子の心持を描いてゐる。子供達はみんなそれぐに一部屋を要求する程大きくなつた。七年住み馴れた古巢も、今ではも

はや狭苦しくなつてしまつた。

◇今一部屋もあつたらと私達は言ひ暮して來た。それに、二階は明るいやうでも西日が強く照りつけて、夏などは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで雨でも來る日は茶の間の障子は殊に暗かつた。(四頁一二行)

◇今更のやうに私は住み慣れた家の周圍を見廻した。こゝは一番近いポストへちよつと葉書を入れに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町はあつて、どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならぬ。(五頁一一行)

現在の住居に對する不満はかういふ風にいろ／＼あつた。それにさうした外的な事情からばかりでなく、作者の内心にも、動くことを要求するやうな内部的な欲求があつたのである。

◇實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かすにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、とかく心も落ちつかかなかつた。(六頁五行)――

おほよその詩人の持つ悲しい漂泊性、旅に憧れる心を、この人も多分に持つてゐるのであらう。

芭蕉がさうであり、西行がさうであり、宗祇がさうであつた如くに。

◇いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分等の家路が見えて來る。誰かしら見知つた顔にも逢ふ。暮から道路工事の始つてゐた電車通りも、石やアスファルトにすつかり敷きかへられて、椽の並木の姿も何となく見直す時だ。(六頁一二行)――

◇その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀、そこにある蔦の蔓、すべて身に沁みるやうに思はれて來た。(七頁六行)――

こゝには去らんとする舊居に寄する淡い親しみが見られる。

◇下女のお徳は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の石段を降りるのを躑音で聴き知るほど、最早三年近くもお徳は私の家に奉公してゐた……このお徳は臺所の方から肥つた笑顔をを見せて、半分子供等の友達のやうな慣れ／＼しい口をきいた。

「次郎ちゃん、好い家があつて？」(七頁九行以下)――

何といふ温い愛の世界がこゝには展開されてゐることか。この家の主人の尊い性格も思ひ合はされる。

◇僅かばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も浅かった。(八頁六行)――

この僅かな一句が、如何に情景を生かしてゐるか、人事にからめた自然描寫のかうした妙所を十分に鑑賞させて戴きたい。

四 こ、から後は、母親のない四人の子を抱へた父の涙ぐましいまでの心勞を語つてゐる最も大切な部分である。

◇自分の身のまはりのことは成るべく人手を借りずに、そればかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出たし、子供の着物も自分で疊んだ。(九頁末行以下)――

◇少年の時分に有りがちなことながら、兎角兄の方は「泣き」易かつたから、夜中に一度づつは自分で眼をさまして、そこに眠つてゐる太郎を呼び起した。子供の「泣いたもの」の始末にも人知れず心を苦しめた。そんなことで顔を赤めさせるでもあるまいと思つたから。(二〇頁六行)――

哀しき父と呼びたいやうな氣がする。かうして始終子供の上に心を配つてゐる作者はやがて子供の世界にも親しむやうになり、子供の性質の相違をも考へるやうになつた。

◇次第に、私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見ればそこにも流行といふものがあつて、

石蹴り・めんこ・劍玉・べい獨樂といふ風に、あるものは流行り、あるものは廢れ、子供の喜ぶ玩具の類までが、時につれて移り變りつゝある。(二〇頁二行以下)――

◇私は又二人の子供の性質の相違をも考へるやうになつた。正直で根氣よくて、眼をぱちくりさせるやうな癖のあるところまで、何となく太郎は義理ある祖父さんに似て來た。それに比べると次郎は、私の甥を思ひ出させるやうな人懐こいところと氣象の鋭さがあつた。(二二頁初行)――

これは作者の親心の當然の結果と言はねばならなかつた。

◇盆が來て、みそ萩や酸漿で精靈棚を飾る頃には、私は子供等の母親の位牌を旅の鞆の中から取出した。宿屋住居をする私達も門口に出て、宿の人達と一緒に麻幹を焚いた。(二二頁八行)――
わびしい抒情詩である。

◇や、もすれば兄を凌がうとする此の弟の子供を制へて、何を言はれても黙つて順つてゐるやうな太郎の性質を伸して行くといふことに、絶えず私は心を勞しつゝけた。その心遣ひは、子供から眼を離させなかつた。(一二頁四行以下)――

◇町の空で子供の泣き聲や喧嘩する聲でも聞きつけると、私はすぐに座を起つた。離れ座敷の廊

下に出て見た。それが自分の子供の聲でないことを知る迄は安心しなかつた。(一二頁七行)——
◇私は額に汗する思ひで、末子を迎へた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。」

と私は考へ直した。長いこと親戚の方に預けてあつた娘が學齡に達するほど成人して、また親の懐に歸つて來たといふことは、私に取つての新しい歡びでもあつた。(一三頁八行)——

◇にはかに夕立でも來さうな空の日には、私は娘の雨傘を小脇にか、へて、それを學校まで届けに行くことを忘れなかつた。(一四頁三行)——

◇暫くするうちに、私は二階の障子の側で自分の机の前に坐りながらも、階下に起るいろいろな物音や、話聲や、客のおとづれや、子供等の笑ふ聲までも手に取るやうに知るやうになつた。それもその筈だ。餌を拾ふ雄雞の役目と、翅をひろけて雛を隠す母雞の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。(一五頁六行)——

◇どうかすると、末子の啜り泣く聲が階下から傳はつて來る。それを聞きつける度に、私はしかけた仕事を捨て、梯子段を駆け降りるやうに二階から降りて行つた。(一五頁一二行)——

◇私は、獨りで手を揉みながら、三郎をも迎へた。

「三人育てるも、四人育てるも世話する身には同じことだ。」

と末子を迎へた時と同じやうなことを言つた。それからの私は、茶の間にある末子のよく見えるやうな所で、二階の梯子段を昇つたり降りたりする太郎や次郎や三郎の聲音もよく聞えるやうな所で、ずつと坐り續けてしまつた。(一九頁初行以下)——

子を育てるために、親はこれほどまでに苦勞をする。これは純一無雜な犠牲的愛である、求むるところなき無私の愛である。これ程尊く美しいものを他に何處に求めることが出來ようか。讀返し讀返しして見る中に、誰しもおのづと眼頭の熱くなるのを覺えるであらう。

◇「父さん、障子なんか張るのかい。」

次郎はしばらく其所に立つて、私のすることを見てゐた。

「引越してゆく家の障子なんかどうでもいいのに。」

「だつて七年も雨露を凌いで來た屋根の下ぢやないか。」

と私は言つて見せた。(二二頁六行)——

◇「ほら、この前に見て来た家さ、あそこはまるで主人公本位に出来た家だね。主人公さへ好ければ、他の者などはどうでも好いといふ家だ。唯主人公の部屋だけが立派だ。あ、いふ家を借りて住む人もあるかなあ……」(二二頁末行以下)——
作者の風格を偲ばせるやうな一節である。

◇「へえ、末ちゃんにも月給。」

と私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴を静かに鳴らしてゐる娘のところへも分けに行つた。其の時、銀貨二つを風琴の上に載せ、戻りがけに、私は次郎や三郎の方を見て、半分冗談の調子で

「天麩羅の立食ひなんか、御免だぜ。」

「父さん、そんな立食ひなんかするものか。そこは心得てゐるから安心してお出でよ。」

と次郎は言つた。(二三頁六行以下)——

◇楽しい桃の節句の季節は来る、月給にはありつく、やがて新しい住居での新しい生活も始められる。其の一日は子供等の心を浮き立たせた。(二四頁二行以下)——

◇「私が自分の部屋に戻つて障子の切張を済ます頃には、茶の間の方で子供等の盛な笑ひ聲が起つた。お徳の賑かな笑ひ聲も其の中に混つて聞えた。(二四頁八行以下)——

◇次郎は頬に調子に乗つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。

「おい、父さんが見てゐるよ。」

と言つて三郎はそこへ笑ひころけた。(二五頁初行以下)——

何とも言へない和やかな睦じい雰圍氣が漂ひ流れてゐるのを感じる。

なほこの作者の書いたものには、いつも、何とも言へない美しい内律がある。作者が優れた詩人であるせうであらうが、人知らぬ深山の奥の谿川の水のせ、らぎを聞くやうな、何とも言へない魅力のあるリズムがある。それを十分味得させていたゞきたいと思ふ。

二 詩歌の城

【作者の意圖】 入り易いがしかも容易に極め難い詩歌特に俳道についての體驗を語り、これら詩歌の創作乃至鑑賞者として本當な態度や心構を説き、枯淡で味深い詩歌道や俳道に對する精進力のまだ衰へない作者最近の心境を語つてゐる。

【作者の個人的特徴及び小傳】

これらについては、參考卷四第一八「憂鬱な石」の條を参照されたい。尙川路柳虹氏の此の作者の詩に對する評語には、肯綮に中つてゐるものが多いので左に之を引用して見たい。

氏の性格のす^くな、一本氣な素直さは昔も今も變りないやうに思ふ。……氏は曾て人間的精神を強調して歌つたやうな一時代があつた。……しかし氏にあつてはそれが少しも宣傳的でなく、又誇張的でなく、それらの思想をもつともつ、ましく、素朴な自己の實生活の上に生きてゐる思想として表はしてある。素朴であること、眞實であることそれは詩といふもの、根本の要素であるが、しかしそれは詩人の性格そのものがかゝる要素をもつ時に於て最もよく發露し得るもので、

言はゞ容易に學んで得られるものではない。氏の性格の中にある此のす^くなもの、つ、ましいものが直接言葉となつて現はれたところに氏の詩の動かせない力がある。

……一體室生氏の詩は、どちらかといふと、詩としてあまり詩らしい技巧がなさすぎる位單純で率直である。氏の作には何ら句讀點をもつてゐないものも可なりあるが、たゞ行分けにしたま、その儘を朗讀しても一々の句が可なり力づくよく響く、それは技巧的でないにしろ、ある點まで抜きさしならぬ程度に張り切つてゐる。散文的なやうで、實はその底によく波うつた心のリズムが感じられる。かういふ詩體は室生氏の特徴とも言つてよいもので、かつて詩壇が象徴主義の思潮の影響をうけて一々の字句が巧緻に繊弱に陥らうとしてゐた弊をかういふ素朴單純な句によつてたしかに一新生面を開拓して來たのは氏の大きい功績である。

……氏は造庭に興味あり、また陶器を愛することに於て一隻眼を有すること、共に、それが單なる趣味といふ以上にむしろ性格的な、運命的なものさへもつてゐるのである。……近時靜觀の境地に澄み切つた自我をみつめてゐる作者は、その自我のあまりに何の邪念もなく、淡々として水の流れるごとく、たゞ非情なもの、姿にのみ動かしがたい眞實を感じ、しかもそこで泉石の位置

を直して見たり、木を植ゑかへてみたりすることに、まるで子供のやうな熱心さと純真さをもつてゐる態度——清澄な境地に達してゐる。三十代の人の境地とは思へぬほど落ちついたものであるが、これは虚構でも不自然でもない。この作者が自然に辿りついた道で

いまは花さくものを好まず

わが好むは匂ひなく

色つめたき常盤木のみ

といふやうにさへ歌つてゐる。(作詩の新研究——川路柳虹)

もう一つ、本課の詩の生れ出た心境——數行の詩や俳句を戀ひ慕ふことの嬉しさ——を、作者自身の言葉によつて正しき領會に持ち運ぶ爲に、「俳道」に關する感想の一節を左に抄録する。

自分はこの頃詩を書いて見ても、段々短くなつて殆ど三四行のものしかできない。呼吸が以前のやうに永くつゞかないので、たまに書くものは發句のやうな詩になつてしまつた。それなら發句を書いてゐたらよささうなものだが、やはり時折詩が書きたくて書いてゐる、しかし發句とは別に變つたところがない。自分はもう詩なんぞ書くよりも發句でもかいて折々の閑雅な心遣りを

してゐる方が餘程よいと思ふやうになつた。……

わたくしに取つては詩も發句も同じものにならうとしてゐる。詩が何となく西洋風であるに較べ、發句が古雅な傳統の上に建てられてゐることも、私には新鮮な詩情であつた。私にとつては發句が單なる發句ではなく、詩を捨て、この道に入つてゆくことは、やゝ微かな悲壯の感じがしないではなかつた。詩は幼年の私を育てたが、發句は青年中年の私に、再び新しい道草をつませてくれるのである。自分は詩に飽かないうちに書きたくなくなり、發句の精神は氣質からすでに私にむいてゐるやうである。それゆゑ私の發句は私一人にとり、中々に重要なことで、たゞの閑暇つぶしや餘技の類ではない。少なくとも私の今の年齢での何も彼も籠らせたものでなければならぬ。形式は古くとも悟入の新奇さに驚き勇むころは、過ぎし日の詩情をさへ捨てた壯烈さをもたなければならぬ……(「庭を作る人」九四——九六頁)

【解釋鑑賞】

◇詩や俳句を一しきり……小説や戯曲などを文藝家畢生の事業とのみ思ひ込んで尊重してゐたのであらう。

◇詩や俳句が一行一句……もとより駄作凡作でなく、二六頁八行にある「まこと詩」「まことの俳句」即ち作者會心の詩や俳句を意味してゐる。

◇詩や俳句の王城 詩や俳句も、又生といふ廣い大きな舞臺に深い基礎を持ち、千古不滅の藝術味を秘めて藏めつゝ、儼然としてそゝり立つて居り、誰でもが出入し得るものでない立派な存在である。といふことを、王城に譬へていつたのである。

◇詩や俳句の城へ入る 本當の詩らしい詩、俳句らしい俳句を創作し得る資格のある者は。

◇庭や金銀の居間 詩や俳句に特有な藝術味、最も美はしい諸點、「金銀の間」とは金銀七寶もて裝飾した部屋。

◇居間に坐る禮儀 その詩や俳句の美點特質の發揮に當つての藝術的態度のこと。

◇弓や矢や楯を把り、寒夜になほ城を獲る術 詩や俳句道悟入の爲に、献身的精進すべきこと。

◇何千枚何萬枚 小説や戯曲や隨筆等

◇數行の詩や俳句を戀ひ慕ふ たつた數行の詩、又は一行の俳句人生や自然を歌ひこめようと思ひ立つこと。

◇眞個(ホントウ)の心は城の中に 城即ち數行の詩又は一行の俳句の王城の中にちゃんと座を占め得ることを志し、又さうなることを楽しみに思ふことによつて何時も活氣づけられてゐる。

三 魔眠時より黎明まで

【作者の意圖】 徹夜をする者が感ずる、眞夜中過から明方までの時間の神祕な移り行きを描いてゐるのである。

【作者の個人的特徴】

與志雄の小説は、現實主義に立脚した象徴主義的のものだとするものがある。此の點は輕々しく言ひ難い。が、生の内的生命の奥に觸れようとする一種神祕的な空氣が作品を通じて流れてゐるのは事實である。彼は「掠奪せられたる男」に於て、戀愛同性欲を描いて、巧に女性を表現してゐる。男女の深い愛こそは、彼の好んで描くところである。そして抑へ難い性欲の力をそこに示す。其の文章は秋の空のやうに澄み切つて、しんみりとした味がある。何となく其の本質から流れ出たりズムの動きを思はせるところがある。此の傾向を押しつめた長篇に、「生あらば」野ざらし「幻の彼方」などがある。（高須芳次郎——日本現代文學十二講）

【作者の小傳】 明治二十二年福岡縣に生れ第一高等學校を歴て東京帝國大學文學部に入り、大正八

年佛蘭西文學科を卒業した。現在東京帝國大學講師、法政大學教授である。長篇「友情」をはじめ、「蘇生」「野ざらし」「生あらば」「幻の彼方」等の創作の外に、ロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」、ヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」等の翻譯がある。

【解釋】

- ◇餘喘 ヨゼン 死なんとして猶息のあること。
- ◇飄々乎 ヘウヘウコ ふらり／＼とした形容。
- ◇鎖される トザされる。
- ◇帷 トバリ 室内に垂れ下けて隔とする布。帳。たれぎぬ。
- ◇幽鬼 イウキ この世のものならぬ亡魂。
- ◇蠱惑的 コワクテキ 下註を見よ。
- ◇鬼氣 キキ 物すごい、襲ひ來るやうな物のけはひ。
- ◇寂滅 ジャクメツ 生あるもの、自づと滅び失せること。死。
- ◇逢魔時 アウマノトキ 夜は魔物の跳梁する時である。うつかり表を歩くものは、聲なく姿な

き魔性の者の我が身のまはりの隨所に潛む氣配を感じるに相違ない。さう云ふところから逢魔の時の名は出たのである。

◇丑時參 ウシノトキマキリ 下註に詳しく説明してある。参照されよ。

◇擾音 ゼウオン さわがしい音。ざわめき。

◇混沌 コントン 物事の區別の判然せざる状態。

◇衣すれ キヌすれ

◇氣配 ケハヒ けぶり

【鑑賞批評】

一 文筆を以て業とする作者は屢々机邊燈下に筆を執つて夜を徹する經驗を持つてゐるに相違ない。それらの經驗がこの一文となつたものであらうが、深夜から黎明時へかけての神祕な推移が、巧妙に細敘されてある。

◇時の區劃から言へば、正子は一日と次の日との境界であるけれども、徹夜する者にとつては此の境界は全く感じられない。自分にとつては午前二時頃までは前夜の連続である。――

敘述の第一段、草木も眠るといふ魔眠の時の敘述に入るに先だつて、昨日の生活の餘喘のまだ消え去らぬ午前二時頃までの夜の姿をうつしてゐる。

◇遠い汽笛の音、空氣の亂、何かしら動いてゐる物のどよめき、一日の生活の餘喘、それ等のものが大氣中に漂つてゐる。試みに戶外へ出て見よ。星の光はまだ人に親しみの色を帯びてをり、街路の空氣には人の息が交つてゐて、歸り遅れて飄々乎たる人影が犬と共に散在してゐる。――

そこには未だ「動き」がある。「生」の佛が残つてゐる。空には親しげな星の色があり、地にはやはらかな人の氣がそことなく漂つてゐる。これらが瞬轉して、人界のものならぬ悽愴な鬼氣を帯びて來るのは午前二時以後である。敘述は本題に入つてゆく。

◇そして午前二時頃から深い沈黙と睡眠が萬象の上に重くのしか、つて來る。すべて夜を徹する人々が――遊戯に心奪はれてゐる者や、仕事に縛られてゐる者などを除いて――何となく起きてゐるのを堪へ難く感じ出すのは此の時である。四五の友人相集つて談笑してゐるうちにもふと言葉がとぎれ心が沈んで、薄暗い影に鎖されるのは此の時である。(二八頁二行)――

こゝから以後、次の頁の「死と神祕の時間である。たゞ時計の針の止らないのが不思議である。」

までは、この魔眠時の神祕な萬象の昏睡を物語らうとするのであるが、象徴的な手法を用ひた優れた文章であるから、十分に味讀させていたゞきたい。

◇そしてこの死のやうな靜寂のうちに、天と地に跨る大きな影が垂れこめて、月のある夜は月の光を月の無い夜は夜の闇を嵐の夜は其の雨風を超自然的な帷のうちに抱きすくめる。その帷の襞や裾の奥から無數の神祕な眼がじつと覗き出す。(二八頁一二行)――

◇地上の生ある物皆は、人も獸も草も木もさういふ深みの底に沈み溺れて、蠱惑的な窒息に眠り入る。(二九頁六行)――

などの言ひ方が想像に働きかける効果の強さをよく會得させていたゞきたい。

二 魔眠の時はやがて一轉して「復活の戦き」の一時に入る。

◇そして冬ならば四時頃、夏ならば三時頃突然或物音が響く。身ぶるひに似た木の葉のそよぎ、ぼうと尻きれの汽笛の音、無意識的な犬の遠吠、又は何物とも知れぬ擾音、それ等の一つが不意に何處からともなく起つて來る、それが合圖である。沈黙と魔眠の底に凝りかたまつてゐた萬象が一齊にぞつと寒氣立つて來る。星の光がきら／＼とした凄味を帯びる。月の面がまざ／＼と磨

き澄まされる。或は濃く淀んだ闇がむく／＼と動き出す。空氣が恐しい勢で徐々に流れ出す。或は風の方向が一息に變る。そして地上のあらゆるものが震へながら肩を聳かす。無生のものが生の息吹に觸れて恐れ戦くに似てゐる。かく天地萬象が寒氣立つとともに、蠱惑的な鬼氣は物の深みに姿を潜めてしまふ。(二九頁一二行)――

精細な觀察と、尖銳な感覺とがこゝにも見られる。これは天地の靈が眼覺めんとして未だ眼覺めず、悪夢と現實の境界を彷徨してゐる神祕な時間である。これに續いて

◇その戦慄が暫く續くうちに、ふつと全く何故ともなくすべてが消え去る空虛の時が來る。眼覺めながら息を潜めた時刻である。萬象がむく／＼と起上りかけてまたとろりとやる時刻である。

(三〇頁一二行)――

三 そしてこの空虛な一時を境として突然輝やかしい黎明の交響樂が始まる。

最後の一段は、この黎明の開始を敘してゐるものである。こゝでも夜を擬人化した左記二三の美しい章句が発見される。

◇一時のとろりとした假睡から、はつと眼覺めて起上る萬象の寢間着の衣すれの音である。ほの

暗い夢と輝やかしい幻とが入交る氣配である。新に立上つて來るその幻は物の隅々まで訪れて、すべての閉ぢてゐる眼を見開かせる。(三三二頁初行)――

かうした言ひ方が想像に強く働きかけて美しい幻想を起させる效果に就いては前の魔眠時の描寫の中のそれと同じことである。

附記 この作者の文品を理解する一助に、左に某紙の「ざつろく」欄に載せてあつた一つの逸話を掲げておく。

一字一句もいやしくもせぬ克明な文章をものする人に、豊島與志雄氏がある。端麗な氏の風貌が、よくそれをあらはしてゐるが、氏がまだ郷里九州の小學校に通つてゐた「よき少年」の頃ほひ、或る日のこと先生が問題を出した。

『皆さん、この黒板を眞二つに分けるには、どうすればよろしいか……』

『物さしで計つて、正確に二つに分けて鋸でひきます。』

生徒一同異口同音にかう答へると、その時、豊島少年は突然立ち上つていつた。

『先生違ひます。鋸で引くまでは同じですが、その鋸屑を正確に、二つに分けなければなりません。』

ん……』

まさに梅檀は二葉より香ばしである。

四 神祕の日本

【作者の意圖】 茶道を背景とする日本獨得な審美的態度——即ち無遍の寂寞の中に沈潜して、そこにいみじき美の恍惚境を味は、うとする、他國に比を見ざる洗煉された藝術的態度を高調し力説してゐる。茶席は日本が創造した文化の一大形相である。そして古來日本に生まれたすべての優れた藝術を一貫するものは實にこの茶席の精神、幽寂を愛し孤獨を尊ぶ、特異な審美的精神に外ならぬ。と作者は説く。そしてこの神祕な心境がやうやく現代の日本の人々に忘れられようとするのを歎いてゐる。

【作者の個人的特徴及び作者の小傳】

卷四 一二「松の木の日」参照。

【解釋】

◇自己遍照 ジコヘンセウ 小なる我を以て宇宙の大我に合すること。

◇寂寞 ジャクマク しづけさ。

◇關白秀次公 三好武藏守吉房入道一路の子、母は豊臣秀吉の姉である。永祿十一年誕生、天正十九年秀吉の養子となり、關白となつた。後謀叛の疑をうけて、文祿二年二十八歳を以て高野山青巖寺で自刃して果てた。

◇曾て書物で讀んだ話

遺老物語備前老人物語に

「聚樂にて關白秀次、小倉の色紙をもとめ得給ひ、御座敷をあらため、色紙をひらきの御會あり。利休を上客として相伴に三人あり。頃は四月二十一日餘曉がたの事なりしに、風呂の御茶の湯なり。人々座敷に入ありけれども、短檠の火もなく、いかなる御作意ならんとおもひ居ける折柄、利休の居られしうしろの障子ほのくゝとあかるくなるを、不思議におもひ、障子をあけられければ、月影あかく御床のうちにほのくゝと移りけるまゝに、さればよと思ひにじり寄りて見れば、小倉の色紙の御かけものなり。その歌に「ほととぎす鳴きつるかたをながむればたゞ有明の月ぞ残れる」とあり。其の時利休その外の人々までも、名譽不思議の御作意かなと同音に感じ奉る。」とあるのが此の話の出所であらう。

◇床の間に懸けてある小さな色紙

「扱て定家卿小倉山莊にて百首の和歌を選ばれし事を世にいひ傳へたる説は東野州、宗祇法師に申しけるは、新古今集は通具・有家・定家・家隆・雅經等に仰下りて選り奉りけれど、此の時定家卿は父俊成卿の喪にこもりて其の選にあづかられざりければ、此の集なりて後、花やかなる歌多く入りて、實なる歌のすくなきを見て、定家卿心ゆかず思ひて、小倉の山莊に隠居せられし後、實なる歌どもを百首選びて、山莊の障子に、色紙に書いておされたるなりといへり」と、百人一首一夕話にあるその色紙であるが、これが二枚の屏風に、各五十枚づ、貼つてあつたのを、伊勢の國司が手に入れた。連歌師宗祇の弟子宗長が伊勢へ下つたとき、國司は宗長にこの屏風を二枚共與へた。宗長はそれを辭退して、一枚だけ貰つて歸つたが残つた一枚は、やがて火に遭つて焼け失せてしまつた。宗長の持歸つた五十枚は、その後諸家に分藏されて、世に残るのは二三十枚になつてしまつた。これが非常な高價を以て賣買されたものらしい。

◇銀鈴 ギンレイ 茶の湯のたぎる音を形容したのだ。

◇有明の月 アリアケのツキ 陰曆十六日以後は、月の出が遅いため、明け方になつても、月が

しら／＼と空に残つてゐる。それを指すのである。残月。

◇定家 テイカ 俊成卿の子、王朝時代の和歌の名人である。今廣く行はれてゐる小倉百人一首なども、この人が選んで、小倉の山莊の障子にはつて置いたものから始まつたのである。尙下註を見よ。

◇ほととぎす啼きつるかたを眺むればたゞ有明の月ぞ残れる とある夜のひきあけがたに、縁に出て何思ふともなく佇んでゐると、突然あわたいしい時鳥の聲が薄白む空を水のやうに流れて過ぎた。おやと思つてふりかへつて見ると軒の空に、ほつかりとうすい有明の月がわびしく眼にうつ、たといふのである。

◇誘致 イウチ 導き出す。

◇酵母 カウボ 酒を造るとき用ひる黴、こゝでは、文化を「産み出すもの」「造り出すもの」の意。

◇形相 ギヤウサウ 姿。

◇解脱 ゲダツ 逃れ出すこと。

◇生死一如 シヤウジイチニヨ 生も死もない、それらの關心を超越した境地。

◇利休 リキウ 千家流茶道の祖、泉州堺今市坊の人である。若い時から茶道に心を寄せて荒木道陳に學んだ。十九歳の時から紹鷗に従つた。織田信長に召されて、三千石を領したのが初めて、本能寺の變の後には豊臣秀吉に仕へた。有名な北野の大茶湯の時も、利休は前田徳善院玄以と、もに奉行となつてゐる。其の最期は、意外に悲惨であつた。即ち大徳寺の山門を建立し、これに自分の木像を置いたといふ科で秀吉の詰責を受け、遂に天正十九年二月二十八日死を賜うた。「人生七十、力圍希咄、我這寶劍 祖佛共殺。」これが辭世であつた。大徳寺の山門にあつたその木像は一條戻橋もとりはしに引出されて梟された。

◇さらにもう一つの挿話を

茶窓閑話に

「利休の朝顔の傳などと、古流にことごとく傳授にせしは、ひと、せ利休の露地に、朝顔を植ゑられしに、花の頃見事なるよし、秀吉公聞しめし、さらば明朝御覽あらんとて、即ちならせられしに「露地には朝顔一輪もなし。いと不興に思召しながら、小座敷へ御入あれば、其の色あざやかなる一輪を床に生けたり。こゝに於て公をはじめ、御相伴の面々まで、目さむるこゝちし給す。」

ひて、甚だ御稱美ありしと、是れを世に利休が朝顔の茶湯と云ひ傳ふ、これ事實なりしにや知らず。」

◇利休時代には朝顔は至つて珍しいもの

朝顔は由來支那から渡つて來た藥草である。始めて傳來したのは奈良朝以後の事らしい。昔は然しながら、花を鑑賞することはせず、たゞその實を採つて藥用に用ひた。古今要覽稿にも「この種は延喜のむかし、吳舶の載せ來りしが、今に傳はれるにて、本邦固有のものにあらず、故に、延喜式に、牽牛子丸五劑云々、又牽牛子三斤十三兩云々、右依前件造備、訖與臘月御藥同日進之など見えたり。」とある。傳來後數百年はその花も黒牽牛と名づける青碧色の花を咲くものと白牽牛と云つて實も花も共に白いものと、たゞ二通りの種類しかなかつた。それが寛文の頃から漸く花を鑑賞するやうになり、元祿の頃に入つて初めて、白・淡青・濃青・淡紅等の數種の花を生じたが、紅色のものはまだ無く、やうやく寛政から、文化、文政の頃へかけてこれを生ずるやうになつたらしい。

◇利休の庭 雍州府誌に

「千利休茶亭、在_二山崎寶積寺_一麓妙喜庵中、妙喜庵慧日山東福寺末院也、千利休構_三茶亭於斯庵_二而時々來棲_レ之、豐臣秀吉公亦屢有_二來臨_一、凡六尺三寸、床敷_三疊一帖_二其外有_二一疊_一、設_三爐於其處_二是謂_二一帖臺_一。世人之設_二一帖臺_一也、必以_二此茶亭_一爲_レ本而倣_レ之。」

◇不興 フキヨウ 不機嫌

◇其方 ソチ

◇妖嬌 エウケウ たをやかで、うつくしい。

◇見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ こ、はさみしい海邊の茅屋である。暮れゆく秋のたそがれ時、門に立つて遠く眺め渡せばこれは、また何といふ物寂しい景色であらう。一朵の花も眼に入らぬ、一葉の紅葉も眼にうつらぬ。天地はたゞ蒼茫と、うす青みて暮れてゆくのみである。

【鑑賞批評】

一 この一篇で作者野口氏が高調してゐるのは、茶道に依つて暗示される日本獨得の審美主義——孤獨と寂寞の中にのみ存する靈の恍惚境の持つ偉大なる價值である。作者は母國の藝術の本質に

深い洞察と同情とを持つてゐる人だ。彼は外人が彼に向つて日本獨得のものを問ふたびに、彼等を茶席の幽寂な雰圍氣の中に導いて、そこに見出さるべき美の神祕の最高潮を味得せしめようとする。

◇私は彼を飛石で路が附いてゐる所謂露路に立たせる。そして「こ、は外面的世界を捨て、自己遍照に入る通路だ。」と説明する。

◇「君はこ、に沈黙の祝福がある事を感じねばならない。私ども東洋人はすべての詩の最高潮を寂寞のなかに發見するのだ。寂寞の幽かな光に導かれて審美の恍惚に入るのだ。……こ、は孤獨に生きた無遍の住む所だ、眞實の個人主義を發見してそして宇宙の靈に合する所だ。」

◇「この燈籠の心の中には、眞理を照す所謂燈臺の灯がある。この光は人にどうして社會の狂瀾怒濤を忘れるかを教へるであらう。またどうして人生の廢墟と塵埃とを脱するかを教へるであらう。どうして私どもが清澄な默禱の雰圍氣を作るかを教へるであらう、又どうして茶道に入るかを教へるであらう。」(三四頁一二行)——

◇私はまた彼に茶席の床が地面に接近して低く作られてゐて、私共が自然を足下から眺めて敬禮

することが出来るやうになつて居ると語り、茶席の廂が低く作られてゐて、「この小暗い空氣は思想や想像を一點に集中させるに便ならしめる。」といふであらう。(三五頁四行)――

これらは皆如上の異國からの訪問者に對して作者が日本獨得の審美主義としての茶席を説明する言葉なのであるが、これに依れば、日本の審美的精神の特色は、凝集と單純化とにあるといふことになる。深く深く孤獨と寂寞の中に掘り下げて行かうとする態度である。西歐諸國の藝術に見られるやうな複雑な外延的な包容力の大きな絢爛さ、賑やかさに對して、これは誠に際立つた對照を成すものと言はねばならぬ。彼はともすれば無遍の實相を忘れて、諸法の複雑に酔はうとする。是は流轉する諸法の姿の底にたゞひとつなる實相の世界をしつかりと擱まうとする。そこに根本的なひらめきがある筈である。

たゞ見る一面の銀屏に墨繪に描く一聯の雁の竿、それだけの配景の中に、綿々たる秋夜無限の愁を語らうとするのが日本の藝術である。「古池や蛙とび込む水の音」寂たる古池の水の面に、ほとんと幽かに響く蛙の音、そこに無限の實相の世界を觀るのが日本の詩人の態度である。蕉門の高足其角は曾て「この句を飽足らずとして「山吹や蛙とび込む水の音」と作り代へたと言はれてゐる。

るが、其角にはその幽寂の中に見出す詩の最高潮を味ひ得るだけの用意がなかつたものと思はれる。

◇この茶席即ち茶道で暗示される日本の審美主義は、日本の古文化が極點まで發達したもので、自然と人生を融和させてそれを單純化させた日本人の態度は、彼等外國人がこれまで夢にも見なかつた所のものであらう。だから人が私に日本で一番特色あるものは何であるかと尋ねたならば、私は直に茶席を擧げる、否、茶席を背景とした日本人の審美的態度そのものを擧げるであらう。

二 次の節には、關白秀次の有明の色紙のために催した茶席のことを述べてゐる。後徳大寺左大臣の詠「ほととぎす啼きつるかたを云々」の和歌の幽趣を味得せしめんがために、秀次は折ふし春の四月二十日有明の夜を選んで茶席を催した。

◇薄暗い東風は茶席の軒端の露を拂つて、庭の樹木には朝の光線を恐れる夜の靈が蹲まつてゐたといふ事が出來た。茶席の中には燈火もともされず、靜寂がその全部を占領してゐた。耳を敬てると、茶釜から銀鈴のやうな響が來る、それは湯のたぎる音で、この物古い音律だけが茶席の寂寞を破る特權を持つてゐると思はれた。

あたりはひつそりとした暁闇、茶席の中には、かすかな灯の一點も見えぬ。深沈とひそまりかへる茶席の一箇所から、銀鈴のやうな松風の響がしてゐる。そのひとすぢ細々と立昇るリズムカ
ルな音ゆゑに、靜寂はひとしほにその靜けさを増す。人々の心はその銀のやうにうちふるふ幽かな音律を逐うて瞑想的な雰圍氣の中に導かれてゆく。

◇客人どもは欠伸を嚙みしめながら頭をあけると、何の豫告もなく突如と有明の月がすつと忍び込んで来た、其の微かに冴えた曙近き月の影が落ちてゆく所を見送ると、床の間に懸けてある小さな色紙の上に落ちてはつたり留つた。其の色紙には定家の能筆で、「ほととぎす啼きつるかたを眺むればたゞ有明の月ぞ残れる。」の歌が書いてあつた。(三七頁末行以下)――

軒もる有明の月の影が、はかなげに照す床の間の壁に、思はずも見出た定家の色紙「ほととぎす啼きつるかたを眺むればたゞ有明の月ぞ残れる」の一首。後徳大寺左大臣が、あわたゞしくも啼き過ぐる杜鵑のあとを追うてはしなく西空に、はかなくかゝる有明の月影を見出た時のその神興をそのまゝに周圍の風物として再現せしめた手際の見事さ。秀次の美に對する感觸の鋭どさを私等は感ぜずには居られない。

◇彼の態度は精細な詩の秘術に觸れたものである。この特殊な審美的雰圍氣を誘致し得た藝術的態度は驚歎に値する。洗煉し盡された文化の酵母から産れた詩的行爲とはこの事であらう。――
作者は秀次の審美的態度に斯う禮讃を捧けてゐる。そして、かうして日本特有の幽雅の藝術的態度を西歐のそれと比較して、

◇西洋は質より量に走る、又複雑の果は混亂に落ちる國である。西洋は、如何に自然を調節配列するかを知らない國である。西洋は如何に人生を整理するかを知らない國である。日本は西洋に如何に自然と人生を選択し單純化するかを教へねばならない。茶席生活を重要視した昔の文化は沈黙と孤獨との徳を教へた。量より質を重大視して小の中に大を發見する方法を教へた。あらゆる人生の完成は自己整理から始まらねばならないと教へた。そして茶席からそれが具體化したものに外ならない。(三九頁一二行以下)――

と言つてゐる。事實かの西歐の藝術には、外擴的な傾向が非常に著しい。しかし複雑を複雑を求めた結果は却て深味を缺くことになる。絢爛目を眩する油繪の大額は、所詮その内容の深味に於て日本の藝術家の手に成る墨繪の一筆がきに及ばぬのである。劇藝術に於てもさうである。彼

の國の劇場を訪れる者は、誰しも登場人物の口をついて出る流麗流る、如き科白の美しさに酔はされぬものはあるまい。佛蘭西に於て殊にそれが著しい。彼等の劇場に於て舞臺の上で科白の流れの途切れる静寂の瞬間を求めようとすることは非常な困難である。而も吾々が切に心を打つゝあゝるものを感じるのは、かゝる雄辯に對するよりも、日本の劇藝術家の所謂、腹藝？その千言萬語の科白にまさる沈黙の主藝に魅せられた場合が多い。更に舞踊に於てこれを見よ。寸時の静止もなく踊り狂ふバレエの動き、自在な顔面表情を誇るミミックの主役もなほ且表はし得ぬ神祕と深味とを、吾が能樂の簡單なさす手ひく手や作りつけられた假面の表情やが見事に表し得てゐることはありはしないか。かうした日本藝術の眞精神は、茶道に於て最もよく發見される。彼等は皆茶道の精神を以て其の精神としてゐるのである。

◇私は茶席の藝術が放散する雰圍氣に觸れて、人生の外面的世界から解脫して、無礙自在な永劫を擱むことが出来るやうな氣がする。言ひ換へると私も生死一如の境地が茶席で發見せられるやうな氣がする。……茶席は日本特殊の創造であるけれども、確に世界的價值がある。よしんば、今日の西洋が日本の茶席藝術を理解しないと、明日の西洋人の理解がそこへ及ばないと

は限らない。私は茶席藝術を高唱して日本の審美を説くものである。(四〇頁二一行以下)——
以上は茶席の持つ沈黙の美德を禮讃したものである。こゝから作者は筆を一轉して、茶席の「獨唱的態度」と作者はいふ孤獨の美德を論ぜんとする。そしてこの美德を語らんとするに先だつて、作者は一つの例話を擧げて、茶道の祖千利休が、如何にこの孤獨の美と權威とを體得してゐたかを述べてゐる。彼は太閤を朝顔の茶に招待しながら、滿庭の朝顔を悉く切り捨てさせてしまつた。めあてにして來た朝顔の一輪も見えぬために太閤の不興は甚だしかつた。それが、いざ
◇茶席へ入つて座に着いてその顔を床の間の方へ向けると、朝顔の花一輪が、妖嬌たる姿をそこから顯はして居つた、恰かも忘れられた日光の一片が床の間に輝いて居るといふやうな工合に見えた。

この利休の態度が藝術的に優れてゐる所以は、花の全部を庭から捨てさせて只一輪の朝顔に孤獨の權威を見せた點にある。これは絢爛を通り越した枯淡の域である。

◇此の態度は九十九枚の繪を焼いて一枚だけ取つて置く美術家の態度である。私は光悦や宗達や光琳はこの態度の人であつたに相違ないと思ふ。庭の朝顔を捨て、仕舞つた利休の態度は、九十

九の作を捨て、一つの發句だけ残さうとする俳人の態度である。私は確にこの態度こそは、日本の永い文化が産んだ最も偉大なもので、優に世界に誇るに足るものと信ずる。(四三頁八行)——
複雑の結果散漫に陥り易い西歐の藝術と違つて、單純化と凝集との極そこに一種の象徴的な藝術を生む日本の藝術家の特異な態度をば作者はかう言つて禮讚し推賞してゐる。

◇床の間の上で一本の草花が歌ふ獨唱に何たる孤獨の權威があるであらう。この孤獨は感激が靜止した心理状態で、その歌ふラブソデーには麗はしい抽象的な神祕がある。暗示がある。その中から精神的雰圍氣が夢のやうに幻のやうに放散せられてゐる事を感じる。獨唱の生活には自己の保全がある、個人格の充實がある。(四四頁二行以下)——

同じき一つの感激も、西歐の藝術にあつては外に擴がつて繚亂たる百花の姿となつて表はされる。それが日本では、内に深められて孤獨の草花の獨唱として歌はれる。この靜の中には測り知るべからざる無限の動を藏してゐる。これは壓縮され凍結せしめられたる「動の極」の姿である。一つの大きな象徴としての意義を有してゐるのである。

◇私ども日本人の古い文化が産んだ藝術家は、畫家でも、歌人でも、俳人でも、悉く獨唱生活の

信者であつた。又嘆美者であつた。其の生活の中から永遠無終の藝術が生れたのである。……
獨唱家なればこそ、利休は偉人であつた、光悅は偉人であつた、芭蕉は偉人であつた。獨唱的態度から、日本の茶席は生れた、繪畫は生れた、俳句は生れた。(四四頁末行以下)——

かくて日本のあらゆる藝術が世界に類ない深さと偉大さとを有する所以のものは、彼等が悉く寂寞を愛する特異な審美的精神の上に立脚してゐるからなのである。日本の藝術から「寂」の精神を抜き去つたならば何者が残るか。この幽寂を愛し孤獨を愛する精神を失つた日本は、藝術國としての亡骸である。しかも現代の日本は、徐ろにこの藝術國の亡骸と化しつゝ、あるのだ。作者はそれを浩嘆して次のやうに結んでゐる。

◇寂寞のうちに靈の無礙自在を發見して人生の恍惚に入るといふことは、日本人が見出した詩の神祕でなくて何であらう。今日の日本人がこの神祕を失ひつゝ、あることを私は遺憾に思ふ。一度この神祕を失つたが最後、二度とそれを取り返すことは出來ない。日本人は變つた神祕を發見するかも知れないが、その時が来るまで詩の上での亡國と言はねばならない。私は亡國民となりたくない、私はどこまでも私共祖先の創造した詩の神祕を握つて居たい。(四六頁九行以下)——

五 滑稽の大きな力

【作者の意圖】これは作者の様々な思索の断片である。「流行と不易」では、俳人の間に行はれた流行と不易との説に就いて、これに對する芭蕉の態度を考察してゐる。「滑稽の大きな力」では、よき滑稽といふものが如何に重大な使命を人生に持つてゐるかを語つてゐる。笑ひを撒き散らすばかりが滑稽の能事ではない。束縛と暗黒との中から人間を解放することが、その最も大きな任務なのだ。と説くのである。「淺瀬を奔り流る、水のごとく」では、芭蕉の如上の言葉に深い共鳴を感じる自分の心持を語つてゐる。そして最後の「言葉」は、作者に取つて最も親しいものであるべき「言葉」に就いての随想である。

【解釋】

◇二つを結び合せて詩の完成に近いと考へたものは芭蕉であつたやうに思ふ。(四七頁末行)——
「師の風雅に、萬代不易あり、一時の變化あり。此二に究り、其本一なり。其一といふは風雅の誠なり。不易をしらざれば實に知るにあらず。不易と云ふは新古によらず、變化流行にもか、はら

ず、まことによく立たる姿なり。代々の歌人の歌を見るに代々其變化あり。又新古にもわたらず、今見る所昔見しにかはらず、あはれなる歌多し。是先づ不易と心得べし。又千變萬化するものは自然の理なり。變化にうつらざれば風あらたまらず。是に押うつらずと云ふは、一端流行に口實の時をえたるばかりにて其誠をせめざる故なり。せめず心をこらさざるもの、誠の變化を知ることなし。只人にあやかりてゆくのみなり。せむるものは其地に足を据ゑがたく、一步自然にす、む理なり。行末いく千變萬化するとも、誠の變化は皆師の俳諧也。假にも古人の涎をなむることなかれ。四時の押うつる如く、物あらたまる。みな斯のごとしと云へり。」(三冊子、赤双紙)
「新しきは俳諧の花なり。ふるきは花なくて、木立ものふりたる心地せらる。亡師常に願にやせ給ふも新しみの匂ひ也、その端を見しれる人を悦びて、我も人もせめられし所なり。せめて流行せざれば新しみなし。新しきは常にせむるがゆるぎに、一步自然にす、む地より顯はる、なり。「名月に麓の霧や田のくもり」と云ふは、姿不易なり。「花かと見えて綿島」とありしは新しみなり。」(三冊子)

「我是を聞けり。句に千歳不易の姿あり。一時流行の姿あり。此を兩端にをしへ給へども、其本

一なり。一なるはともに風雅の誠をとればなり。不易の句を知らざれば本立ちがたく、流行の句を學ばざれば、風あらたならず。よく不易を知る人は、往くとしておしうつらずといふことなし。たま／＼一時の流行に秀でせるものは、只己が口質の時にあふのみにて、他日流行の場に至りて一步もあゆむことあたはずと。」(菊の香)

◇滑稽の力によつてそれが開かれた(四八頁五行)――

閉された岩戸の前で、天鈿女命が、滑稽な身振をして踊つたことを指すのである。あまり面白さうな神々達の笑ひ聲に、つひ釣り込まれて、天照大神がそつと戸を細目にあけて御覽になるところを、隠れて待つてゐた手力男命(たぢからをのみこと)がいきなり岩戸を投げ除けて大神を外へと御連れ申上げた、そのことは古事記に詳しく出てゐるとほりである。

◇寓意 グウイ 底に何かの意味をかくすこと。

◇深く入つて浅く出るといふ藝術の境地(四九頁三行)――

柿晋問答に

「去來曰。發句付句ともにだん／＼深く案じ入りつ、人に伺ふに、趣向はさもあらんなれど、一

句の上聞えぬよしを答ふ。是を聞得ざるかと人を疑ふは僻ごとなり。我は初發より趣向を胸に忘れざれば、深く案じて、句面に趣向の浮ばざるに心づかぬ故なり。是等執心に案ずる上にまゝ、これあり。俳諧の修行地は、浅きより深きに入り、深きより浅きに戻るべし。とは先師も教へ置かれしなり。」

◇潑刺 ハツラツ 生き／＼としてゐることの形容。

◇賦與 フヨ あたへる

◇さび(五一頁二行)――

「野明曰。句のさびはいかなる物にや。去來曰。さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず、たとへば老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても老の姿あるが如し。賑なる句にも靜なる句にも有るものなり。たとへば、

花守や白きかしらをつきあはせ 去來

先師曰。「さび色能くあらはれたり。」(去來抄修行教)

◇うつり、響、にほひ、(五一頁二行)――

「先師曰。發句は昔よりさまざまかはり侍れど、付句は三變に止れり。むかしは付物を專とす。中頃は心付を專とす。今はうつり響にほひ位を以て付くるをよしとす。杜年曰。いかなるを響句移といへるや。去來曰。支考等あらましを書出せり。是を手に取りたるごとくにはいひがたし。今先師の評をあけてさとさん。他は押して知るべし。」

赤人の名はつかれたり初がすみ 史邦

鳥もさへづる合點なるべし 去來

先師曰。うつりと云ひ、にほひと云ひ、まことに去年中三十棒を受けられたるしなりと悦び給ひけり。爰におもへば、にほひと云ふも、うつりと云ふも、わづかに句作のあやにして、のらぬとのさかひなれば、冷暖自知の時ならではさとし明むること有るまじ。此句もし「赤人の名もおもしろや」とあらば、「鳥もさへづる氣色なりけり」とも作るべきを「名はつかれたり」と云ふより「合點なるべし」とは相うつりゆく處味ひ見らるべし。響は打てばひやくがごとし。譬へば

くれ縁に銀土器をうちくだけ

身ほそき太刀の反る方を見よ

先師、此句を引きて教ふるとて、右の手にて土器を打ちつけ、左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ひける。一句くにおもむきのかはることなれば、言語に盡しがたき所、看破せらるべし。」（去來抄修行教）

◇おもかけ（五一頁三行）——

「杜年曰。面影にて附ると云ふはいかゞ。去來曰。うつりひき句ひは附様の鹽梅也。おもかけは附けやうの事也。むかしおほくは其事を直に附けたり。それを面影にて附るといふは、

草庵にしばらく居ては打やぶり

いのちうれしき撰集の沙汰

初は「和歌の奥儀はしらす候」と附けたり。

先師曰。前を西行能因などの境界と見たるがよし。されど直に西行と附けんは手づ、ならむ。たゞ面影にて附くべしとてかく直い給ひぬ。いかさま西行能因の面影ならんとなり。又人を定めていふのみにあらず。たとへば、

發心のはじめにこゆるすゝか山

内蔵の頭かと呼ぶ人は誰ぞ

先師曰。いかさま誰ぞがおもかけならんとなり。」

◇しをり、細み(五一頁三行)——

「野明曰。句のしをり、細みとはいかなるものにや。

去來曰。しをりは哀なる句にあらず。細みはたよりなき句にあらず。しをりは句の姿にあり。

細みは句のこゝろにあり。是も證句をあけて言は、

十團子とだんこも小粒になりぬ秋の風

許六

先師曰。此句しをりあり。

烏どもも寝入てゐるか余吾の湖

路通

先師曰。此句細みありと評し給ひしと也。」(去來抄修行教)

鑑賞批評】

滑稽の大きな力

この一章で作者は、滑稽の必要さを力説してゐる。然しながら、それを洗煉されたユウモアにまで深めねばならない。徒らな美を撒き散らすことは、決して滑稽の本領ではない。滑稽は人間の生活に快い「ゆとり」をつくつてくれる。不自由な束縛から人間を解放してくれる。その生活から一切の闇黒を逐つてくれる。吾々はあまりにも陰惨な闇黒な世相と親しみ過ぎてゐる。吾々の靈は朗らかな、明るい生活を憧れ憧れて止まぬ。しかもこの朗らかな世界を人間の上に持ち來らし得る唯一の魔力は「笑」である。滑稽である。

由來笑を解し得ぬ國、笑を解し得ぬ時代程慘めなものは又とあるまい。これは西歐に見るならば、半世紀前の自然主義勃興時代の大陸諸國はまさにこの笑を解し得ぬ時代であつた。人生の暗黒面にのみ、鼻の如き眼を注いで、求めて懷疑と絶望に走り、人間生活の光明面は一切否定し去つて、白日の下大道の眞中に塵芥箱を引くり返へした様な不愉快な時代を現出した。更に吾々の日本では——吾々の日本はどういふものか、滑稽を蔑視する國である。笑を否定する國である。尤も昔からさうではなかつた。太古の頃の吾々の祖先は、心から笑を樂しみ、笑に親しみ得た人達であつた。現世的な樂天的な朗らかな人生觀を持つた民族であつた。それが、何時の頃よりか笑

を忘れてしまつた。喜怒哀樂を面にあらはさぬといふ克己的な修養のために硬化したその顔面筋肉の奥で朗らかな笑は死んでしまつた。萬葉の一卷を繙いて見ると、到る處に吾々は青空に高朗と響き渡る快笑の聲を聞くやうな素晴しく愉快な諧謔歌にぶつかる。あの我々の太古の祖先の因はれざる哄笑を、吾々は萬葉以後の歴代歌集の何處に求めよう。悲哀な佛敎的厭世觀と、嚴肅な支那道德の教律とが、この民族の樂天的性格を矯めてしまつた。恐らく各國の文學を比べてみると、日本ほど眞正の意味に於る笑の文學に乏しい國はあるまい。このまゝで笑を持たぬ慘めな國民となりをはつてよいものであらうか。吾々は努力して、祖先のあの朗らかな笑を取り返さねばならぬ。卑屈な笑や、淺薄な歪んだ笑であつてはならない。のび／＼と素直な、純らかな笑でなければならぬ。

淺瀬を奔り流れる水のごとく

この章にも前章と同じやうに、明るいユウモアの世界に憧れる作者の心持は強く出てゐる。創作の心持は物に澁滞してはいけない。淀んではいけない。純らかな光に輝き流れる淺瀬の水、たとへばそれにも似たる生命力はかうした心持から生れて来る。しかも、この境地に入る唯一の鍵は

ユウモアだ。

言葉

優れた詩人は言葉の眞實の生命を、我が魂で直接に觸れて感じる。その一つ一つの句をも色をも詩人は悉く知りつくしてゐる。詩人にとって言葉はいとほしい生き物だ。

深く知り、深く親しむといふことは、とりも直さず、深く愛するといふことでなくて何であらう。この意味で詩人は言葉を熱愛する。

言葉に寄せる詩人の深い「いとほしみ」を、これをこの節ではまづ第一に味はせなければならぬ。

◇詩を新しくすることは、私に取つては言葉を新しくすると同じ意味であつた。

◇往時を追想すると、言葉は弄ばれ、磨りへらされ、踏みにじられ、意味もなしに繰返されてゐた。そこには何等の言葉の愛も見出されなかつた。

◇「春」といふ言葉一つでも、活きかへつて來た時の、私のよろこびはどんなだつたらう。——
——ここには深い愛着がある。

◇唯本質に對する感じを新鮮ならしむることによつて、それを直接に私達の生命からつかんで來

ることによつて、僅かに言葉の魂を甦らせることが出来よう。

◇蕉門の諸詩人が言葉の感じの鋭さ。「わび」「さび」「にほひ」「ひびき」「うつり」「おもかけ」「しをり」「それから」「細み」などの言葉の感情とその陰影を見よ。

◇舊い言葉を壊さうとするのは無駄な骨折りだ。ほんたうに自分等の言葉が新しくなれば、舊い言葉は既に壊れてゐる。――

ここには深い洞察と理解とがある。

一つ一つの言葉の、ほんのかすかな表情の曇りや輝にも詩人の心は痛々しいまでに敏感になつてゐる。

六 岳 の 日 没

【作者の意圖】 塵寰を超絶した標高何千米の高山にあつて、この世をば紫磨黄金色に一面に彩り輝かす夕榮の美にうたれて、夢幻境――この世ながら天國か極樂世界に在るの思ひをした作者の體驗を力強くうたひ出したのである。

【作者の個人的特徴】

碎花の詩にはコスモポリタンとしての哀愁や寂寞がある。「時代の手」「登山行」には旅の詩殊に山岳を歌つたものが多い。放浪的な詩人、自然に接してそこに自己を見出す孤獨の姿がある。しかもこの自己燃焼と深い愛情が動き、思想の大きさが現はれてゐる。そして碎花の詩は貴族的庶民ともいふべきものである。(現代の詩史と詩講話――井上康文)

前記でも十分その傾向やら特徴はうなづかれるが、更にもつと、本課の詩の解釋鑑賞に當つての適切な示唆をば、「孤高の詩品」と題した山崎泰雄氏の批評に聽かう。

――富田碎花氏著「手招く者」を読む――

こゝに現下の詩が、覺えず振返り、驚歎の聲を洩らさなくてはならないものがある。山岳による詩篇を満載して出た「手招く者」である。富田碎花氏の名はこゝ、暫く聞かれな勝であつたが、氏の思慕なる山岳は恰も氏自身の姿の表象として、怒號に倦んだブラック街の北空に、鎖ざ、れた霧を破つて脈々たる高邁の形を淡青色に君臨させた。この眺はブラック街の崇敬であり、勿體ない程の背景でなければならぬ。

山岳は正に氏によつて地理的に適合せる位置であることを感ぜしめられる。自然のチャペルとしての山岳に勤行の漂泊をつゞける氏の黒く小さい影は、それ自身尊い黙示として一點の涼を詩界の混沌裡に落す。凡そ我等二つの宿命を擔ひ、その一つのみ傾き陥らんとする時、バランスの機微は茲にあつて碎花氏は比例的強度を以てわれらと呼ぶのである。耳を傾けなければならぬ所以である。

自然人としての碎花氏の敬虔なる、かつ熱烈なる精神は、その聖地を探求すべく遂に標高何千メートルを巡禮せしむるに至つたのであらうか、まことに山岳巡禮者として氏ほど本質的な人は私は未だ知らなかつたと共に、その本質の適合地である山岳に於ける氏の歌が、その聲が如何に純

化され、高調され整美されてゐることか。

身はやうやく乏しくなつた草を吹く風のたましひか

たゆたふのでもなければ

とゞまるのでもなし、

たゞ念おもひをあつめるのは

次ぐ一步である、

明るい空氣を鮮かに分けてのぼる次の一步である

「絶嶺近く」

神への彼の齋いきは即ちこれではないか。「死の誘惑」にかゝれたるあの歌

登高にありて、死は

むしろ親しき兄弟の關係を以て

人を撫愛する。

「死の誘惑」

ことを歌へる如きは、全く等閑視されてゐる人の睿智の美しい叫びであることを省みなければならぬ。登高が象徴する氏の想念の歩みはいみじくもこの境地に達し得てゐるであらう。私が狂

喜させられた絶唱「幻の墓」の如きは、氏のかゝる神人合一の境が尊いまでの美しさによつて描き出される。

燃え滾もぎる大地の核心が

悠久の蒼穹に對つて

話しかける言葉は

かくも冷たい傳道に依るのであるか、

回教の苦行僧の

尖塔からの祈禱が

空しく沙漠の風に散るやうに

私が描く幻の墓は

氷霧の空間に

その容を幽顯いっけんする。

「幻の墓」

碎花氏の渾然たるこの涅槃の幽顯はもはや衆愚への啓示ではなく、現實の奇蹟、人間に發せしめ

た至高の幻想である。批評の及ぶ所ではあり得ない。遮莫、われらに同じく無我の微笑を頷つ詩篇も洩し難い。

冷めたく燃え狂ふ夕陽のなか

閃き光るは岳樺たけかんばより散る葉か、

否、

否、

高嶺の蝶のありとしもなき風に

舞へるなり、

二つ、三つ、また五つ…… 「岳の日没」

山岳の巡禮者の歌は縷々としてつゞく。「氷樹の原を過ぎて」の矜持、「夕の祈禱」(現代女子文學新鈔卷二第一四課所載)の靜和、「犠牲」の熱烈、等々。

……こゝに碎花氏の詩を天衣無縫と呼ぶより仕方のない完全さが見られる所以である。神祕めいた言草をすれば、山岳が、神が、碎花氏の口を藉りて歌ふのだ。換言すれば實感の強壓が、か、

る言葉の不思議を見せるのではあるまいか。態度としては極めて自然な寛やかなもので、典型的な發想である。や、朴訥なリズムに乗るこれらの詩は、凡そ現在の舊人新人の群を飛び抜けた、一寸及ぶもののない孤高の詩品を提示してゐる。(炬火——山崎泰雄)

【解釋鑑賞】

◇やまなみ 山脈。

◇果つる陽 入り日

◇さてもゆかしさよ 何といふ美はしさ、なつかしさ、莊嚴さであらう。

◇灼鐵 シヤクテツ

◇この世のものならぬ 此の娑婆の物とは思はれぬといふ意味で、即ち極樂世界か、天國なんかにだけ見られる。

◇匂ひ 美しい色彩。

◇山の子 山岳巡禮者。單なる「山中住ひの者」の意ではない。

◇物思ひに……その美に打たれて驚歎の極、口を閉ぢ目を閉ぢて沈思すること久しい。

◇みにくき人生の相 喜怒哀樂愛惡欲の七情にかきみだされ、清まる時なく、休まる時なきけがらはしい下界の生活の實相。

◇この境にまで……つまり、下界俗界の一切の事を放下し、忘却して、法悅境にひたつてゐるといふこと。

◇冷たく狂ふ……この句以下終りまでは、上記の如く莊嚴美にとろけ込んでゐる時、下界の物であり、しかも俗物中の俗物ともいふべき蝶の戯れにはつと我に返らせられて、やはり「われは臚裏が大地にくつついつてゐる人間であつたなア」といふ自覺によりがへらされたといふ淡い一種の幻滅觀を歌つたもの。

七 水が生きてゐる

【作者の意圖】 時代は徳川末期、尊王攘夷黨と開國佐幕黨とが、血腥い争闘を續けてゐた維新前後のころ。嘗ては甲州勤番をつとめた旗本の新知識駒井能登守が房州洲崎に世を避けて、西洋流の造船術と砲術との研究に没頭してゐる隠れ家へ、漂泊の畫師田山白雲がひよつこり訪れて來た。白雲は熱情的な多血的な快男兒である。駒井に今度の小湊滞在中の收穫を語るうちに遂に話に熱して來て、白雲獨特の、ひどく特色のある藝術論を述べ立てる。即ち、天地間の森羅萬象には悉く生命が宿つてゐる。彼等には生きた七情の表はれがある。小湊の濱に寄せる浪は、怒りもし、戯れもし、靜養もする。い、や、そればかりではない。かくして浪は、或所では諸法實相を教へ、或處では他生流轉を教へ又或處では歷劫不思議を教へさへもする。と言ふのだ。この白雲の藝術論がこの篇の主題になつてゐる。

【作者の個人的特徴】 中里氏の文章の特徴は、その諄々として教へて飽かぬやうな、粘りの強い、調子にある。そしてその底には、いつも微かな一脈の詠歎味を藏してゐる。ちよつと外に類のない

文體である。

作者の思想に到つては、純然たる東洋的思想である。佛教の大乗的思想から來たそれである。「大菩薩峠」を書くに當つても、作者は人間の業カルマの姿を如實に描くといふ眞摯な態度に終始してゐる。この作品の底には作者の深い佛教的な人生觀が、脈々として流れてゐる。大菩薩峠はこの點だけでも、所謂大衆文藝なる説を以て律すべき作品ではない。

【作者の小傳】 明治十四年東京に生れた。「黒谷夜話」「高野の美人」「大菩薩峠」等の作がある。

【解釋】

◇洲崎 房總半島を縦貫する一聯の山脈が、西に伸びて太平洋の荒海に没入するところ、突兀たる岩石は澎湃たる怒濤を嚙んで、見るも物凄いやうな光景を呈してゐる。館山町の西二里半、西岬村大字洲崎の岬角、それが本篇の舞臺になつてゐるのだ。

◇白雲が大兵な男であるので 白雲の風貌を説明してゐる一節を引いて見よう。

「やがて以前自分が梯子乗をしてゐた處へ來て見ると、其處に店を張つてゐるものがあります。それは一人の繪描きが露店を張つて、通る人の求めに應じて、様々の繪を描いてゐるのであります

七 水が生きてゐる

す。處が、この繪描きが、風采からして頗る變つてゐます。六尺豊かの筋骨逞ましい鬚男で、髪は結髪にした上から、手拭を頬かむりし、眼光なか／＼物すごく小刀を前半にし、大刀は後ろの柳の木へ、戸板を結びつけたしきりへ立かけて置いて、その中へあぐらを組んで、頬に繪筆を揮つてゐるのが、一種異様に見えますから、米友も思はず足を留めてその前に立つてゐました。

「濟みませんが鐘馗様を一つ描いて下さいな」、町家のおかみさんらしいのが頼みに來ると、「宜しい」

繪師は、さつさと紙を展べて、縦横に筆を走らせ、見る間に悪魔除の鐘馗様を作り上げてしまふと、おかみさんは喜んでそれを受取り、いくらかの鳥目を紙に包んで去りました。……その逞ましい筋骨といひ、兩刀を離さない處といひ、その女房の品格のある處といひ、たしかに變つた繪師夫婦であるが、さりとは落ちぶれ過ぎたと哀れを催すものもありましたが、米友はその繪師が描きながつてゐる繪筆の勢が馬鹿に氣持がい、のでお得意柄、名人の使ふ槍でも見るやうな氣持でその筆勢に見惚れて居りました。感心な事に宇治山田の米友は、何事に限らず、藝の神髓を見るのが好なのです。生な奴がキザな眞似をすれば、この男は矢庭に立つて叩きのめしたくな

る病があると共に、事の妙境に觸る、を見て取つた時には、我を忘れて心酔するの稚氣があるのです。」（註米友と云ふのは、もと宇治山田で乞食をしてゐた天性の槍の名人で、いささか淡路流の槍の手ほどきを受けただけ、あとは學ばずして自得した妙手だが、背の至つて低い河童のやうな形相をした痛快な男なのである。）

◇着慣れない筒袖（五五頁末行）――

「頭巾を取つて椅子に腰を卸した能登守を見ると、姿も形も大分前とは變つてゐる事が分ります。先づ其の髪の毛を、當時異國人のするやうに散髪にして、眞中より少し左へよつた處で綺麗に分けてありました。それから後の襟へか、つた處まで長く撫で下した髪の毛の末端を鏝を當てたものかのやうに軽く捲き上げてゐました。身につけてゐるものは筒袖の着物と羽織に太い洋袴を穿いてゐました。此の人としては斯ういふ形をする事も有りさうな事だけれど、其の當時にあつては破天荒なハイカラ姿でありました。」

◇小湊 日蓮上人の生れ故郷、安房國前原灣の東北岸にあるわびしい漁村である。この邊から嶮岩一帯遠く大東崎の方まで連つて柱のやうな大岩がよき／＼と突立つてゐる荒涼たる海邊であ

る。

◇破天荒 ハテシクワウ 未曾有な

◇脈々と うね／＼と絶えず

◇髣髴 ハウフツ よく似たさまにいふ語。××にそつくり。

◇貴重な研究(六一頁初行)――

「房州の洲崎で船の建造に一心を打込んで来た駒井甚三郎――その船はいつぞや柳橋の船宿へ、その頃日本唯一の西洋型船大工といはれた豆州戸田の上田寅吉を招いて相談した通り、シコナと千代田型とを参考にしして、これに駒井自身の意匠を加へた西洋型長さ十七間餘、幅は二間半、馬力は六十、仕事は遅れて来た寅吉の弟子二人と附近の漁師の若い者が手傳ふ。終日工事の監督に身を委ねて来た駒井能登守――ではない、もう疾の昔に殿様の籍を抜かれた駒井甚三郎。夜は例によつて遠見の番所の一室に籠つて、動力の研究に耽つてゐる。

◇音律・音相 音律は音の高低、音相は音の音色である。

◇諸法實相 ショホフジツサウ 下註を見よ。

◇他生流轉 タシヤウルテン 下註を見よ。

◇人間が生きてゐる!」と、腹のどん底から動かされたのは其の時です。(六六頁初行)――

「九月十二日に御勘氣を蒙つて、今年十月十日佐渡の國へまかり候ふ也、本より學文し候ひし事は、佛教をきはめて佛になり、恩ある人をもたすけんと思ふ。佛になる道は必ず身命を捨つるほどの事ありてこそ佛にはなり候ふらめと推量らる。既に經文のごとく、「惡口罵詈杖瓦礫數數見擯出」と説かれて、かかる目に値ひ候ふこそ、法華經を讀むにて候ふらめと、いよく信心もおこり後生も頼もしく候ふ。死して候はゞ必ず各々をも救ひたてまつるべし。天竺に師子尊者と申しし人は、檀彌羅王に頸を刎ねられ、提婆菩薩は外道につき殺さる。漢土に竺の道生と申しし人は、蘇山と申す所へ流さる。法道三藏は面に火印をやかれて、江南と申す所へ流されき。是皆法華經の徳、佛法のゆるなり。日蓮は日本國東夷東條安房の國、海邊の旃陀羅が子也。いたづらに朽ちん身を法華經の御故に捨てまゐらせん事、あに、石に金をかふるにあらずや。各々歎かせ給ふべからず。」

これは「佐渡御勘氣鈔」の一節であるが、このあたりを朗誦して見ると、實際白雲ならずとも

「人間が生きてゐる！」と叫びたくなるであらう。

【鑑賞批評】

一 この篇で、最も主要な役目を勤めてゐる人物は、繪師田山白雲と、砲術家駒井能登守である。否寧ろ登場人物はこの兩人だけであるといつた方が妥當らしい。ところがこの兩人には、外面的にも内面的にも大きな相違がある。態度・氣質の相違もさうであるが、更にもつと本質的に、性格にも興味にも殆ど氷炭相容れないといつたやうな相反した傾向を示してゐるのである。それであるが、この兩人は互に相手の人物を尊敬し合つて居る。氣持のいい、場面である。兎に角この兩人の持つてゐる相反した傾向の表はれを、この一節の中から探り出させて見ることにする。

◇「風呂がわいたさうですが、お入りなさつてはどうです。」

「いや、それは有難い。何分この通りですから……」

白雲は喜んで立上りました。久しく湯に入らなかつたので、身體がうざついて來たと見えお辭儀も忘れて立上り。

「遠慮なしに頂戴ませう。」

田山白雲は天真爛漫な、小兒のやうな性格の人である。駒井が落着いた水のやうな性格であるのに對して、際立つた對照をなしてゐる。風呂と聞いて喜びに「お辭儀も忘れて立上」つたあたり、この人の無邪氣な笑ひ顔まで偲ばれる。兎に角、淡泊な、竹を割つたやうな性質で、それで殉情的な火のやうな所のあるこの人の風格は、早くもこの數行の中に示されてゐるのを感じる。

◇風呂から上つて、駒井甚三郎の衣裳を着せられた田山白雲の形は、珍妙なものとなりました。それは白雲が大兵な男であるので、駒井の普通の丈が合はず、殊に着慣れない筒袖が見た眼よりも着た當人を勝手の悪いものにして、ちよい／＼肩をすばめて見る形が駒井を笑はせる。――

白雲は商賣柄にも似合はない六尺豊かの大兵で、無精髭を生やした恐い顔の人物である。その大兵の堂々たる格幅に、他愛もない小兒のやうな無邪氣さが溢れてゐるところは、實に何とも云へない愛嬌である。「ちよい／＼肩をすばめて見る」恰好、かういふことがこの人をたまらなく可愛いものに見せるので、圖體が大きいだけそれだけある心安い親しみと、頼もしい心持とを起させる。

◇「小湊の濱邊は不思議なところで、あそこに立つて眺めてゐるとあらゆる水の變化を見ることが

出來ますな。……生きて七情を姿に動かしてゐるといふことを確實に感賞せずには居られませぬ。(五六頁一二行以下)――

白雲はかうした小兒のやうに純眞な感受性を持った男なのである。因襲の俘となつて純らかな童兒の魂を失つた人にとつては、白雲のかうした話は寐言に過ぎない。藝術は永遠の童心からのみ生れ得る。白雲は本質的に藝術家であつたのである。

◇波濤の怒は此の世に見る最も壯觀なもの、一つですね。堂々として前路における何物をも眼中に置かずに押しかけて來るところが壯觀です。來つて物に當ると怒つて吼えます。さうしてたとひ亂離骨灰に崩れても、崩れる其の事が壯觀たることを失ひませぬ。忿怒の諸天は怒のうちに威相と慈愛とを失はないものですが、波濤の怒はそれに似てゐますな。われ／＼に壯觀を與へて威嚇を弄さない。戰鬪を教へても執念を残さない。巨人の心胸は、さながら怒濤そのもの、やうです。(五八頁初行以下)――

白雲が壯快な波濤の怒に、心からの共鳴を感じて快哉を叫んだのは、白雲自身がこの豪快さに相通するものを持つてゐるからである。彼自身波濤の心を心としたやうな快男兒であつたからで

ある。

◇田山白雲は斯う言つて幾枚も幾枚ものうち、波の怒れる部分だけを取つて、駒井の前に積みました。とても筆では間に合はない……と言つた心持に迫られながら。(五八頁一〇行)――

◇さうです、海は戯れるものです。戯る、といふものを私は小湊の濱邊でほどよく見たことはありません。御覽下さい。これが其の心持をうつしたつもりなのですが、どうして拙者どもの筆では……海の怒はともかく、其の髣髴を寫すことが出來ても、其の戯ばかりは、とても／＼……」

◇「ここには海の低徊があります。ここには海の靜養があります。ここは海の逃避……」

田山白雲は、着物の行丈の合はない事もすっかり忘れてしまひました。(六〇頁四行)――

かういふあたりには、白雲の感激的な性格が躍如としてゐるではないか。内心の大きな感激に壓倒されて、言葉がこれについてゆけないため、時々絶句してはつゞけるあたり、着物の行丈の合はないのも忘れて、顔を染めながら膝を進めて來るあたり、何といふ愛すべき人物なのであらう。

二 これと好一對をなしてゐるのは、駒井甚三郎の理性的な落着いた性格である。

◇駒井甚三郎は始終受身で、白雲が語るだけの事を語りつくすまで聞いてしまはうといふ態度で

す。客を好まないこの人も、客の性質によつては、其の貴重な研究の時間を何時までもそれがために抛つて悔いがないだけの餘裕はあるやうです。

駒井は飽くまでも理智の人であり、白雲は飽くまでも奔放想像力と藝術的な感性とに終始する人である。兩者の傾向は正反對の方向に向つてゐる。白雲は悠久無邊な藝術の天地に遊ぶ人、駒井は現實的な科學の世界に生きる人、この兩人の生きる世界の相違は次の問答によつて最も明らかに語られてゐる。

◇「われ／＼の寫すところは形と色とだけの世界ですが……形を寫せば、色はおのづから出て來る道理です。」

「さうは行きますまい。」

駒井はこの時軽い抗議を挟みました。

「どうしてです。」

白雲は、熱心な眼を輝かせて駒井の抗議を食ひとめながら

「どうして形を寫して色が現はせないのですか。……」

「櫻の花だけを描いて、淡紅の色が出ますか。海の動き丈を寫して青く見えますか。」(六一頁二行)
理智だけの世界に住む駒井には、白雲の言ふことが一向腑に落ちない。かういふ傾向の人々は、すべて、忠實な寫眞でなければ満足出來ないのだ。淡紅の櫻の花は淡紅の色に表すべきもの、藍青の海の波は藍青の色に描くべきものと、この種の人々は心得てゐるのである。けれども白雲は意見が違ふ。

◇「そこです。私の描いたものに、それが現はれなければ、私の恥辱です。森羅萬象を一々それに類似した色で現はさねばならぬといふ仕事は、私に言はせると細工師の仕事で、美術の範圍ではありません。私は墨で描いた此の海の波に、一々の色の變化を現はしたつもり——でなければ現はずつもりでかきました。色ばかりではない音までも……」(六二頁八行)——

日本の藝術の特色は、餘韻を尊ぶことにある。外形を出來るだけ單純化して、その内容を極度まで深化する點にある。日本の一切の藝術は、象徴の藝術である。水墨の一抹に、藍青の海の色をも軽々の波の調をも寫さんとするこそ彼等の願である。白雲はそれを言ふのであるが、駒井には所詮理解し難い議論なのである。

◇「音までも……と言ひたいのですが、不幸にして私には辛うじて高低の音階の程度だけしか出すことが出来ません。音律は或程度まで現はし得るかも知れませんが、音相に至つては、今のところ茫然自失するばかりです。悲しいことです。此の悲しさを今回の旅がつくぐと私に教へてくれました。」

斯う言つた時の白雲の顔は、言はうやうなき悲壯なものに映りましたから、其の論旨はわからないながら、其の悲壯な色に駒井が動かされました。田山白雲は眼の中に涙をさへた、へて言葉を續けます。(六三頁五行以下)――

これこそ道の爲に生命を堵する眞實の藝術家の心である。尊いことだと思ふ。

◇「田山さん、あなたは「水が生きてゐる。波が生きてゐる。波が七情を恣にしてゐる。」と言つたではありませんか。生きてゐるもの、音に七情の現はれはありませんか。」と斯う言はれて、私ははつと氣がつかしました。「それ、お聞きなさい。大海の波の音が、今諸法實相を教へてゐます。」と言はれた時ぞつとしたのです。」

田山白雲は、大の身體をゆすぶつて、其の目から涙をこぼして拳をわななかせました。(六四頁)

ここに到つては、私も白雲と共に肅然と衿を正さねばならないある物を感じる。東洋の精神文明の偉大さはかういふ所にあるのである。かかる境地は物質文明の弊に傷けられてゐる西歐諸國の人々の夢にも思ひ得ぬところであらう。これを眞實理解し味得することは、まだ若年な生徒諸子には不可能な事であるかも知れぬ。只かうした、非常に高級な精神文明が、東洋殊に日本には存在してゐることを、ここで臍氣なりと腹に容れてゐて貰ひたいのが編者の願である。かうした方面は今ではもう日に月に忘れてゆく一方である。淺薄低劣なアメリカニズムが滔々として世に行はれる今日この頃、かうした方面に些かなりと、次代の國民の注意を呼ぶことは、吾等が祖先に負ふ義務の一つでもあらうと思ふ。

八 鶴 鴿 走 る

螢 籠

【一碧樓氏のこと】 早稻田大學に學んだが途中で退學した。作句は「日本及日本人」「海紅」「東京朝日新聞」等に投句したが、氏の句は多く、「日本俳句抄」や「海紅句集」等に載つてゐる。句集「はかぐら」「海紅句集」等を著し俳句雜誌「海紅」の編輯經營に従事してゐる。

◇家と並びての句 家の屋敷と地續きに蓮田が二三枚ある。六月の末頃で綠色のビロードでも張つたお盆のやうな蓮葉や、或は高く立ち、或は水面に浮ぶ、そこにまた卷葉も交つて、開花にはまだ少し早く、堅い蕾がちよい／＼見出せる位であるが、とにかくまことに賑はしく爽かな情景である。

◇單衣を着しの句 裁ちおろした許りの新しい單衣を着た子を見て、平素見なれぬ縞柄であり、それにすく／＼と伸びてすつかり大人びて見える。やつ!? どの誰かと思つたら、なアーんだ、此の俺わの息子のお前だつたのか、いやこいつはすつかり見違へてしまつたよ。といふ詠歎の句。

◇つる草のの句 蔓草、それは葛かなんぞの雜草であらう。それが、夏もさかりの昨日今日とて、いや伸びてゐる／＼、こゝでもうおしまひかと思つたら、まだ／＼さきの方へいつてゐるな。手繰れども／＼はて知らずといつたやうな趣が、たつた十七字のうちに「つる草のつるよ」とつるを重用してゐるあたりにもこめられてゐる。

◇母よ、仰ぐの句 樹の幹の亭々たる點、廣葉の碧雲を重ねた如く青々としてゐる點、それから花の紫雲のむらがつてゐるやうな點、甘い濃い香氣——それらの聯想を持たせてゐる桐——葉——特に花が、高々とした處に俗塵の外に咲いてゐるのを見て、老來腰が曲つて、地面ばかり見てゐる老いたる母に、「あれぞらんない、お母さん、桐の花があんなに……」と誘ひ促し指し示したところを叙したもの、「母よ」と呼びかけたところに、一種の強みがある。

◇螢籠の句 この句を味はせる豫備として、同じ燭光の電燈の光が、日中と、薄暮と、深夜との何れの時が最も輝いて明るく見えるか——といふ發問をして見るといい。さうしてから、螢籠を透かして見える螢の光が、物凄いままでに青く強く輝いて、ほんとに本でも讀める位に光つて見えることから、随分夜が更けたと見えるなアと詠歎したのである。時計ならで螢の光の冴えまさつ

たので夜更けを表はしたところに詩趣があり俳味がある。

鶴 鴿 走 る

【鬼城氏のこと】 高崎の人、中學校卒業の後、貫名正祁氏の漢學書院に入つて漢詩文を學び、更に法學を學んだ。ホトトギス派の俳人で、友人松浦一氏とは特別な親交がある。各種の俳誌に選者として名を知られてゐる。松浦一氏の「文學の絶對境」などに、いろ／＼と紹介してある。

◇はす浮いての句 綠盤の如き蓮の浮葉が殆ど池の面一面を蔽ひうづめて、何といへぬ目に快いすが／＼しさである。そこへしづ／＼と上つた朝日の清らかな光が射して來た。光が池の中央あたりで反射して此方の汀に佇む作者の眼に映る、葉の上の白露も光つて見えることであらう。

◇短夜や 「夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを！」の百人一首の歌でもわかる通り、「短夜」は夏の夜のことをいふ。さて鶴鴿といふ鳥は、始終尻尾を上下させて、ちよ／＼走りしては佇み、佇んではちよ／＼走りする氣忙しい感じを與へる鳥であるが、「もう夜が明けたか」と、只さへ氣忙しさうな鶴鴿が、ず／＼と續いてゐる砂原に小さな趾跡をつけつゝ、誰かに追かけられでもしてゐるやうに大急ぎで人家から遠のいていくよと言つた意味であらう。「短夜」と氣忙しげな鶴鴿

との配合が妙。

◇まひ／＼の句 小川の川面に一叢の浮藻がある。小さな金龜こがねせし子形で急速な螺旋形滑走に巧みなまひ／＼蟲が、その浮藻の一隅を一夜の宿として假寢の夢を結んでゐるが、短夜の夏の夜がいつの間にかもう明けかけてゐるので、驚いて浮藻をはなれ、目覺めてゐるうちは靜止してゐられない性分のまひ／＼蟲が、またもう徐に、螺旋滑走を始めかけてゐるよ。まひ／＼蟲が配合されてあるので、此の夜明はおのづと夏の夜明けのことになる。

◇山の上のの句 「麥の秋」とは麥を收穫する麥秋のこと、即ち陰曆の五月の稱。朝夕目につく山、其の山の上の綠の雜草の中に、たつた一枚麥畑がある。それが今まで何れも綠の一つ色で麥畑があるとも知らなかつたが、この頃見れば、長方形の畑一枚分だけが黄金色にみのつてゐる。ははアあそこに麥が作つてあつたのか、そしてああいふ風に黄色くみのる所を見ると、もう世は麥秋になつたんだなあといふことがしみ／＼思はせられた。

◇川下のの句 早く起きて毎朝の日課のやうに散歩して川邊に立ち、さて川下の方を見渡すと、朝靄にぼうつとけぶつてゐる靄の中へ、赤々とした朝日がさし出て來る。夏の早朝の涼しさすが

くしさが身にしみて感じられる。

金魚の子

【亞浪氏のこと】 長野縣小諸町に生る。三十七年法政大學卒業、三十八年雜誌「向上主義」の編輯に従事。三十九年電報新聞をふり出しに大正五年まで記者生活や、事業の經營などやつて來た。氏の作句は幼時より始まり、三十六七年の頃高濱虛子の添削批評を乞うた頃から、月並調を破つて新しき俳句に移つた。大正四年俳雜誌「石楠」を創刊して今日に至つた。句集「炬火」、評釋「正岡子規」「目ざすべき俳句の一路」「正傳眞田三代記」等の著作がある。

◇梅雨の晝の句 いつもなら御飯食べるから御飯食べるまで、及び御飯食べるから寢床に入るまで、一所に靜止してゐることなしに、戸外に出て遊ぶことに餘念のない五六歳兒が、梅雨時で幾日も陰氣に降り込められて、戸外に出で思ひきり遊びに耽るといふことを恵まれないので、自然母親のあとさきに附纏つて、何かのおねだりしたり、それが容れられないと言つて泣いたり、母の姿が一寸見えないと言つては「母ちゃんく」と言つて泣いてゐる。梅雨時はまことに遊びざかりの子供には大厄難時であり、大人にとつては子供がうるさくてたまらぬ時だと歌つて、降り

こめられた陰濕な梅雨時をうたつたもの。

◇蟻かせぐの句 蟻が、折り探つて花瓶に挿してある花(芍藥かなどか)に附纏つて來て、相變らず蜜の採取にいそしんでゐたつたが、三日たち四日たちするうちに、いつの間にもやらその花も枯れしをれてしまつたなあ。従つて枯れしぼんだ花に用のなくなつたあの蟻の姿も、いつの間にか見えなくなつたわい。

◇ふん曳いての句 金魚の子、即ち小さな金魚が、まだ身の自由も利かない爲か、永の一日中、黄褐色な糞香の灰のやうな糞をば、吹き流しのやうに尾端に引きながら泳ぎまはつてゐることよ。「ふん」のことをうたつても不愉快な感じを與へぬところに、詩化、藝術化の有難味のあることを味せたい。芭蕉の「蚤虱馬のしとする枕もと」の句も思ひ出される。

◇くみこぼすの句 青嵐とは青葉の頃に吹き渡る風のこと。青嵐とあるから青嵐の吹き渡る山路を辿りつ、茶屋などに憩うた情景かと思はれる。青嵐吹き渡る山路の茶屋で渴きを覺えたので柄杓に一ぱい汲んで半分ほど飲んで、残りをざあつと捨て、しまふ時、あ、勿體ないことぢや、この半杓の水も、籠の村か深い谷川などから苦勞して汲みあけて來たものであらうに、それに又後

でこ、へ辿りついた人が、この半杓の水でどんなに助かるかも知れないのに……など、思つて、軽い悔恨を感じてゐるのであらう。暫く上記のやうに解しておかう。

◇夏の夜やの句 この句では月見草が町の中で咲くといふところに趣味がか、つてゐる。即ち家居繁き町中の、店頭に、蜜柑箱の空箱なんか二二三本移し植ゑた月見草が、夕涼みする人の賑はふあたり二三輪乃至四五輪が黄色い花を見せてゐるのが、野生の數多いそれと違つて、場所柄だけに異常に作者の注目を引いたので、「やあこんな所に月見草が咲いてゐらあ」と思はず口走る心持の表はれである。

麥 打 つ や

【東洋城氏のこと】 伊豫松山の人、東京帝國大學卒業の後、宮内省に入つて書記官になつたが、今は退官した。正岡子規の影響をうけた句作に耽り、遂に一方の宗匠となつて今日に至つた。

◇をかしさやの句 この句の趣味は雲の峯(入道雲)が野末又は山の端からむくくくと頭をもたけて出て来るあの有様を、「起滅」即ち發生消滅といふ現象の其の起即ち發生に當る。つまり發生といふ現象を諸人にまのあたり見せるあの雲の峯は、思へば面白いものだなあといふところに

ある。

◇麥打つやの句 麥打ちといふのは、地方によつてやり方が違ふが、刈り入れた麥をよく乾燥させてから、磐石や、厚板に打ちつけて種子を叩き落したり、或はカラザヲで打つて種子を振り落とすことで、さうした麥打ちをしてゐる農家の娘が、笠を深くかぶつて顔の伺ひ見えぬやうに包み装つてゐるといふことを歌つたものである。必ずしも顔見せじといふのでなく、ほこりが立ち、芒などが飛んで目の中に入つたりしがちな作業なので、かやうにしてゐるのが、作者には異様に感じられたのであらう。

◇驛の長(ヲサ)がの句 打水は夏時庭前などに水を撒き注いで苦熱を去り、爽涼を誘ひ生ぜしめるわざ、驛長兼改札係といつたやうな田舎の驛長さんが、列車の送り迎へも隙なま、に、夕方になるといつも手づから井戸から水を汲み上げて来て、小さな驛の前あたりに打水をしてゐるが、今はもう日課のやうな打水時も過ぎて、驛前はしつとりと濡れ、快い夕風がそろく立ちそめて來たわい。といふ程の意。

◇白百合やの句 ほのくくと夜の明けかゝる頃、ほとり草(傍の雜草)の中から、際だつて朝露に

濡れて大きく咲いてゐる白百合の風情の面白さ美しさは、格別なものだよなあ。

◇雲の峯の句 荒い岩石のそ、りたち續く鳥を眼下に見下しつ、白い丸味がちな雲の峯のむくむく／＼と發達してゐるその配合の面白さよ。白と黒、丸味と峻鋭な多角的、柔かさと、堅剛さなどの對照が面白さを誘ふのである。上のカットを熟視させたら、この句の趣の一半は領得出来るよう。

新 樹

【月斗氏のこと】 明治十二年大阪東區道修町に生れ、正岡子規・安居不空・大谷句佛上人・河東碧梧桐諸氏の門に出入して、其の指導又は影響をうけ、俳句に興味を感じるやうになつた、氏の句は「日本新聞」「ホトトギス」「車百合」「カラタチ」等の諸雜誌新聞に投稿され、「新春夏秋冬」「明治句集」等に蒐録されてゐる。氏はさきに月兎と號し、その家は「天眼水」「快通丸」の本舗である。◇風にもまれたの句 花の散つた頃に來る季節變りの風に絶えず揉みあふられ、又しば／＼襲ひ來る雨に研ぎみがかれて、日に増し、その形を整へ、又色を鮮かに染めなして行く若葉をつけた木々のみづ／＼しさ、うるはしさよ。

◇つむじ風の句 風速二十何米といふやうな颯風がさつと下界を擾亂する。この風とともに草木の若芽は挫き折られ、屋根瓦も割れるかと思ふばかりの音凄じいものがやつて來た。それは徑五六分か一寸もあらうといふ雹が降つたのであつた。そして間もなくからりと風いでしまふまではんのひと時のことではしかなかつたが、其の間の凄さ烈しさ、世の中がどうなるのかと思はせられた。「一狂ひ」に上記の意味が壓縮してこめられてゐる。

◇のりの浴衣の句 愁霖とは「いやな、しめつばい、鬱陶しいなが雨即ち梅雨のこと。のり附けのしたごわ／＼した浴衣が、びつたりと肌身に密接しないので、梅雨ばれの今宵は、梅雨が降り續いて氣温がずつと降下してゐる爲に、何となくうす寒くて、火鉢の側か、羽織でも戀しいやうな氣持がする。よい句である。

◇夕端居(ユフハシキ)の句 夕食後、縁側に出て梅雨霽れの庭の風情など眺めながら食べた苺のあのおいしさつたら、ほんとに頬が落ちさうであつたよ。食後といふ時分が先づよく、熟した苺の出盛り時であつたこともよく、砂糖と牛乳の分量もよかつたのであらう。

◇桐一葉の句 庭の泉水、もとより水はよく澄んでゐるのであるが、大きな緑の桐の葉が一枚ば

さりと落ちて来て、水面に浴衣模様のやうに落ちつくと、其の緑色の葉色との對照によつて、今までそれと氣がつかなくつた泉水の水が澄みとほるやうに清く澄んでゐるのに氣が附いた。

九 丈草庵の秋

【作者の意圖】 蕉門の俳人内藤丈草の、美しい犠牲的な隣人愛を描いて、これに町娘お京の優しい心使ひを配し、弟新之助の友愛を配し、境遇と生來の性格の弱さに追はれて、心ならずも人に背き世を狭める悲しい路通の姿を配し、更に、これらすべてを降り包む蕭々たる秋の雨を配し人の心の一縷の温かみを求めて、相倚り相慕ふ哀しい人間の姿を寫して、「人の世の寂しさ」をしみじくと味はせようとする一篇である。

【作者の個人的特徴】及【作者の小傳】

卷一の「桃」の所に微細に論じてある。参照されたい。特にこの篇など、作者の長所も短所も遺憾なく表れてゐる作品であるから、注意して、十分にこの作家の特徴を會得させたい。

【解釋】

◇濡れ縁 雨戸の敷居の外に作つた縁側。

◇閼伽棚 アカダナ 佛に供へる水を閼伽といふ。梵語の水といふ説から來てゐる。そこから、佛

に供へる水や花を置き、又佛具などをすすぐ棚を言ふ。

◇桔槔 ハネツルベ 柱の上に横木をわたし其の一方の端に石、他方の端に釣瓶を懸け石の重みで釣瓶がはね上り、容易く水の汲めるやうにしたもの。

◇網代笠 アジロガサ 薄くへぎたる檜を、或は斜めに、或は縦横に編んでつくつたかぶり笠である。

◇法華經 ホケキヤウ 正法蓮華經或は妙法蓮華經の略である。釋尊一代の教の中、その廣大無邊な慈悲に於て、又幽玄微妙な哲理に於て第一と言はれてゐる。

◇一入 ヒトシホ 一層

◇搔卷 カイマキ 薄綿を入れた小さい夜着。

◇世捨人 ヨステビト 出家。

◇一蓑一笠 イツサイチリフ 蓑ひとつ笠ひとつより外に何物も持たぬ簡易な旅姿にいふ。

◇粽團子 チマキダango 糯米を水にひたしたものを笹の葉で巻いて蒸した團子。

◇重湯 オモユ 極く淡い粥、飯を煮た汁。幼児や胃腸病者の食物。

◇路通 ロツウ

蕉門頭陀物語に

「路通はいづれの所の人なることを知らず。若かりし頃、放逸のあまり、既に人の軒の下に臥したりしを翁近江行脚の時道の側にもものいひ、不圖風流の談に及ぶ。幼きより好みし腰折なればとて、一首の歌を扇に書て翁に呈す。書もいやしからずして、

露と見るうき世を旅のま、ならば

いづこも草の枕ならまし。

翁嘆じて曰。我いまだ君家につかへし時、洛の季吟の歌枕をたき、敷島の道にいざなはれしに、今は俳諧のみじかきに遊んで、生涯のたのしびとす。汝我に従ひて來るべしと、師弟のあはれび深く、其より路通の名をば與へられける。」

◇雜炊 ザフスキ 野菜を刻み込んで煮た粥。

◇狐を馬に乗せたやうなこと、頓狂なこと、辻褃の合はぬこと。

【鑑賞批評】

一 先づ舞臺装置から見てゆかう。舞臺の中心となるのは「六疊敷ほどの草葺きの」ささやかな庵である。下手には遠景に渺漫たる琵琶湖の水が膳所・瀬田等の町々の繪のやうな屋並の點景の彼方に見えてゐる。何かしら遙かな旅を思はせる構圖だ。

下手裏に勝手があつて、鄙では桔槔の棹のわづかに草屋根の上に見えてゐるのも、何となく佗しく懐しいが、それにもまして、近くに立つた一本の柿が熟した實を赤々と秋空に浮き出させてゐるのと、路も分かぬまでに家を包んだ穂芒のわびしげな白さが、つく／＼と秋深いあはれを思はせる。劇の内容といみじくも一致した舞臺装置である。

それから机に置かれた法華經の一卷と硯石と、縁の柱に懸けた網代笠とが、この草庵の主の風格を雄辯に物語つてゐる。

二 舞臺には先づ最初に數人の村の子供が表はれる。彼等はこの草庵の主の爲に、川原で美しい丸い小石を拾つて持つて來たのである。

◇村の子一 和尚さん、石を持つて來たよ。

村の子二 川の石を拾つて來たよ。

村の子三 こんとこへ置くよ。

(みんな縁側へ小石を積み上げる) (七一頁)――

ここで觀客の注意は全く舞臺へ集中される。草庵の主人公の出現を期待する、觀客の眼は一齊に子供等の覗き込んでゐる勝手口の方へと注がれる。この期待の眞中へ主人公丈草は靜かに姿を表はすのである。四十三四歳、人間としての圓熟期に入りかけた年齢である。色は蒼白く病上りらしい。これもその人の瞑想的な沈靜な性格にふさはしい。そして輪廓の正しい面立はその人の由緒ある生れを暗示してゐる。

◇丈草 あ、よく持つて來てくれたな。二三日雨が續いたので訪ねて來る人もなく、今日は生憎何も上げるものがないよ……いや、ここにあつた、あつた。

(床の間の隅から繩に通した錢を持つて來て子供たちに與へる。)

子供たち、和尚さんありがたう。また明日も拾つて來て上げよう。

丈草、「あ、どうぞ」(七二頁)――

無邪氣な子供達にかうまで懐き親まれる丈草は、何といふ優しい性格の人なのであらう。開幕最

初のこの美しい一情景は、さう言つたやうな第一印象を観客の心に與へる。「あゝ、よく持つて来てくれた。」と言ひ、「今日は生憎何も上げるものがないよ。」と氣の毒がるあたり、この人の優しく美しい心をあらはして遺憾ない。(床の間の隅から繩に通した錢を持つて来て子供達に與へる。)この乏しげな草庵に残つてゐた唯一の財産であらうものを、惜しげもなく子供達に呉れてしまふところ、清廉無欲な主人公の性格が見られる。

ここまでの第一段は、主人公丈草の性格の輪廓を、観客に心得させるための一段であるとも言へる。

◇幻住庵にをられたころ、先生は、三月ばかりの間に子供たちが拾うてくれた小石に、法華經を全部お寫しなされたが、わしは忘れてばかりゐるのでなかなか抄らぬ。(七十二頁)――

丈草は人並ならぬ師匠思ひである。常住座臥、一時の間も、丈草の心からは師芭蕉の佛が消えたことはない。この寂しい草庵に世を避けて佗び暮すのも、師を偲び、師を思つて、靜かな追憶の喜に永からぬ病餘の殘生を任せたいからである。その師を慕ふつ、ましやかな情熱がまづこゝに初めて語られてゐる。

◇(時雨がさつと降つて来る。)

初時雨だな……(七十二頁)――

わびしい點景である。しめやかな追憶に耽る折柄、さあつと降つて来る一時雨。草屋の軒を打つ雨音も、時雨は一入に身に沁みる。

◇あの夜も時雨が降つてゐた。浪速の花屋から先生のお柩を運んで淀の船に乗るまでにすっかり濡れてしまつたが……あれからこつち一層時雨の音といふものが、あはれに聞えてならぬ。――

時雨の音の身に沁むにつけ、思ふは矢張り師芭蕉のこと。そのなきがらを送る日も、時雨はかうして降つてゐた。たゞさへ寂しい時雨の音が、この人にはわけて腸をしぼる哀音を傳へるのは、そこに忘れぬ幾多の追憶がからむからである。

◇お京 和尚さま

丈草 あゝ、これはお京さんですか。すっかり雨にお濡れでしたなあ。(七十三頁)――

このお京の登場は、其の尾花の伏しなびく荒涼たる秋冷の野に、一輪女郎花の紅を見出した趣がある。このかすかなる一點の紅ゆゑに、秋の哀れは一層深い。人の世の温かさを一身に集めたや

なこの美しい娘に對照を得て、丈草の身邊の荒涼たる寂しさは一層深く感ぜられる。

◇丈草 さうでもございませうが、亡くなられた先生さへ、一生一蓑一笠の境界をお忍びなされましたのに、わたくしのやうな者が、左様に結構な物を身につけるのは勿體ないことでもございませう。(七四頁)――

ここにも亡き師に對する愛慕の眞情が見られる。

◇お京 昨夜も遅くまでおつ母さんと二人で縫ひました。裏の畑の桐の葉が落ちますたびに、和尚さまがお寒いでせうと、そればかり案じながら……。(七五頁)――

これほどまでに慕はれるのも、もとより丈草の美しい心立ゆゑである。「裏の畑の桐の葉が落ちますたびに」といふ一句は、秋の夜更の行燈の灯影に、さむぐくと風を聞きながら向ひ合つて針を運してゐる親娘の姿をはつきりと生かして見せる。

◇お京 ぢや。よござんす。

(床の間へ走つて行つて、搔卷を部屋の眞中へひろげる。)

さあ、和尚さま。(無理に丈草の手を握り、引き立て、部屋の眞中へ連れて来る)

さあ、この上におやすみなさい。

丈草 は、は、は……(躊躇する)

お京 駄目ですよ、和尚さま。さあ、この上に。

丈草 お嬢さまにはどうも勝てないなあ。(仕方なしに搔卷の上に几帳面に坐る。)

お京 そんなことでは駄目。もつと腹這ひになるんですよ。……(七六頁)――

微笑ましい情景である。寂しい全體の戯曲の中に、このあたりだけは、なごやかな陽の光をでも見るやうな、明るさを感じさせる部分である。

◇丈草 傘をお持ちなさい、と言つても一本の傘もありませんが。(七八頁)――

時雨に身を掩ふべき一本の傘もないとぼしい生活が思ひやられる。

◇丈草 あ、あ、お京さんにはどうしてもかなはぬ。ひどいお仕置を食つたものだ。この搔卷から脱け出ようものなら、どこかそこいらの芒の蔭にかくれてゐて、また脅かされやうも知れぬ。困つたことになつたものぢや、は、は、は……(七八頁)――

娘お京の情に縛られて、搔卷を持って餘して困つてゐる丈草の姿は、たゞ善人そのもの、姿であ

る。

◇(所在なさに不圖壁の貼紙を見る。聲を出して讀む。)

十七日、「時雨ふる。師のお伴して犬山を發つ。御句、時雨ふれ笠松へつく日なりけり。うむ、あの時は若い船頭が粽團子をくれたが、先生は非常におよろこびなされて、わしに敗けぬと言つて召し上つたが、やつぱりわしの方が二つ餘計にいたゞいた。……(七九頁)——

思は再び亡師の上に還る。十七日の日記、十八日の日記、目に付くはいづれも時雨の日の哀しい思ひ出を止めたそれである。

◇先生が御存命中は、大黒柱にでも縋りついてゐるやうで氣丈夫であつたし、また俳諧についても、先生のお聲さへ聴いてゐれば深い悟りの泉が湧いて來るやうで、何一つ心の世界に不安なこともなかつたが、先生が三年前の秋お亡くなりなされてからは、世の中がまるで空になつてしまつたやうだ。去來にしろ、其角にしろ、みんなあの人たちは先生に別れても自分々の道を一人々々で切り拓いて居るが、わしは先生に別れてからは句一つ作ることも出來ず、たゞ先生の俤ばかり思ひ出してここに籠つてゐる。あの日からわしといふものは死んでしまつたのであつた。——

丈草の獨白によつて、丈草の今の心持と境遇とを説明させたものである。師を畢生のめあてとし、師を生命として來た丈草はその師を失つて、全く途方にくれてしまつたのである。丈草は芭蕉の人格の中に自分の一切を擧げて没入したので、純一無雜な尊い氣持で、師を「信仰」してゐるのだ。去來や、其角、師の人格と絶えず觸れることによつて、彼等自身の「我」をその本來の傾向に助長して行つたのに反して、丈草は、自身の「我」のすべてを擧げて師の人格に同化したのである。

◇(ひとしきり時雨が訪れる。一人の旅人が其の中に立つ。……(旅人上手より登場。)

旅人 御免なさい、丈草さん。

丈草 (驚いて) あんたは路通さんぢやないか。(ちよと暗い不安が泛ぶ。)

路通 路通です。面目次第もないのですが……。 (これも病み上りいとひどく疲れてゐる。ひどく零落れた風をしてゐる。)

丈草 また時雨がやつて來たな。さあ、どうぞこつちへ。(八一頁)——

一しきり降る時雨に濡れて、其の中に立つ旅人は、われとわが罪のために世に捨てられ、人に

捨てられた路通である。もとより昔は乞食をしてゐたほどの男、淺ましい物欲がどうしても忘れぬ。なまじひに小利口な性質に生れついたばかりに、却てそれが悟の邪魔をする。丈草のやうな清い諦めと安心とが、この男にはどうしても持てない。たゞ口腹の欲に逐はれ、貧に喘ぎ、徒らに焦り悶えては我と我が世を狭めてゆく、哀れな男である。病み疲れた頬に、顎に、痛々しく伸びた疎ら髪、見る影もない襤褸の袖に、泌む秋雨も寒からう。とつおいつ、佇んで、直にも門を入り得ぬは、流石に訪問の目的の耻ぢられるのである。

突然入つて来た見すばらしい旅人の姿を見て、「あなたは路通さんぢやないか」と叫んだ丈草は思ひもかけぬ人の來訪に驚いたのである。師の偽筆をつくつて賣つたことから勘氣を蒙つて門を逐はれてから、あちらこちらと放浪して、同門の誰彼に迷惑ばかり掛けて歩いてゐると聞く男、けふかうして訪ねて來たのも、もとより好い事ではあるまい。吾が身の罪に身を食はれて、誰ひとり相手にしてくれる人もない苦しさ、とりつき所もない苦しさゆゑに、昔の緣故を言立に、いくらかの合力を無心に來たものと丈草とて察せぬではない。(ちよつと暗い不安が)眉の間に泛んだのもそれ故である。

然しながら、その不安も、軽い憎みも、丈草の心の中の深い憫みには打負けた。尾羽打枯した姿を見れば、只あはれさが先に立つ。折ふし軒をかすめる村時雨。

「また時雨がやつて來たな。」

假りの宿りの佗しい世に、吾も彼も一つ時雨に身を濡る、旅の道連れ、肌寒い秋の夜寒には、人戀しさもますますひとしほ。この時丈草の胸の裡には、温い友愛の涙がしみじみと湧いて來たのである。

「さあ、どうぞこちらへ。」

さう言つた時の聲音も、微かな涙にうちしめつてゐるはしなかつたか。

三 この次の一段には、丈草と路通との性格の相違が、著しい對照をなして描き分けられてある。

◇路通あなたは何時お目にかかつて昔と少しもお變りになりませんか。われ／＼と違つて元が立派なお武家だけに、其のやうな眞黒な法衣を着けてをられても……(感心してながめてゐる。)

この僅かな數行の中にも、自から路通の卑屈な自卑の心持が感じられるやうに思ふ。

◇路通惜しいではありませんか。其角・嵐雪はもとより、蕉門の誰彼と、だれもかれも日本中に名

乗りを擧げて鎬を削つてをられるのに、學問の方では先生さへ頭を下けておいでになつた程の丈草とも言はれた方が、まる三年鳴かず飛ばず、此の山の庵寺みたいな所に引籠つてをられるといふのは……。(八三頁)——

丈草の心持は、到底路通の理解し得る所ではない。燕雀は鴻鵠の志を知らぬのだ。路通は世間的成功の外に餘念はない。否、今の彼は如何にしても金が欲しい、金が欲しいといふ物欲の一念だけで生きてゐるのである。その小人の心を以て、路通は丈草の心事を推さうとする。さればこそ、丈草が現在の自分の心持を説明して聞かせた語に對して

◇路通 そりやさうかも知れないが、どうもあなたの心持はわたしにはわからぬ。(八四頁)——
と言つてゐるのである。路通としては、これが眞實であらう。

◇丈草 いや、わたしはあの頃は先生がをられたので、ともかく立つてゐる事が出来たのです。先生がお亡くなりになつた其の日からわたしはもう何も彼も失つてしまつたのです。今ではわたしは三年間一日も此の部屋を出ず、たゞ過去の先生の目を思ひ出して、その思出の中にのみ生きてゐるのです。わたしは其角や嵐雪のやうに、先生と違つた道を切り開かうなんてそんな大膽な

考へは持ちません。わたしは一生かかつてもまだその折々に語られた先生のお言葉を噛み分けることは出来まいと思ふのです。かうやつてじつと此の部屋に閉ぢ籠つて先生のことばかり思ひ出してゐますと、昨日よりは今日と、幾らかづ、先生のお言葉が深い所から響いて来るやうに思はれます。(八四頁)——

これは八〇頁の丈草の獨白の部分と相對應して、現在の丈草の心持を説明してゐるものである。凡そ藝術の道に一步を進めることは、藝術家その人の「心」が一步深く掘り下げられたこと以外であつてはならない。われとわが「心」の神祕に、一步を深く進み入り得たとき、その人の藝術は一段の光彩を添へる。心を離れての藝術は「藝術」ではない。それは畢竟死んだ技巧の集積である。「心」を忘れたとき、藝術家は一瞬にして仕事師に墮落する。眞に藝術を思ふもの、心は、まさに丈草の心を以て心とすべきである。師芭蕉を知ることゝ於て一步深きを進むるは、即ち我が内心を掘り下げることに於て一步を進めることなのである。凡そ藝術家の型に於て、遠心的なものと、求心的なものと、兩つの型の對立を見るが、丈草の如きは後者の代表的なものであらう。

◇丈草 いやさう申すと何かわたしが大層深い所を考へてゐるやうですが、有りやうは先生にお

別れしてからは、魂の底まで空になつてしまつたので、門を出るのが臆劫になつたといふわけです。わたしのやうな人間は、どうしても先生のことを忘れることが出来ないのです。(八五頁)——
ここには丈草の謙虚な美德を見る。

◇丈草 あれだけ澤山あつたお弟子たちのうち、一人くらゐお燈明がはりに、毎日毎夜先生のことばかり思ひ出してゐるやうな者があつてもいいでせう。は、は、は(寂しく笑ふ)。(八五頁)——
「あれだけ澤山あつたお弟子たち」と言ふ語の裏には、最愛の弟子達にも漸く忘れられて行かうとする師を痛み悲しむ衷情が響いてゐると見るべきであらう。

◇路通 それはさうと、わたしが今日ここに参つたのは、あなたにちよつとお願いがあつて來たのです。

丈草 ……(八五頁)——

丈草のこの無言は、「そら來たな、たうとう始まつたぞ」といふ、軽い困惑の氣持を表はす。

◇路通 あなたに何のお貯へも無いことは知つてゐますが、あなたはこの附近の町には大分お馴染の方も多いやうだし、何とか少しそのところを……實際非常に困つて居るものですから……

實は江戸でも昔の仲間を尋ねたのですが、誰ひとり相手になつてくれる者もありません……。

路通 この五六年の間に五六百句も出來ましたので、それを纏めて置きたいと思ひまして。

丈草 どの本屋からです。江戸ですか、京の方ですか。

路通 (少しへどもどする)その本屋といふのは江戸でも何處でもいゝのですが。

丈草 何といふ本の名になさいました。わたしにも是非拜見させて下さい。……

路通 い、え、大事な本ですし、旅ばかり歩いてゐて失くすと困りますから、預けてあるのです。(ます／＼落着きなく、そしてきよろ／＼とそこいらを見まはす)……

路通 駄目でせうかな。(なほきよろ／＼と見まはす)。(八五頁——八七頁)——

路通は、その淺間しい本性を曝露して來た。金の工面を頼む口實を、句集の出版に藉りたのはいいが、猿智慧の思案は直ぐ底が割れる。へどもど、とんちんかんな挨拶ばかりしてゐる。

きよろ／＼あたりを見まはすのは、「何か金目のものはないか」とあさる盗人の眼である。正直な丈草は、路通の出鱈目を眞面目に聞いて、友の新しい句集に對する喜びの情をあからさまに見せてゐる。

◇路通 何……「丈草今日は草鞋に足を喰はれたり。」これは何ですか、先生の御手ですなあ。——
たうとう路通はこれを見つけた。手に入れ難い芭蕉の眞蹟。これを持って行つて賣れば大金になる。い、や自分の得意な偽筆を作つて賣れば、この一枚の反古紙から、この日記の持つ市價の數倍、數十倍の金が自分の手に入る。路通の聲は、喜に筒拔けたに相違ない。

◇路通 う、む、「故郷の人々たづね來るごとに老いぬ。われもまた……」ふうむ、こゝいらは全部先生のお手ですな。(八九頁)——

この呻きは貪欲の呻きである。餌食をねらふ狼のそのやうに、この時の路通の眼は嚙かし賤しい閃めきに燃えたことであらう。

◇路通 それにしてもあんまり勿體ないぢやありませんか、これほど澤山先生の物がありますのに。この手紙一枚剥がして賣つてもたいしたものですよ。

丈草 賣つてしまへばなくなりますからなあ。(九〇頁)——

何といふ鮮かな對照コントラストであらう。ここほど兩人の性格の相違がはつきりと描かれてゐる所はない。路通の眼には、恩師の手蹟がみんな黄金の化身に見える。あの一枚賣つたら何兩になる。こちら

のは何兩ぐらゐるの値がある。」とそればかりで頭が一杯なのだ。しかし、丈草に取つては、ここにあるどの一枚も、黄金で値踏みをする事の到底出來ぬ、尊い尊い師の形見なのだ。何千枚の黄金を今眼の前に積み上げられても、こればかりは賣れるものではないのだ。

◇路通 あ、雨も止んだな。時雨とは言ひながらよく降つては止み、降つては止み、一向きまらない天氣だなあ。丈草さん。

丈草 はい。(聲のみ聞える。)

路通 大分柿がなつてゐるぢやありませんか。うまさうですなあ。

丈草 この柿はなか／＼おいしですよ。

路通 うまいでせうなあ。(勝手口の方を覗く。)

おや丈草さん……何處に行きなすつたかなあ。(部屋の中を歩く)……丈草さんはどこに行つたのかしら？、は、あ、あんなとこまで行つて芋を掘つてゐるな。いつ逢つても親切な人だ。
……

(さらに壁の反古紙に惹きつけられる。)

丈草さん……………

路通勝手に行き、手桶に水を入れて持つて来る。手拭に水を浸し靜かに壁をた、いて反古紙を剥がす。

丈草さん……………(九〇頁一二行——九二頁四行まで)——

瞬時も落着き得ず、丈草の所在ばかり氣にかけてゐる路通のあさましい姿。「盗む」といふことは、かくも不安なものである。

◇丈草 何時逢つても、昔から狐を馬に乗せたやうなことばかりいふ人であつたが、……………(しばらく呆然として立ちつくしてゐる。部屋の中へ入りそこいらを見まはす。壁が濡れてゐるのに氣が付く。)おやッ變だぞ。あ、あの反古!、反古と言つてゐるが、あの先生のお手紙を剥がして逃げたのだなあ。(憤る)あの男はまだ先生がお出でのころも、先生の偽筆を拵へてあんなことになつたのに、まだ懲りもせず同じ罪を犯してゐると見える。(九四頁)——

あれほど大切にしてゐた師の形見を盗んで行つた憎い男。それも、偽筆を拵へて、恩義ある師匠を食物にしようとする人非人。憎惡憤激とに、丈草は胸が熱くなるのを覺えたことであらう。

◇(縁側に立つてじつと戶外を眺めてゐる。また時雨だな。(ひとしきり雨が通り過ぎる。)(九四頁) 逃けて行つた路通のあとを追ひかけるやうにさあつと過ぎてゆく時雨。じつとみつめてゐるうちに、何とも言へぬ悲しい憫れみの情が、火のやうな憤怒をやはらかく溶かして、胸元へぐうつとこみ上げて来る。時雨を眺めてゐるうちに。丈草の心は大きな轉向をした。

◇併しなあ、あの男も乞食のまゝでゐたら、偽筆などをして一生あのやうに苦しむこともなかつたであらうに。日本中どこへ行つても容れられる所もないやうなあはれな境界に立つこともなかつたであらうに……………(壁の反古紙を見る。)あれでも心では濟まぬと思つてゐるのであらう。十月十日の先生のお手紙たゞ一枚だけを剥いで持つて行つた、割合に欲のない男だ。(雨ひどく叩きつける。)あ、あの男は傘を持たなんだが、あのからだでは困るだらう。あんな風にして飯一つ食べさせないで別れてしまつたことが何だか氣になつて仕方がない。(あたりをきよろ／＼探し。)何か無いかな。先生は臨終の際まであの男のことを、あれほどわれ／＼にお頼みになつたに、わしはたゞ一枚の反古のことであの男を恨まうとしてゐた。食ふにも困つてゐるに違ひない。こんな時何か金目の物でもあれば……………(九五頁)——

基督教の所謂「隣人愛」の精神である。トルストイ等の説いた人道愛の深いあらはれを吾々はここに見る。自分を傷けた者を却て愛し、抱擁しようとする温い心、それがここでは十分に描き出されてある。作者の窺つた主眼點であり、同時にこの劇の、第一の高潮點クライマックスを形造る部分である。

四 この一篇の戯曲が、俳人丈草の犠牲的な心持を描いて、そこに美しい人間愛の世界を寫し出さうとしたものであることは前にも述べて置いた。そして、如上の路通との事件が丈草の深い愛の心持を示す第一の事件であるならば、次に續く弟新之助との一情景はその第二のものであらねばならぬ。

◇侍 兄さんは兄さんのお考があつて家を捨てたと仰しやいますが、あなたは腹違ひのわたしに義理を立て、其のためわざと其の指をお切りなすつたのです。

丈草 お前そんな馬鹿な事を言ふものぢやない。もしそんな事が國の殿様のお耳にでも入つたらどうする。

侍 何と仰しやつても、兄さんはわたしに家督を譲りたいために家出をなすつたのです。(百頁) ここにも丈草の無私な愛を見る。トルストイの「生ける屍」に見るやうな犠牲的な愛である。

◇(ひとしきり時雨が訪れる。時雨の音に耳を澄ませる。)

また時雨が

路通もこの時雨に濡れてゐるであらう。

弟もこの時雨に濡れて行くであらう。……新之助……わたしは……。

(縁側に立ち燭を持つたま、愁然として暗い雨の中を見入る。)(一〇七頁)――

心ならずも邪惡の道に踏み入つて、世を狭め、身を狭むるも運命であり、かくまでに相愛し相慕ひつ、兄弟共に打睦んで楽しい日を送り得ぬも亦運命である。かしこは、同じ時雨に濡れてゆく二人、ここにも同じ時雨を聞いて物思ふ一人、いづれ、佗しい悲しみの重荷を背に負うて、思ひ思ひの道をば辿りゆく人生の旅人に外ならぬ。只脈々と愛は通ふ。ほのかな愛情の温か味に慕ひ寄つて、直に手をさし伸べ合ふ人間の姿こそ、思へば何といふいとほしさの限りであらう。とつぷりと暮れた草庵を降り包む時雨のひとしきり。それこそは、はかなくも佗びしい人生の姿そのものではあるまいか。

一〇 山庵雜記

【作者の意圖】 作者は深刻な、瞑想的な性格を持つて生れた天才的作家であつた。この一篇の如きも作者がその折々の深い思索の餘になるものである。第一章では、眞實の楽しみは、「無心」の境地に於て初めて得らるゝものなることを言つてゐる。第二章では感應の主觀性を説いてゐる。第三章では、人間の心中に燦たる光輝を放つ大文章を、筆に傳へ紙に寫すことの如何に至難なるかを歎ずる。第四章では第一章の所論に似て、一切に拘泥せぬ「虚心」の境界を高唱する。そして最後の章では、「涙」の尊さを説いてゐる。即ち至純なる人間の誠の尊さを説くのである。

【作者の個人的特徴】

透谷は宗教的、情熱的な評論家であつた。功利を排し實用を斥け、靈性、若くは内部生命の價値と權威とを高調した。彼の眼には、内部生命を有する文學でなければ何等の價値が無かつた。内部生命の源を深く掘り下けてゆく文學、さうした生命に觸れた藝術を彼は尊重した。そこに彼の個性が反映されて居た。其の個性を彼はいつ迄も守り立て、特殊性を保つたのである。

彼は以上の立脚地から、内部生命の要素たる眞善美を愛したが、その伸びてゆく事を妨げる舊習慣、舊生命には飽迄反對した。そして積極的にそれを打破る事に力めた。が顧みて彼の住むべき新しい思想の家は求め得ず終つた。そこから彼の悲劇は生れたのである。

【作者の小傳】 名は門太郎、明治元年相州小田原町で生れた。明治廿六年、島崎藤村・上田敏・馬場孤蝶等と共に、雑誌「文學界」を創刊して清新な文學を唱道したが翌廿七年年廿七で自殺した。藤村氏の名作「春」に出て来る青木といふ人物は、この人を寫したものだといはれてゐる。

【解釋】

- ◇ 夢見まほしやと思ふ時 夢を見たいと思ふとき。
- ◇ あやにくに 生憎に。
- ◇ うとましき夢 嫌な夢 見たくもない夢。
- ◇ 意はざらんと思ふに意ひ 意志や理性では、そんなことは考へまい、と思つても感情はそれに従はずに、いつか自づとその事を考へてゐる。
- ◇ 臥床 フシド 寢床。

- ◇寤寐 ゴビ ゆめうつゝ。
- ◇啾聲 ロウセイ 囁る聲。
- ◇卓犖不羈 タクラクフキ 下註を見よ。
- ◇猖狂 シヤウキヤウ たけりくるふこと。
- ◇現身 ウツシミ 又、ウツソミ。
- ◇バイロン 英國のロマンチック・リヴァイヴアル時代の大詩人である。革命的な詩人で、火の如き性情、奔馬の如き行動は、一世を驚倒せしめた。自由を思ふこと篤く、あまりにも極端な革命思想を抱いてゐたため、故國の人々に容れられずして、長く異郷に放浪し、遂には希臘獨立戦争に身を投じ、ミスロンギの役に、瘴煙蠻雨の中にして歿した。

【鑑賞批評】

其一

この章に於て透谷は、人間一切の情意を捨て去つて、無心の境に入つてこそ、初めて味はひ得る眞の悦樂のあることを説いてゐる。夏目漱石氏の所謂「非人情の世界」と同じ境地である。主観

を脱却した客観の世界である。それを作者は強調してゐる。

其二

感想といふものは、我が心を主とするもので、外界の刺戟が主となるものではない。等しく一莖の野の花にも、心に喜を持つ者はこれに祝福の笑を送り、心に悲しみを抱く人は是に綿々の愁を寄せる。秋天皎々たる半輪の月影を、美しと見るも悲しと見るも、たゞ見る人の心々である。

只、凡常の野雀の聲である。しかもそれを聽いて、地上のものならざる天來の幽趣を味はひ得たる所以のものは、作者の心が、縹渺たる無心の境に遊んでゐるが故である。この明鏡止水の如き心の状態——虚心の境地にあつてこそ、尋常の野雀の聲にも、人界のものならぬ神興を味はふことが出来たのである。

かくの如く、感應の主観性を説いてゐるのである。

其三

心中におのづから成る無形の大文章がある。之が筆に従つて外に表はれて紙上の文章になる。筆を執らざるを得ざるに到つて筆を執つたのである。かうして成つた文章は、誠に尊ぶべきもの

である。併しながら、世には書かざるを得ざるに及んで書くのでは無くして、己が貧しき思想を、外なる文章を以て装はんとするものがある。これらは文章の賊といふべきである。

其四

其の言はんとする所は、殆ど、第一章に於けると同じである。

其五

涙は人生の至寶である。蓋し涙は人の心の至純なる「誠」の、また「情」の、表はれに外ならぬが故である。涙を神聖に守り得る者は、また「誠」を神聖に保ち得る人でなければならぬ。世の中には、偽りの涙、爲にする所ある涙があまりにも多い。涙は瀆されてしまつてゐる。もし、眞實に、涙を神聖に保ち得る人があるならば、その人こそは尊ぶべき人である。かゝる人を擧げて主宰としたならば、世に悲惨な出來事は一切跡を絶つに到りはすまいか。といふのである。

一一 鴉

【作者の意圖】 孤獨な鴉に寄せた一種幻怪奔放な想をうたつたものである。

【作者の個人的特徴】

頽廢的感情をもつて現實生活のあくなき追求を歌つてゐる詩人として、介春は異色のある詩風をもつてゐる。その自然主義的デガタニズムの詩は、「獄中哀歌」(大正三年三月)によく現はれてゐる。第二詩集「梢を仰ぎて」は大正四年一月に發行されてゐる。

その奔放な詩情、大膽な表現は「惡魔的鍊金術」に於て最もよく現はれてゐる。人間の心の善と惡との闘ひ、そこに人間の眞の姿を見、生活を見てゐるのが介春の詩である。現實生活のうちには神と惡魔との姿を同時に見て、そこに愛憎の心を動かされる。幻想と現實の中にその二つながらの心を結びつけてゐるのである。(現代の詩史と詩講話——井上康文)

【作者の小傳】 明治十八年五月十一日福岡縣田川郡上野村大字市場に生れ、明治四十一年早稻田大學英文科を卒業して、記者生活に入り先づ東京韻文社、早稻田詩社及び自由詩社の同人となり、

四十二年福岡市九州日報社に入り今日に至つた。

【解釋】

◇鉤 カギ

◇退いて ドいて

◇鳥の祕密だ 鳥の世界に於てだけ行はれる祕法だ。

◇詩にならぬ詩 詩と稱することを許されぬ妙な詩めいた物。

◇うすぐらい鳥 鴉のことをかう言ひかへたものだらう。

◇おれの詩を盗んで往つた 詩想をぶちこはして、詩を纏めさせなかつたことをいふのであらう。

◇この不幸な魔性(マシヤウ)のいきものは これは次の行の鴉や君と同格な語で、不幸な生物即ち鴉即ち君と呼びかけてゐるのである。

【鑑賞】

作者の個人的特徴のところて述べた「幻想と現實の中に、その二つながらの心を結びつけてゐる」と稱せられる左の異色ある諸表現に觸れさせて見たい。

- (1)三角に見えるのがあり……「鉤の如くなるのがあり」の一節。
- (2)退いてくれ うつくしい空の光の邪魔に……
- (3)おまへが顔を洗ふのは……春の日の川の餘興だ。
- (4)おれはお前の叔父さん……お前はおれの叔母さんに……
- (5)木のうへに鴉が一羽とまつてゐるのは淋しい……の一節
- (6)おれは、お前の大きな、眼でじつと見られるのが……の一節
- (7)おれの詩を盗んで往つたのは……の一節
- (8)君はあのおれの詩を食べたらう……の一節
- (9)誰もわからぬおれの詩が 鴉にだけわかるやうな氣がする——
- (10)かなしけに鳴くことを知つてゐるが、お祈りすることを知らない。

一二「夜」の眠り

【作者の意圖】 伊太利北部の都フィレンツェの町、サン・ロレンツォの大伽藍の中に、五百年の昔、巨匠ミケロアンゼロの意匠になるメディチ家の廟墓がある。「悲哀の天才」と呼ばれたこの巨人の魂は、此處にその鑿の神を通して、永劫に滅びぬ生命を傳へてゐる。作者は曾て外遊の日、フィレンツェ滞在の短い日数の許す限り、敬虔な求道者の心を抱いてこの「聖なる心の殿堂」に親しんだその尊い體驗の記録が、この一篇を成したのである。

【作者の個人的特徴】及び【作者の小傳】

卷四の一七「窓の少女」の所に詳しく論じてある。参照されたい。

【解 釋】

◇メディチの墓 フィレンツェなるサン・ロレンツォ寺内の新聖器所(Sagrestia Nuova)にある。

伽藍の右の外陣から入つて行くと、重なり合つた二列のコリント風の壁柱で飾られた聖器所がある。千五百二十三年から二十九年の間に、ミケロアンゼロの手で建築されたもので、この中に收

められたメディチの墓といふのは、これまた法王クレメント七世(メディチ家の一人でジュリオと言ふ、一五二三—三四)の命に依り、ミケロアンゼロが刻んだものである。墓は二基ある。入つて右側にあるのが、法王レオ十世の弟であり、有名なロレンツォ・イル・マグニフコの子であつたジュリアノ・ディ・メディチ(Guliano de' Medici)の墓であり、これと向ひ合つてゐるのは、大ロレンツォの孫、ウルビノ侯ロレンツォ・ディ・メディチ(Lorenzo de' Medici)の墓である。

墓はいづれも一段高く墓の主の彫像を据ゑ、その足許に棺を置く。棺の上には各二體づゝの、横臥した姿の彫像が載せてある。ジュリアノの棺の上には、女體の「夜」と男體の「晝」。ロレンツォの棺の上には、女體の「曙光」と、男體の「黄昏」との四つの裸像である。何れもミケロアンゼロの傑作中の傑作と言はれてゐる。

さて、少し冗長に流れる虞があるが、この墓の主メディチ家の人々のことに就いて、一言して置きたい。それにはフィレンツェの歴史を鳥瞰的に一瞥する必要がある。

抑、フィレンツェの創建はそれほど古い時代のことではない。紀元前一世紀の頃、恐らくは羅馬の植民市として建てられたものであらうと言はれてゐる。古くはその位置の利便さから中々繁榮

したものであつたらしいが、中頃、闇黒時代に北方蕃人部隊の侵入に遭つて、破壊、蹂躪され、十一世紀初頭に到つて漸く昔日の面影を取戻した。この頃伊太利全土はゲルファ(Gelph)とギベリニ(Ghibelline)との二つの黨派の争闘の舞臺となつてゐた。一は法王を支持するもの、一は皇帝派である。フィレンツェは、市の最有力な家ブオンデルモンティ家に指揮されて、ゲルファ黨として法王に味方した。しかるにフィリドリッヒ二世の來襲にあつて市は皇帝派に奪はれ、ゲルファ黨の人は市外に放逐されて、ギベリニ黨のウベルティ家が一時市を支配した。やがてフリードリッヒ二世は死んだ。それと同時にギベリニは没落の運命を辿り、ゲルファ黨が再び市に歸つて、十二の組合から各一人の統領を選出し、一種の共和政體を布いた。これで一度は收つたのであるが千三百年に到つて、この相反撥する兩勢力の黨争は、再び、ビアンキ(白黨)ネリ(黒黨)の争といふ新しい名の下に勃發した。その結果は白黨の滅亡、黒黨の勝利となつた。(詩聖ダンテが白黨に與して國外に逐はれたのもこの時である。)ナポリ王ロベルトはブリエンヌ伯を送つてフィレンツェを統治せしめ、都市の擾亂は鎮定された。併しながら市民はいつまでもこの重壓に耐へてはゐなかつた。千三百四十三年、彼は市民に逐ひ出されてしまつた。その後約七十年の無秩序無警察の擾亂時

代が續いた。この混亂時代の中に富豪メディチ家は次第にその勢力を伸し初めたのである。この覇權の基礎を置いた人はジョヴァンニ・ディ・メディチ(一四二八年死)で、其の子コシモは、アルビッチを破り、祖國の解放者として、王者の威を以てフィレンツェに臨んだ。この人から一代(ビエトロ)置いて、孫のロレンツォ・イロ・マグニフッコこそ、この墓の主ジュリアノの父であり、ロレンツォの祖父であつたのである。大ロレンツォは一代の大政治家・大學者・科學美術の擁護者として、市民の信望を一身に集めた。その子ビエトロ二世は叛逆の徒に逐はれて、弟ジョバンニ及びジュリアノと共に市外に逃れた。併し千五百十二年には再びメディチの一黨に呼び迎へられて、ジュリアノ及びジョバンニの兄弟が市に歸つて主權を握つた。やがてジュリアノはその地位を兄ビエトロ二世の子ロレンツォに譲つた。ジョバンニは法王となつた。レオ十世それである。

◇端嚴 タンゴン 正しくて威嚴あること。タンゲンと讀んでも差支へない。

◇洗禮 基督教に入る時に、罪惡を洗ひ淨めて、新しい人にするといふ意味で頭上へ水をそぐ儀式である。

◇郷愁 旅にゐる故郷を戀しく思ふ心持。

◇寂寥 セキレウ さみしさ

◇煉獄 レンゴク (羅典 purgatorium) 未だ完成の域に到り得ずして死んだ人間の魂が、こゝで淨化される。そしてその後始めて天國の扉を入る事を許されるのである。この煉獄の存在といふ思想は、聖書の原典には何處にも未だ見えてゐない。この教説を初めて明確に定めたのは、紀元六百〇四年、聖グレゴリイの手に依るのである。

煉獄の想像の中で最も偉大なものは、勿論ダンテの「神曲」第二篇にあらはれたそれである。彼によれば煉獄は南半球にある一つの島で、七大罪を象徴する七つの階段に分たれ、頂上は地上樂園にと續いてゐることになつてゐる。

◇紗 シヤ うすぎぬ。

◇夜 *La Notte* ジュリアノ・ディ・メディチの棺の上に飾られてある二個の裸像の中左にある女身像である。眼も覺めるやうな美しい若い女人の姿に刻まれて、右脚を縮め、左脚を伸し、左の手は軽く額にあけられて、昏々として眠るポーズをとつてゐる。脚の方には夜の象徴としての梟と、眠の象徴としての石竹花を彫つてあり、背面と右手との間は假面がある。名高い傑作である。

◇弛緩 シクワン たるみ、ゆるみ。

◇泉を吸ふ様な熟睡 巧みな表現である。注意ありたい。

◇落首 ラクシユ 諷刺嘲弄の意を含む作者匿名の戯作歌。

◇デオバンニ・パティスタ・ストロッチ *Giovanni Battista Strozzi* フィレンツェの詩人であり政治家でもあつた。法王レオ十世の姪クラリスを妻にしてゐたので、メディチ家とは姻戚の間柄であつたが、フィレンツェをメディチ家の専制から救ふ爲に戦ひ、遂に捕はれて獄中に自殺した志士である。

◇天使によつて刻まれて、白き大理石のうちに靜かに憩ふ。(一二〇頁)——
ストロッチの原詩を参考に掲げよう。

La Notte, che tu vedi in st dolci atti

Dormir, fu da un Angelo scolpita

In questo sasso, e perchè dorme ha vita:

Destala, se nol credi, e parleratti.

◇恥、害ひの永く残る世に——喜びて我は見ることを捨ん。聞くことも捨ん。(一二二頁)——

大ロレンツォの孫ロレンツォの歿後九年メディチの一族は再び市から追放された。ところが皇帝シャロー五世はその皇女をメディチ家のアレツサンドロに與へてゐた。その關係から皇帝はアレツサンドロを援けてフィレンツェを攻めた。市民は十一ヶ月の長きに互つて、よくこの包圍に耐へた。ミケロアンゼロも城内にあつて、共和黨側の大築城師として皇帝軍に抗し、目覺しい働をした。併しながら結局は皇帝軍の勝利となり、皇帝はアレツサンドロをフィレンツェの侯爵とし、代この地を領せしめることになつた。こゝに於てフィレンツェの自由は悉く蹂躪された。ミケロアンゼロはこのアレツサンドロの自由抑壓を、この詩で諷刺したのだとも言はれてゐる。参考の爲に記して置く。

◇恥、害ひの永く残る世に、眠りこそうれしきもの、
これも御参考までに原詩を出して置く。

Caro m'è 'l sonno, e più l'esser di sasso,

Mentre che 'l danno e la vergogna dura :

Non vede, non sentì, m'è gran ventura ;

Però non mi destar, deh ! parla basso.

◇不作法 ブサホフ

◇癩起 リウキ もりあがり。

◇筋肉建築 筋肉のくみたて。

◇素描 下書。

◇同じ體で痛み、同じ筋肉で悶えた。

ジャン・フランソア・ミレーは、佛蘭西グレビーユに近いグルーシーの僻村に生ひ立つた貧しい百姓の子であつた。幼い時に父に死別れて多くの弟妹を抱へて生活の爲に苦闘しながら、鋤持つ手のひま／＼に、夢中になつて畫を勵んだ。一生を窮迫の中に送つた人であつたが、二十四のころ、初めて巴里へ出た前後などはポケットには一片の銅貨もなく、所持品とても何一つない哀れな有様だつた。初めて見る大都の黄昏の夕景色に、悲しみを持つ心は限りなく傷んで、熱涙は滂沱として頬を滴り流れる、行き交ふ人に涙の顔を見られるが恥しさに、街頭の噴水の傍にかけ寄つて、顔を水に埋めて嗚咽を食ひ怵へたといふやうな挿話もある。そのやうな苦しみをした人で

あればこそ、この深い同情も持つてゐるのであらう。

ミレー自身の手記に

「私は傷ついた男を描いたミケロアンゼロの素畫を見たとき、その弛緩した筋肉の表現、肉體の苦痛に瘦せ細つた顔面と輪廓との表現から受けた激しい感動が、長い間消え去らなかつた。私は、私自身苦痛に悩むその男でもあるやうな氣がした。私はその男を憐れんだ。同じ肉體で、同じ手や足で苦しみ悶えた。」

◇ミケロアンゼロのやうに苦しみ抜いた揚句の人(二二四頁八行)――

詳しいことはこの人の傳記を読んで見れば肯けることだが、この人の生涯は痛ましい苦闘の連続であつた。羅馬法王宮の工長ウルビノの人ブラマンテの激しい嫉視と、法王ユリウス二世の氣まぐれとに苦しめられつゝ、大きな抱負を以て手をつけたユリウスの廟宇もブラマンテの讒謗のため中止の止むなきに到り、ボローニヤの大騎馬像鑄造のためには甚しい時間と努力の浪費を強ひられ、更に仇敵の奸策のため、全然繪筆を持つたことの無かつた身が、システィン大寺院の天井壁畫の完成のために、殆ど身も心もすり切らす程の超人的の努力をしなければならなかつた等々

彼の生活はまことに悲痛を極めたものであつたらしい。

しかも、彼を苦しめるものは、以上のやうな外部の仇敵ばかりではなかつた。ミケロアンゼロの生みの父親も、その血肉を分けた實の弟達も、みんな彼に寄生して膏血を吸ひしぼる毒蟲であつたのだ。

「これまで十二年といふ歲月は、私は、イタリアのあらゆる所で、此の上もない慘めな生き方をして來た。あらゆる辱しめを忍び、あらゆる艱苦に耐へ、あらゆる苦痛に身をさいなまされ、そして百千の危難に身を曝して來た。それもこれも、たゞ、私達の一家を助けるため、そのためばかりだつたのだ。そして今、私がどうかその家を擡げかけようとしてゐるときに、お前は、何年もの年月をかけて打建てたものを、たつた一時間でたゞき毀して喜んでゐる。――」

これは、直ぐ下の弟のジョヴァン・シモネに送つた手紙の一節だ。

「私は今、心の悲歎とひどい體の疲勞で苦しんでゐる。私は、友と言つては、どのやうな種類の友をも持つてはゐない。又、持たうとも思はない。……この上私を苦しめてお呉れでない、これ以上耐へる力は、もう私には無いのだから。――」

これは次弟のシギスモンドに宛てたものだ。

忘恩と嫉妬と猜疑との中で、この時代のミケロアンゼロには、あらゆる苦闘の限りを盡した。彼を悩まし抜いた手もつけられない家族と、常に彼を見張り彼の失敗を待ち望んでゐる非道な商賣敵との間に立つて、彼は暴慢な法王と絶間ない衝突を続けながら、死力を盡して製作の成就に向つて驀進した。

仇敵の迫害を必死と忖へて、持つた事もない繪筆を握つて苦しんだシステインの壁畫もどうか完成はしたが、しかしながら、この長い間の過勞のために、ミケロアンゼロの健康は痛ましくも傷なはれ、打碎かれてしまつた。何ヶ月は天井を睨みつゞけて來た結果は、甚しく視力を損ひ、身體の均齊を全く破つてしまつた。次に非常な意氣込で手を着け初めたユリウス二世の靈廟は、色々な事情から中止しなければならぬ破目になつた。次いで更に法王から命ぜられたサン・ロレンツォ寺院の正殿の工事は、非常な興味と希望とをかけてゐたにも拘らず、カララの山中から大理石の巨柱を運び出す仕事の爲に、沼澤を越え、原野を横ぎり、嶮岨を渡る異常な苦痛な仕事のために、無智な人々のあらゆる反對と讒謗と闘ひつゝ、空しく三ヶ年を泥濘の中で投げ棄て、

所詮は性急な法王のために解約を言ひ渡されるといふ屈辱を忍ばなければならなかつた。かうした重ね々々の失望と落膽とが彼の魂をいやが上にも悲哀の方面へと導いて行つたらしい。メディチの墓の諸彫刻には、このやるせない悲哀の心が、はつきりと跡づけられてゐる。

併しかうした外面的事情の悲惨さも、彼の内心の悲劇の痛ましさに比べれば、まだ何でもない事であつた。ミケロアンゼロは一生を不思議な心の悩みに苛なまれ通した人だつた。外には自分に辛い世間の人々と戦ひ、内には我と我が内心と止む時ない戦を續けて、悲惨な、しかし英雄的な一生を終つた。佛蘭西現文壇の巨星ロマン・ローランも、その洞察と同情とに充ちた、「ミケロアンゼロ傳」の序文の中でかう言つてゐる。

「苦痛は限りなく、而も様々な形をとつて現はれる。或る時は貧とか、疾病とか、運命の不正とか、又は人間の非道とかいふ盲目的な外部の横暴によつて苛なまれる。又ある時はそれは人間自身の内質から發する。そしてこの内發的な苦痛こそまことに比なく痛ましく又宿命的なものである。……此の後の種類の苦痛が、いたくもミケロアンゼロを悩ましたのだ。……」

こゝに語らうとする運命の悲劇は、まことに内心なる煩悶の悲劇である、人格の根柢に源を有

し、そして絶間なく、又その破壊の業の成る時迄は止むことなく、心を嚙み減ぼしてゆく悲劇である。」

◇トラファルガル・スクエア チェアリング・クロスの北側にある廣場で、中央には百四十五呎の柱の上に、ネルソンの銅像が立つてゐる。銅像の基部にはウッディントンの手になるトラファルガル海戦の浮彫がある。

◇痼疾 コシツ 病みこじれて容易に癒えぬ病。

◇ミケロアンゼロもレオナルドも孤獨だつたではないか(一二六頁二行)——

レオナルドの孤獨な生涯については、卷四の一七課「窓の少女」の所に引いて置いたメレヂコフスキーの「先驅者」の一節を見られたい。

◇トスカナ 昔は中部伊太利の一公園であつた地方で、アレツォ、フィレンツェ、グロセツト、リヴォルノ、カルララ、ピザ、シエナなどの諸州を併せた部分にあたる。嘗てはメディチ家の所領であつた。

◇ギベルチ Lorenzo Ghiberti フィレンツェ生れの彫金の大家。又畫家としても名高かつた。こゝ

に言ふフィレンツェ洗禮堂青銅扉鏡板の彫刻は、千四百二十五年から千四百五十二年まで、二十七年の歳月を費した一生の大作であつた。

◇サン・ロレンツォの廣場 伊太利最古の寺院の一つ、サン・ロレンツォの伽藍のある廣場である。サン・ロレンツォ寺院は紀元三百九十年開基、千四百二十三年火災にあつて焼け落ちたのを、ブルネレスコの意匠に依つて再建され、ドナテロとミケロアンゼロの手に依つて完成された。

◇「晝」 Il Giorno ジュリアノの棺の上、左方に美女の姿をした「夜」が横はつてゐることは前に述べた。この「夜」と相並んで、右方にある年老いた男子の裸像が「晝」である。脚をもちつた横臥のポーズで、顔だけを前面へ向けてゐる。なか／＼恐しい顔をしてゐる。

◇「曙光」と「黄昏」 l'Alba (Aurora) e Trionfo ジュリアノの棺蓋に「夜」と「晝」とが臥してゐるのに對して、ロレンツォの彫像の脚下、その棺蓋の上には、「曙光」と、「黄昏」との彫刻が置いてある。「曙光」は右方にゐる。女身で身をや、前向きに横臥し、右脚をだらりと伸し左脚をかゝめてゐる。「黄昏」は男性の老人、同じやうに前向きに臥してのべた左足の上に右足をかゝめて載せてゐる。この二つの像は、「夜」及「晝」と對ひ合つた方の、反對な壁に近く置いてある。それだから

「顧みて云々」と言つたのである。(これらの寫眞は平凡社發行世界美術全集に掲載してある)

◇「思ふ人」 Il Pensiero 「曉光」と「黄昏」との頭上に座してゐるロレンツォ・デイ・メディチの彫像のことである。(下註は誤り)。ミケロアンゼロは、メディチの墓の、二つの彫像に「活動する人」と「思ふ人」といふ題をつけた。即ちジュリアノを以て「活動」を代表し、ロレンツォを以て「思索」を代表せんとしたのである。事實この二人の性格の上にもさう言つた相違があつたらしいが、彫刻の上では、それが一種の象徴の域に達してゐる。ジュリアノの像を見ると將軍の美々しい装をして腰をかけ、膝に棒を置いてそれに兩手を落してゐる。顔は全く横向になつてゐる。そしてきつと何者かを凝視してゐるやうな表情をしてゐる。

これに反して「思ふ人」のロレンツォは、深い冥想に耽つてゐる。左肘を左膝の上の小箱の上にかけてその手は軽く顎から口のあたりへと持つて來てゐる。右手は左膝上にその掌背で支へてゐる。頭に胄をいたゞいた顔は、小屈に前面を凝視してゐる。

このやうに、ミケロアンゼロは、初めからこれら二つの彫像を象徴的に取扱つたので、容貌なども、實際の本人とは餘程異つたものになつてゐたらしい。この像が完成したとき、或人がミケ

ロアンゼロに、像が實際の人物に似てゐないことを非難した。するとアンゼロは「百年後に誰がそんなことを問題にする者があるか。」と答へた。さう言ふ話もある。これに依つて見ても、ミケロアンゼロがねらつたのは藝術としての完成であつて、肖像としての完全ではなかつたことが肯ける。従つて、ジュリアノとロレンツォとの像は、「丁度「夜」と「晝」とが對照され、「曉光」と「黄昏」とが對照されてゐるやうに、「活動」と「思索」とを表はす一雙の象徴的作品と見る方が當然であらうと思はれる。

【鑑賞批評】

この文を味ははうとするものは、先づ篇中隨所に表はれた、作者の深い愛を酌まねばならぬ。優れた、魂に寄せる作者の、純化されて宗教の域にまでも高められた強い愛慕、それを第一に味はねばならぬ。

この篇に、讀者は、ミケロアンゼロの、又、メディチの墓の、美術史的な批評や解説やを求めようとしてはならない。ここに求むべきものは只敬虔なる求道者の精神であり、「愛する」者にのみ惠まれたる尊い法悦である。

◇藝術か宗教か、私は其の區別を知らない。唯最も聖なる心の殿堂として、メヂチの墓がある。藝術の究極が、宗教の究極と相合致するものであることは、第四卷「窓の少女」の章でも言つて置いた筈である。偉大なる藝術は常に偉大なる宗教であり、偉大なる宗教は又常に偉大なる藝術である。藝術も宗教も、所詮は、我が魂の奥底深く隠れ潜む未知なるものを探し求めることに外ならぬ。囚はれてゐたひとつの魂が、悠久無限の天地に初めて解き放たれるとき、そこに宗教も生れ、藝術も生れるのである。

◇ミケロアンゼロが此所で端嚴なる建築を以て洗禮する。白と黒とを以て洗禮する。直線を以て洗禮する。あらゆる色を去り、あらゆる踊を取り去つて、あとに残つた神聖なるもの、陰影によつて洗禮する。ここに人の魂は靜かに眼を覺ます。涼しい呼吸をする。(一一八頁五行)——

宗教の優れたものがさうであるやうに藝術の優れたものは、人の魂を常により高い所へと引き上げる。閉されてゐたその瞳を開けてくれる。これを「藝術の洗禮」と作者は呼んでゐる。

◇此の世とも思はれぬ神祕がある。すべてのものがあの陰影に浮ぶ魂だつた。わたし自身も遠い國へ行つて身を失つた。紗を透かしたやうに眼にも、見えるのが不思議だつた。肉體の意識が

薄れて魂が小聲の話をする。(一一九頁七行)——

ミケロアンゼロの偉大な魂は、メヂチ小堂の彫刻を通して、觸るる者悉くを淨化せずんば止まぬ。煩はしい肉の存在は全く忘られて、只純らかな靈のみが靜かに息づくのみである。

◇「夜」が靜かに眠る。休息の弛緩が彼女の强健な頸にも肩にも額に翳した手首にもある。足の指にもある。疲れたる者の泉を吸ふ様な熟睡をあはれめ。彼女の胸の靜かに上下するかと思はれる眠の呼吸を聞くがよい。(一一九頁二行)——

◇「夜」は眠る。苦しい人生から僅かの釋放であるかの如く貪り眠る。彼女の肉體に酷くも刻まれたる。勞働の痕によつて、生の鬭争の如何に激しかつたかが思はれる。小丘の如く大きく瘤起する彼女の乳房こそ最も尊い、總ての未來が生命を吸ひ育つた慈愛の噴泉だ。男性かと思ふばかりの筋肉建築は、子のために最後まで踏み止まつて健闘した母性の悲惨なる記念碑である。あゝ、母とは莊嚴なる名だ。生の血みどろの戦の英雄だ。大なる母性の奮闘の跡を刻んで、ミケロアンゼロは實相の人生を刻んだ。(一二二頁一〇行)——

◇知つたかの如く、人體の比例と照り合はせて、ミケロアンゼロの「誇張」を喋々する者は誰だ。

部分に拘泥して全體を見ない愚かなるものよ。心が直接に受け入れて密着する大きいものを見ないか。批評と云ふ小ざかしい小刀は届かない。唯ひれ伏すことのみが相應する。(一二三頁末行)

◇母がやつれ、疲れ、眠る。覺めれば、又殘虐なる世界に苦しい戦を續けなければならぬのを、暫しの無感覺と忘却とが如何に彼女に幸福であらう。(一二四頁六行)――

この深い愛を見よ。敬虔な感情を見よ。作者の心は温く、刻まれたる石の底に通うて、「夜」と共に息づき、「夜」と共に悩んでゐる。

◇そして出来るならば、鐘の多いトスカナの野がアベ・マリアの讃への歌に満ちる夕方に來るがよい。ギベルティの作つた「極樂の門」の美しい浮彫が夕闇に消えかかる横町から、少し行くと、サン・ロレンツォのがらんとした廣場へ出る。(一二六頁三行)――

かうした部分的の比ない美しさをも十分に讀み味はせて頂きたい。音樂的要素と繪畫的要素とを共に十分に具備した美しい筆である。

◇耳を澄まして聞け。闇に浮ぶやうな囁く「夜」を聽け、又「晝」を聽け。願みて「曉光」と「黄昏」も又それ等の上に坐る、悲しき「思ふ人」も聽け。小聲の彼等の語に聽き入つて若し君の魂が眼覺め

たならば、眞面目な悦びを抱いてまた靜かに歸つて行け。魂の眼覺めは月の出の様に涼しいであらう。(一二六頁末行)――

このあたりの音樂的な言葉の律動を注意して捉へさせて見なければならぬ。一體にこの人の文章には、或るゆるやかな、詠嘆的なリズムが常に付き纏つてゐる。再讀三讀して、その美しさを知らしめて戴きたいと思ふ。

一三 芭蕉

【作者の意圖】 松尾芭蕉に關する隨筆的試論である。芭蕉の藝術を生んだ年齢、俳句には表はれぬ芭蕉の情熱、宗教に赴かうとしたある折の芭蕉の心、芭蕉の心の象徴として見たる幻住庵、芭蕉の寫實的に見える藝術の奥にひそむ幻想等、色々の方面から考察を加へて、理解と愛に充ちた好個の小論を成してゐる。

【解釋】

◇朝を思ひ、また夕を思ふべし。

「雪の薄」に

- 一、一宿なすとも、ゆるなき所に再宿すべからず、樹下石上に臥すも、あたゝめたる庭とおもふべし。
- 一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。惣てももの、命を取る事なけれ。君父の仇のある所には、門外にも遊ぶべからず。いたゞき、ふまぬ、偲びざる情あればなり。

- 一、衣類器財相應にすべし。過ぎたるもよからず。足らざるもしからず。程あるべし。
- 一、魚鳥類の肉を好んで喰ふべからず。美味珍味にふける人は他事にふれ易きなり。菜根を咬んで百事をなすべき語を思ふべし。
- 一、人の求なきに己が句を出すべからず。望を背くもしからず。
- 一、たとひ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず。おこらば中途より歸るべし。
- 一、ゆるなきに馬駕籠に乗る事なけれ。一枝を己が瘡脚とおもふべし。
- 一、好んで酒を呑むべからず。饗應により固辭しがたくば、微醺にして止むべし。亂に及ばずのいましめあり。祭にもろみを用ゐるも、酔へるを憎んで也。酒に遠ざかるの訓あり。慎つしめや。
- 一、船錢茶代を忘るべからず。
- 一、俳諧の外雑話すべからず。雑話出でなば居眠して勞を養ふべし。
- 一、他の短を學んで己が長を顯す事なけれ、人を誇つて己にほこるは甚だいやしきなり。
- 一、女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道に親炙せば、人を以て傳ふべし。惣じて男女の道は嗣を立つるのみなり。流蕩すれば心慙一ならず。此道は主一無適に

して成就す。己を省るべし。

一、主あるものは一枝一草たりとも取るべからず。山川江河にも主あり。勤つとめよや。山川舊跡みだりに名をあらたに付くる事なかれ。

一、一字の師恩たりとも忘るゝことなかれ。一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ。人にをしふるは己をなして後の事なり。

一、一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず。さりとして又媚び諂ふ事なかれ。如此の人は世の奴なり。此道の人は此道に遊あそぶ人と交るべし。

一、夕ゆふべをおもひ旦あしたを思ふべし。旦暮の行脚といふ事好まざる事なり。人に勞をかくる事なかれ。しばしばすれば疎んぜらるゝの言をおもふべし。將麁食たりともこのむべからず。

右の條々我門の行脚は可愼者也。桃青。」とあるのを引いたものである。

◇含蓄 ガンチク 意味の深いこと。

◇自分の郷里の木曾路(一二九頁末行)――

藤村氏が愛兒のために、自身の幼年時代の思ひ出を語り綴つた「ふるさと」の中に、

「お父さんの生れた田舎は、木曾でも美濃の方へ降りようとする峠の上にありましたから、お家のお座敷からでも、お隣りの國が山の向ふに見えました。そこには遠江の様な平野も眺められました。極くお天氣のいい日には、遠い近江の國の伊吹の山まで、かすかに見えることがあると、祖父さんは話して呉れたこともありました。」

◇貧士竹齋に似て居ると言つて自ら狂句まで作つた程の人(一二三二頁初行)――

「冬の日」に

「笠は長途の雨にほころび、紙衣は泊々の嵐にもめたり、佗びつくしたるわびへ、我さへあはれに覺えける。むかし狂歌の才士此國にたどりし事をふと思ひ出で申侍る。」

狂句

木がらしの身は竹齋に似たるかな――

竹齋と言ふのは、山城の國に昔住んでゐた瘦法師であるが、貧乏で、何事も思ふやうにならないところから、都住居にも飽果て、貴きを敬ひ、賤しきを輕んじ疎んずる都の中で、藪法師くんと人に指されて笑はれうよりは、諸國を遍歴して、氣の向いた所で住むことにしよう、たゞひと

りの伴を僕に、あちらこちらと放浪して暮した風狂の畸人である。

◇馬場君 馬場孤蝶、現に慶應義塾の教授である。藤村氏とは、明治學院の同窓であり、雑誌「文學界」で文壇に乗り出した當時から深い交渉があつた。

◇長谷川二葉亭、曾て東京外國語學校教授、後辭して東京朝日新聞社に入り、特派記者として露國に入つたが、幾もなく彼地で客死した。露西亞文學を初めて日本へ紹介した大先覺で、殊にツルゲーネフを得意とし、暢達自在なその譯筆は、當時の文壇に獨歩してゐた。創作にも「平凡」「面影」等の傑作があり、「あひびき」「かたおもひ」等の名譯がある。

◇ヴェルレエヌ(一八四四—一八九六) 白耳義人を父とし、佛蘭西人を母としてメッツに生れた。この人の生涯は、流浪と放蕩とのいたましい記録であつた。名高い少年詩人アルチュヌ・ラムボオとの同性愛に破れてラムボオを狙撃したことから、悔恨と祈禱いのりとに満ちた數年の獄中生活もした。惡に傷づき、酒に身を蝕まれて、灯暗い酒場の片隅にやるせない心を抱いて歌ひ出でた幾多の詩篇は、句々みな金玉の響があつた。佛蘭西近代の象徴詩派の運動を代表する巨匠である。

◇カミーユ・モークレエル 現佛蘭西文壇に重きをなす評論家である。獨創の人と言はんよりは、むしろ理解と洞察とに他の企及し得ざる長所を持つ人である。鋭敏な感受性と、透徹した理智とを武器として、縦横に對象を觀察し分析し綜合し、深い同情に溢れた珠玉のやうな名評論を生み出すところ、確に文壇一方の覇たるの名に背かない。

◇「獨り住むほど面白きはなし。」などと(一三六頁四行)――

「さびしさなくばうからまじと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし。又よめる、

山里にはまた誰をよぶこ鳥ひとりすまんと思ひしものを

獨りすむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑をうしなふと。素堂此言葉を常にあはれむ。予も又

うき我をさびしがらせよ閑古鳥

とは、ある寺に獨居していひし句なり。」

右は元祿四年卯月二十二日の日記の部分である。

◇羽紅夫婦をとめて……思ふことが四つで夢もまた四種と書いたと……(一三六頁四行)――

「去來兄の方より、菓子調菜のものなど贈て、今宵は羽紅夫婦をとどめて、蚊屋一張に五人ござり臥したれば、夜もいねがたくて、夜半過る頃よりもおの／＼起出で、晝の菓子盆など取り出で、曉ちかきまで話し明す。去年の夏凡兆が宅に臥したるに、二疊の蚊屋に四國の人ふしたり。おもふこと四にして、夢も又四くさと書捨てたる事もなど云ひ出して笑ひぬ。」
これは同じ二十日の日の日記にある。

◇百日程行脚を共にした杜國の死を夢に言出して（一三六頁一一行）――

「廿八日。夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺む。心氣相まじはる時は夢をなす。陰盡て火をゆめみ、陽おとろへて水を夢みる。飛鳥髪をふくむ時は飛鳥をゆめみ、帯を敷寝する時は蛇を夢みるといへり。睡枕記に槐安國莊周が蝶、夢皆其理有て妙をつくさず。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の氣、夜陰に夢又しかり、まことに此ことを夢みるこそいはゆる念夢なれ。我に志深く伊陽舊里までしたひ來りて夜々床を同じく起ふし、行脚の勞をたすけて百日がほど影のごとく伴ふ。片時もはなれず。或時はたはぶれ或時は悲しみ、其志わが心裏に染みてわする、ことなければなるべし。覺めてまた袂をしぼる。」

◇五月雨や色紙へぎたる壁の跡（一三七頁初行）――

外には五月雨がしと／＼と降つてゐる。降りこめられて、所在なさに壁を見つめてぼんやりしてゐる。壁には、前にはつてあつた色紙を、つい近頃へぎ去つた跡が痛々しく残つてゐる。それをじつと見まもりながらかすかな雨の音をきいてゐる、わびしい心持を匂にしたものである。

◇山野に跡をかくさんとはあらず 野山に逃れて世に隠れようと言ふのではない。太平の逸民となつて、疎懶な生涯を喜ぶものではない。

◇仕官懸命の地を羨み 芭蕉は、もと松尾忠左衛門宗房と呼ばれて、藤堂新七郎良精に仕へた武人である。主良精世を去るに及んで、哀悼の思に堪へず、悲嘆の餘り遺髪を奉じて高野山に赴き報恩院に收め厚く供養し、やがて「雲とへだつ友かや雁のいきわかれ」の句を訣別の言葉として主家を去り、雲水行脚の生涯に入つた。又一旦世を遁れて後も、一度は帶刀して、幕府の命を受けて關口水道工事の設計に携はつたこともある。これらの事を指してゐるのである。（芭蕉の事蹟に就ては勿論この外に色々な異説があることを承知されたい。）

◇樂天 唐の詩人白居易のこと。徳宗の貞元年中出で、仕へ贊善大夫となつたが、君を思ふ真心

から出た苦言が、却て帝の逆鱗に觸れ、江州司馬に貶された。併しながら些も人を恨みる心なく、天を樂んで悠々自適した。穆宗の初年再び召し還されて主客郎中知制誥となつたが、この度も帝に疎まれて、遠ざけられ、文宗に到つて三度召されて祕書監となり、刑部尙書にまで上つた。この人の集を白氏長慶集と謂ふ。

◇老杜 唐代の詩人、杜甫のこと。字は子美、少陵と號した。幼い時から貧困の中に育つて、あらゆる苦勞をした。一生を窮迫と放浪との間に送つたやうな人で、やはり芭蕉と同じやうに、漂泊の途上、洞庭湖のほとりで病んで死んだ。

◇五臟 肝、心、脾、肺、腎の五つを言ふ。太平御覽に「何謂^{フカ}五藏^ト、情藏^ニ於腎、神藏^ニ於心、魂藏^ニ於肝、魄藏^ニ於肺、志藏^ニ於脾」とある。

◇先づたのむ椎の木もあり夏木立（一三八頁一一行）――

これは幻住庵記の最後にある句である。幻住庵のあつた國分山には、椎の木が非常に多い。幻住庵のすぐ側にも、一本大きな椎の木があつて、群を抜いて他の夏木立の上に聳えてゐた。それを歌つたので、まあこれで頼みとする蔭も見つかつた、暫しでも氣を落着けて住む宿が得られた。

と喜んだ意である。ある人は、この句は、源氏物語の中の、「立よらん蔭とたのみし椎がもと空しき床となりけるかも」の歌を踏んでゐると主張する。又、別に、頼政の「のぼるべき頼りなければ木の下に椎を拾うて世をすごすかな」を踏んでゐると言ふ人もある。参考までに附加へて置く。因にこの句の筆蹟は教科書卷五の八九頁に出しておいた。

◇印象派風の蕪村（一四〇頁二行）――

ほととぎす平安城をすぢかひに

指貫を足で脱ぐ夜や朧月

春の海ひねもすのたりのたりかな

春雨や物語りゆく蓑と傘

大和路は宮も藁屋も燕かな

菜の花や月は東に日は西に

名のれく雨しのはらのほととぎす

名月や夜は人住まぬ峰の茶屋

秋の燈あきやゆかしき奈良の道具市

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉

こがらしや何に世渡る家五軒

宿かさぬ火影や雪の家つゞき

春の水山なき國を流れけり

これらの諸句で見ても、印象派風とここで言はれてゐる蕪村の句の特徴はよく分ると思ふ。

◇現實的でブリミティヴなところのある一茶の藝術(一四〇頁三行)――

ふるさは蠅まで人を刺しにけり

何のその百萬石も笹の露

夕乙鳥我には翌日あすのあてもなし

我が宿は何にもないぞ巢立鳥

寒いぞよ軒の蝸唐がらし

うつくしや障子の穴の天の川(病中)

かな釘のやうな手足を秋の風(病後)

我が宿は口で吹いても出る蚊かな

蟬鳴くや天にひつつく筑摩川

花の世は地藏菩薩も親子哉

おれと来て遊べや親のない雀

氣の毒やおれをしたうて来る小蝶

これらの諸句を吟味して見られるといふ。

【鑑賞批評】

第一節

芭蕉の詩や散文に、作者はずつと少年の時から親しんで来た。そしてそれが長い半生を通じて作者の第一の愛讀書になつてゐる。初めて讀んだ時はひどく感心したものである。歳月の移ると共に漸くその感激も褪せてゆくのがためしであるのに、芭蕉の書いたものばかりは、何時取り出して見ても飽きることがない。何故であらう。

作者は先づ、人の一生に深い影響を及ぼすやうな大きな感動を受ける事の最も多い、少年期から青年期へ移る時代に、深く芭蕉を愛讀したことを、理由として擧げてゐる。

第二節

それに次いで、理由の第二として、若いさかりの年頃、芭蕉の足跡を辿つて、伊賀から近江へ、近江から京へ、京から奈良へ、奈良から吉野へと、漂泊の旅をつゞけた經驗を語つてゐる。かうした色々な理由から、芭蕉は作者にとつては、此の上もなく懐しく親しい魂であつた。それならば、作者の胸に描かれた芭蕉は、どのやうな人物であつたか。

第三節

◇少年時代から私の胸に描いて居た芭蕉は、一口に言へば尊い老年であつた。私はつい近頃まで、芭蕉といふ人のことを想像する度に、非常に年とつた人のやうに思つて居た。其の晩年は、人として到達し得る最後の尊い境地の一つだといふ風に考へてゐた。(一三〇頁七行)——
若い時代の心に、はつきりと刻み附けられた印象といふものは、中々消え失せるものでない。作者も今にこの心持から脱し切れずにある。

然し事實に於て、芭蕉はそんな老人ではなかつたのだ。

第四節

◇芭蕉は五十一歳で死んだ。(一三二頁六行)——

この五十一歳といふ年を、友人の馬場孤蝶氏の上に發見した作者は、五十一といふ年が如何に「翁」といふ語にそぐはないものであるかに驚いてゐる。芭蕉の藝術は、自分達が思つてゐたよりはずつと若い、中年の人から生れて來たのだと考へるやうになつた。

◇芭蕉の藝術はそれほど年老いた人の手になつたものではなくて、實に中年の人から生れて來た抑へに抑へた藝術であると言はねばならない。

作者の芭蕉に對する深い愛は、芭蕉の知己を一人でも發見し得たときには、堪へ難い喜びを作者に感ぜしめる。

第五節

曾て長谷川二葉亭氏が芭蕉の散文の持つ文品を激賞した。それを作者が如何に嬉しく感じたかを語つてゐる。

第六節

曾て又海を越えて巴里にゐた頃、思ひがけなくも、佛蘭西文人の著述の一節に、わが芭蕉を論じたもの、あることを知つた。その豫期しなかつた發見をこの節では語つてゐる。

第七節

ここでは落柿舎で書かれたといふ嵯峨日記を引いて、芭蕉の熱情的な性質を語り、芭蕉がその藝術を完成するに當つて、どれだけ性來の情熱を殺さなければならなかつたかを述べてゐる。

第八節

幻住庵の記の一節を引いて、宗教に赴かうとしたある折の心持を語る。

第九節

芭蕉の生活の象徴、芭蕉の生命の宮殿としての幻住庵を説く。

第十節

幻住庵の記の末尾を引いて、一見寫實的なもの、底に縹渺たる幻想を潜めた芭蕉の藝術の特質を暗示してゐる。

一四 夕映・早春の大地

【作者の意圖】 奔放な神の表現の一つである夕映の美をば、思ひ切つた熱烈なさうして力強い、太い筋で詠歎したのが前章「夕映」の詩であり、もろくの木の芽草の芽に復活の力と、いきくした芽生えとを與へ促す大地の、黙しつゝ、常に行ひつゞけてゐる見事な仕事振りに驚歎して、それほどでもない小智小功を、ともすれば輪をかけて宣傳してゐる人間性のあさましさに強い反省を促したのが後章の詩の主題である。

【作者の個人的特徴及び小傳】 千家氏については参考卷二第一課「春」及び参考卷第二一課「月」の條を、白鳥氏については参考卷二第七課「蓮」の條を参照せられたい。

【解釋鑑賞】

一 千家氏の詩には「現實の直接の印象を歌つたものが多い」「その表現の單純さと直截さはたしかに特色ある生活の詩人たるを思はせる」と論じられてゐる個人的特徴が、この一篇の詩にもまざまざと發揮されてゐる。此の作が氏の二種の作品傾向のうちに「ほんの短い斷片詩」の一例であ

ることと言ふまでもない。

二 左の詩的表現の荒削りな筋の太い、さうした大膽さをよく玩味させたい。

◇火のやうな輝く雲が……黄金の空に強い調和を奏でてゐる。

◇色彩の大膽さ 思ひ切つた構圖(……)に驚く。

◇神の表現の奔放さ。(これはくと言つたま、言語に絶してゐるといふ驚歎讚美の聲が餘韻として籠められてゐるのである。)

三 「自分の弱點」と、こゝに言つたのは、大したえらい仕事も、計畫も出來ず、又根氣もない癖に、ともすれば口先ばかりの吹聴や宣傳ばかりがお先走りをする人間共の醜陋な共通性に對してつくづくと反省して見て、そのあさましさに自分ながら呆れるがい。

四 次の行に「靜かに黙つて」といひ、「靜かに土地を……」と「靜かに」の語を反覆してゐるのは、事實もない空宣傳にあまり饒舌である人間をたしなめたのである。

さうして「大地は黙つて、つねに、仕事を續けて」とあるところに、大地の「黙」と「不斷の精進」とに學べと、喝破したので、必ずしも教訓詩として物したのではないが、現代人の心にどこ

かがんとひやく何者かゞ感じさせられるであらう。

一五 牛肉と馬鈴薯

【作者の意圖】 明治俱樂部に集まつた七人の紳士、その間に偶然、各自の抱く人生觀の告白が提議される。第一に告白の口火を切るのは上村といふ才人肌の炭礦社員、彼の意見は、「理想と實際とは決して一致しない。かるが故に實際を主として、理想を従とする。」といふのである。これを近藤といふ精悍な、一癖あり氣な人物が滅茶苦茶にこき卸す。それが機會となつて本篇の主人公岡本が口を開くことになる。この岡本の言はんとする所こそ、作者自らが言はんとする所に他ならぬのである。即ち、「何とかして陳びた因襲の壓力から逃れたい。そして純潔無垢な小兒の持つ、生き生きとした驚異の念を以て、この天地の間に俯仰介立したい」といふ意見である。けれどもそれは徒らに俗衆の嘲笑を買ふのみで誰にも理解されず了つた、といふのが結びになつてゐる。いはゞこの一篇は、作者獨歩の精神的苦悶の告白とも言ふべきである。

【作者の個人的特徴】及び【作者の小傳】

卷一の七「泣き笑ひ」及び卷三の七、「朝日は輝く浮世は忙しい」の解説の所に詳細に擧げてある。

その方を参照されたい。

【解釋】

- ◇氷柱 ツララ 雨、雪などが、軒先から滴りながら凍つて垂れ下さつたもの。
- ◇火影 ホカゲ
- ◇ウイスキーと首引 ウイスキーばかりを相手にして、しきりに飲んでゐること。
- ◇變節 ヘンセツ 主義主張を變へること。
- ◇絲瓜 ヘチマ
- ◇洒落 シヤレ
- ◇雀躍 コヲドリ 喜びに躍り立つこと。
- ◇ビスマルク 鐵血宰相と謳はれた豪膽果敢な帝國主義的政治家である。ウキルヘルム一世を助けて、つい最近まで中歐に覇を唱へてゐた大獨逸聯邦帝國の基礎を置いた英雄である。
- ◇カヴール 伊太利の大外交家、伊太利建國の偉人である。ガリバルヂーは武に、カヴールは文に、相寄り相扶けて、現在の伊太利王國を生み出した。伊太利亞統一の事業は一にカヴールの畫

策にあつたといふも過言でない。

◇グラッドストーン 英國の宰相。千八百六十五年以後、四度まで國民の輿望を擔うて總理大臣の印綬を帯びた。自由主義を奉じた政治家で、或は羅馬教會の勢力を殺ぎ、或は愛蘭窮民のために土地條例を發布し、或は選舉法の改正を斷行する等、幾多著るしい業績をあけたが、中にもそれら在職中の事蹟として最も目覺しいものは、かの埃及の内政に干渉して、遂にこれを占領するに到つた一事である。

◇闡明 センメイ あきらかにすること。

◇ダーウキン 英國の名高い博物學者、進化論の首唱者である。まだケムブリッジ大學を卒へたばかりの青年のころ、ビーグル號といふ帆船に乗組んで世界週航を試み、大陸及び諸島に於ける動植物の分布及び特性、諸人種的生活狀態等を仔細に研究した。この航海中の研究が、二十數年の後に、その一代の名著「種の起源」で大成されたので、一世を驚倒せしめたこの新學説も、早く青年時代の六ヶ年の航海の中に其の萌芽を發したのである。

◇ウォルムスの大會で王侯の威武で屈しなかつたルーテルの膽は食ひたいとは思はない。彼の十

八歳の時學友アレキシスの雷死を眼前に視て、死其の者の祕義に驚いた其の心こそ僕の欲する所であります。

ルーテルは獨逸の宗教改革の先覺者である。アイスレーベンで生れ、十八歳の時エルフルトの大學に入つた。この大學に在學中の頃、ある雷鳴の日ルーテルが學友アレキシスと手を携へて道を歩いてゐると、突然、物凄しい雷鳴と共にふたりの上に落雷した。黒雲をつんざく猛火の柱をちらりと瞳に感じただけで、ルーテルは其の場に氣を失つて倒れた。やがて程經て息を吹きかへし、恐る／＼四邊を見廻すと、一緒に肩を並べて歩いてゐたアレキシスは、眼前數歩のところを雷に打たれて無殘な死に方をしてゐる。同じ道と同じ時刻に、肩をならべて歩いてゐた者が、一人はかうして死に、一人は不思議に助かつた。「死」といふもの不思議さに、ルーテルは深く驚いた。さうした事が機縁となつたのか、彼は法律の研究を放擲して、アウグスツス派の僧院に入り、二年の後修道僧の誓約を立てた。その後は聖書原典の研究に精進し、終に有名な九十五ヶ條の揭示を以て、宗教改革運動の火蓋を切り、熱烈火の如き辯論を以て法王と戦つた。千五百二十一年、ルーテルはウォルムスに於る大會議に召喚され、その説の放棄を嚴命された。しかもルーテルは

カール帝の面前に立つて、毅然としてこれを拒絶した。帝は怒つて、ルーテルに對し、爾後一切法律の保護を解く旨宣言した。しかしながら幸にしてフリードリヒ侯の庇護を得て、辛くも一命を完うした。それより後二十四年の久しい間、ルーテルは宗教改革に身命を捧げた。その不退轉の勇猛心は、遂に獨逸及び北部歐羅巴に於るプロテスタント教會の基礎を確立し得たのである。

◇尋常茶飯 ジンジャウサハン ありふれた珍らしくも何ともないこと。

【鑑賞批評】

一 この一篇に出て来る人物、岡本を初め、近藤・上村・綿貫・松木・井山等の性格風貌が如何に見事に描き出されてあるかを十分に味はせて見なければならぬ。まづ重要な性格岡本誠夫の研究から始めて行かう。この人物は恐らくは獨歩自身の風格を傳へてゐるものであらうと思はれる。その口にする「驚きたい。」といふ願の如きも、もとより、作者獨歩の胸底に常住抱懷されてゐた思想であつたに相違ない。岡本の描寫は、その明治俱樂部の立關に立現はれた時の様子から初まる。

◇すると其の立關へ、外套の襟を立て、中折帽を目深に被つた男がひよつくり現れて、いきなり

手荒く呼鈴を押しした。(一四二頁五行)――

しん／＼と底冷えのする冬の夜更け、人つ氣のない街路では、黒々と蹲つた家並の間で風が寂しい咆吼をあげてゐる。そのしんとした夜景を背に、岡本は明治俱樂部の立關につと來て立つた。目深に被つた中折帽、高く立てた外套の襟、立關に立つや何の躊躇もなく、手荒に呼鈴を押しした態度、さうした事にも、この人の人物の一端が覗はれるやうな氣がする。眞實に物を「考へてゐる」人、人生をごまかして生きてゆくことの出來ぬ悲劇的な性格、さういつた人物の何處となく超凡な、思索的な風貌が偲ばれる。俱樂部の二階には、あか／＼と灯が流れ漲つてゐる。世の暗さ寒さを一重の壁に隔て、そこには、飽食と満足と享樂との、眞實人生を思ふもの、苦惱などとはまるで縁のない心安けな生活が行はれてゐる。

◇「竹内君は來てお出でですかね。」と低い聲の落着いた調子で訊ねた。(一四二頁一〇行)――

◇「これを。」と出した名刺には五號活字で岡本誠夫としてあるばかり何の肩書もない。(一四三頁)

◇岡本は容易に座につかない。(一四三頁一二行)――

初めて聞くその人の聲は、「低く落着いた調子の」聲である。甲高い上つ走りのしたそれではな

かつた。出した名刺には、その姓名を示す四つの活字が並んでゐるだけで、地位や職業を示すべき何ものもない。恐らくはこの人は世間的な地位や名譽に關心を持つやうな俗的な人物ではないのであらう。自慢にもならぬ肩書を、矢鱈に鼻先にひけらかして見せるやうな淺間しい眞似は好まぬ人物なのであらう。

さて、室へ導かれた。竹内が椅子をすゝめても、岡本は容易に座につかない、すゝめられて直ぐ席に割り込み、相手の誰彼の見堺なく、忽ち輕薄な世間的辭令のやり取りの出来るやうな、そんな上つ迂りな人物では岡本はないのである。

◇「やあ、初めて……お書きになつた物は、常に拜見してゐますので……今後御懇意に……」

岡本は唯「どうかお心易く。」と言つたきり黙つてしまつた。(一四四頁六行)

ここでも岡本の脱俗的なぶつきら棒さが見られる。彼は、「眞實」の世界に沈潜する事の深い人だけに、うはべだけの外交辭令はとても滑らかには彼の口には上つて來ぬのだ。この場合の上村の言葉で知られるが、彼は文筆の人である。思索の人である。

◇「是非承りたいものです。」

と、岡本はウイスキーを一杯、下にも置かないで飲み干した。(一四五頁末行)――

何かしら深い悩みを持つてゐる人らしい。寂しい冬の夜の通りを、黙々と思に耽りながら、此處まで其の苦しみを忘れに來たのではなかつたであらうか。

◇「たゞそれだけですか。」と、岡本は第一の盃を手にしてうなるやうに言つた。

「ここにも皮相的な概念の遊戯がある。悲しいことだ。何處へ行つてもどうしてかう人間は因襲の世界の中で安心して居られるのだらう。」岡本はさう思つて不満を感じたのだ。

◇「斷然この汚れた内地を去つて、北海道の天地に投げようと思ひましてね。」

と言つた時、岡本はじつと上村の顔を見た。(一四九頁四行)――じつと上村を見つめた岡本は、上村の心の奥にも吾身のそれと同じ苦惱のあるべきを期待したのである。

◇「お話の先を願ひたいものです。」と上村を促した。(一五二頁八行)――
近藤の彌次には取合はず、切に上村の言ふ所を傾聴して、その心持の眞實を理解せんとしてゐる眞面目な態度は、床しいもの、限りではないか。

◇「それはあなた覺悟の前だつたでせう。」と岡本が入れた。(一五四頁九行)――

上村の理想追求は要するに道樂だつた。青春時代に誰にも有り勝な感傷主義だつた。さればこそ「現實」の一拂ぎに會ふと、根柢のない「理想」の幻影はひとたまりもなく碎けてしまふ。岡本の如く全身全靈を以て人生の祕義に悩み抜いてゐる人間から見れば、これはあまりにもふざけた態度、眞摯を缺いた態度であらねばならぬ。

◇「そこでどうだと言ふんです、あなたのお説は。」と岡本は嘲るやうな眞面目な風で言つた。あゝ、此の男も亦語るに足らぬ。縁なき衆生の一人だつた。さう岡本は思つたのであらう。

◇「大いに賛成ですなあ。」と靜かに落着いた聲で言つた者がある。「賛成でせう。」と近藤はにやり笑つて岡本の顔を見た。

「至極賛成ですなあ、主義でないと言ふことは至極賛成ですなあ。世の中に主義つて奴程愚なものはない。」

と岡本は、その訝えぐした眼光を座上に放つた。(一五七頁一一行)――

物そのもの、眞に徹し得ず、徒に人爲的な範疇を設けて、萬象をこの尺度に無理無體に押入れようとする、そこに吾々は「主義」なるものの愚劣さ加減を見る。主義とは、一切を因襲の色眼鏡を

通して見ることである。主義とは、楯の半面を以て全面を律せんとすることである。「世の中に主義つて奴程愚なものはない。」彼等は天地の祕義に觸れて驚異するの心をも有せずして、我は顔に何の主義をか云爲する。主義といひ、主張と云ふ、彼等にあつては畢竟する所、死せる概念の遊戯に過ぎないではないか。岡本の一言の痛烈さ、三斗の溜飲の下る思がする。

◇「譬喩は廢して露骨に申しますが、僕はこれぞといふ理想を奉ずることも出來ず、それならと言つて俗に和して欲望を充たして、以て我生足れりとする事も出來ないので。出來ないので、しないのではないので。實を言ふとどちらでもいゝから決めてしまつたらと思ふけれど、何の因果か、今以てたつた一つ不思議な願を持つて居るから、其の爲に何方とも決め得ないで居ります。」
覺めたる者の悲痛な悩みは此處にある。舊來の傳統と因襲との世界に安住して、何の不安をも懷疑をも感じない人間はそれでいゝ。一度快い傳統の麻酔から醒めて、われとわが生活に深い反省を加へて見た人は、再び俗に和して、晏如としてこの生活を續けてゆく事が到底出來ないのだ。十重二十重に我を束縛する因襲の羈絆から逃れたい。傳統の夢魔を振り落したい。そして新しい自由の天地に、清新な嬰兒兒として蘇りたい。覺めたる者の一齊に叫ぶ悲痛な絶叫はこれだ。こ

の心願の成就のためならば、何者をか與へることを惜しまうぞ。愛する妻をも、愛する兒をも、とより我身の生命をも、勇んでこれと代へて毫末も悔ゆる所はないのだ。さればこそ岡本は言ふ。◇「僕の不思議な願といふのは頗る大なる願、深い願、熱心な願で、かの「朝に道を聞かば夕に死すとも可なり」と言ふのと、大いに意義を異にして居るけれども、其の心持は同じです。僕は此の願が叶はん位なら、今から、百年生きてゐても何の役にも立たない、一向嬉しくない、寧ろ苦しく思ひます。全世界の人悉く此の願を持つて居ないでも宜しい。僕獨り此の願を追ひます。僕が此の願を追うたが爲に、其の爲に罪を犯すに至つても僕は悔いない。如何なるものでも與へます。若し鬼ありて僕に保證するに、「爾の子を與へよ、我これを喰はん。然らば我は爾に爾の願を叶はしめん。」と言はゞ、僕は雀躍して、妻あらば妻、子あらば子を鬼に與へます。」(一六〇頁) 何といふ深刻な惱であらう。烈々たる熱情の焔の、身を焼き人を焼き盡さんとするを覺えるではないか。

この願は習慣の重壓から脱却して、最後の眞實を追求しようとする切實な心願である。この最後の眞實の上に基礎を求めて一切を築き直さんとする止みがたい欲求である。眞實を把握し得

ず、假象の世界の中を彷徨して、何の道德ぞ、何の哲學ぞ、何の宗教ぞ。岡本は眞實の上に立たない一切のものを拒否する。それ等は畢竟するに砂上の樓閣に過ぎぬではないか。是に於て岡本は更に言ふ。

◇聖人になりたい、君子になりたい、慈悲の本尊になりたい、基督や釋迦や孔子のやうな人になりたい、本當にさうになりたい。しかし若し僕の此の不思議なる願が叶はないでもつてさうなるならば、僕は一向聖人にも神の子にもなりたくありません。(一六一頁一二行)――

◇宇宙は不思議だとか人生は不可解だとか、天地創生の本源は何だとかやかましい議論がありまゝ。科學と哲學と宗教とは、之を研究し、闡明し、そして安心立命の地を其の上に置かうと悶えて居る。僕も大哲學者になりたい、ダーウヰン跣足といふ程の大科學者になりたい。若しくは大宗教家になりたい。併し僕の願と言ふのはこれでもない。若し僕の願が叶はないで大哲學者になつたなら、僕は冷笑して自分の願に「偽」の一字を烙印します。(一六二頁一二行)――

この邊に來ると句々悽愴の氣を帯びて來る。虚偽を前提として道德を云爲し宇宙の祕義を云爲したところ何になる。無感激な遊戯に終始する科學者、哲學者、宗教家の輩、彼等は只「偽」の

烙印に値するのみである。

一七〇

◇「喫驚したい！と言ふのが僕の願なんです。」(一六三頁二行)――

岡本は初めて其の願望を説明した。ここ以後がこの短篇の全生命とも言ふべき重要な部分である。即ち岡本が其の不思議な心願を詳かに説明して聞かせるのである。

◇即ち僕の願とは、夢魔を振り落したいことです。

◇宇宙の不思議を知りたいといふ願ではない、不思議なる宇宙を驚きたいといふ願です。

◇死の秘密を知りたいといふ願ではない。死てふ事實に驚きたいといふ願です。

◇信仰そのものは必ずしも僕の願ではない、信仰無くして片時たりとも安んずる能はざる程に、此の宇宙人生の祕義に悩まされたいことが僕の願であります。

◇寧ろ此の使ひ古るした葡萄のやうな眼球を割り出したいのが僕の願です。

◇ウォルムスの大會で王侯の威武に屈しなかつたルーテルの膽を食ひたいとは思はない。彼の十八歳の時學友アレキシスの雷死を眼前に視て、死其の者の祕義に驚いた其の心こそ僕の欲する所であります。

因襲的な既成の範疇を通して、宇宙を、人生を、解釋し整理し得たりとするもそれが何になる。

何者にも歪められざる純真な魂それ自らを以て、直に宇宙人生の眞實に觸れることこそ唯一の望むべきことではないか。かくて自ら苦しんで求め得たる哲學宗教こそ、眞に絶對の眞實として、此に依つて安心を得べき究極のものではないか。併しながら悲しい哉。人間は無我無心の小兒の時代に於て、因襲と習慣との重壓の爲にすでに其の純らかな心を曇らせられ歪められてしまふ。

◇勝手に驚けと言はれました、綿貫君は。勝手に驚けとは至極面白い言葉である。しかし決して勝手には驚けないのです。僕等は生れて此の天地の間に来るや、無我無心の小兒の時から色々な事に出遇ふ。毎日太陽を見る、毎夜星を仰ぐ、是に於てか此の不思議なる天地も一向不思議でなくなる。生も死も、宇宙萬般の現象も尋常茶飯となつてしまふ。哲學で候の、科學で御座ると言つて、自分は天地の外に立つて居るかの態度を以て此の宇宙を取扱ふ。(一六六頁五行)――

人間はかうして驚けなくなつた。純真な魂は、因襲の壓力の下で窒息してしまつた。
◇そこで僕の願は、如何にもして、古び果てた習慣の壓力から脱れて、驚異の念をもつて此の宇宙に俯仰介立したいのです。(一六七頁初行)――

◇結果は頓着しません、原因を虚偽に置きたくない。習慣の上に立つて、遊戯的研究の上に前提を置きたくない。やれ月の光が美だとか、花の夕が何だとか、星の夜はどうだとか、要するに滔々たる詩人の文字は、あれは道樂です。彼等は決して本物を見てゐない。まぼろしを見てゐるのです。習慣の眼が作るころのまぼろしを見て居るに過ぎません。感情の遊戯です。哲學でも宗教でも其の本尊を知らぬことは、其の末代の末流に至つては悉くさうです。(一六七頁五行)——何たる痛快な、また悲壯な喝破であらう。岡本は更に言ふ。

◇しかし、此の問は必ずしも其の答を求むるが爲に發した問ではない。實に此の天地に於る此の我てふもの、如何にも不思議なことを痛感して自然に發したる心靈の叫である。此の問そのものが心靈の眞面目なる聲である。これを嘲るのは其の心靈の麻痺を白狀するのである。僕の願は寧ろ如何にかして此の問を心から發したいのであります。處がなか／＼此の問は口から出て心からは出ません。(一六八頁四行)——

◇我何處より來り我何處へ往く、よく言ふ言葉であるが、矢張此の問を發せざらんと欲して發せざるを得ない人の心から宗教の泉は流れ出るので、詩もさうです。だから其の以外は悉く遊戯で

す。虚偽です。(一六八頁二行)——

痛烈な言辭の底に脈々と波打つ悲哀の韻は、まことに古の豫言者等の哀哭を聞く心地がする。蓋し全篇の絶高頂クライマックス。

◇「矢張道樂でさあ、あつはつはつはつはつ。」

と、岡本は一緒に笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふべからざる苦痛の色を見て取つた。(一七〇頁) 悲痛な笑！覺めたる者のゆく道はいつも荒涼たる孤獨の路である。昏々と麻酔の夢さめぬ千萬人の中にあつて、只一人眼覺めてあるといふ事は、かくも寂しく苦痛なことなのである。それは丁度まるで言語の通ぜぬ天涯の異郷に、たゞひとりさすらふ異國人の悲みにも似てゐる。その魂るところは到底周圍には通じない。笑ふも泣くも憤るも、所詮は縁なき路傍の人である。その魂は無限の孤獨にすゝり泣く。花なく實なき荆棘の曠野を十字架を負うてさまよふ者の姿、そこそは彼等覺めたる者の必ず受くべき運命のそれではなくて何であらう。

以上主人公岡本の性格・思想の研究は終つた。岡本の性格を辿ることは、とりも直さずこの短篇を一貫する中心思想を明らかにすることであつた。岡本の言はんと欲する所は、即ち作者の言は

んと欲する所である。否々、岡本こそは即ち作者であり、作者こそは即ち岡本である。岡本の口を衝いて出る熱烈焔の如き言辭の蔭に、吾々は作者獨歩の苦涙を酌まねばならぬ。

岡本の思想が、因襲の麻醉より覺めたるもの、悲痛な絶叫であり、本篇の主題であることは上に述べた如くである。これに對して、世俗の遊戯的的人生觀を代表したものの、因襲の世界に安住するもの、人生觀を代表したものに上村がある。第二の研究の對象として彼を擇ぼう。

二 上村の世間馴れた輕薄な性格は、初めて岡本に紹介される時の態度にも既に表はれてゐる。

◇「上村君、此の方は僕のごく舊い朋友で岡本君……」とまだ言ひ終らぬのに、上村と呼ばれた紳士は快話な調子で

「やあ、初めて……お書きになつた物は、常に拜見して居ますので……今後御懇意に……」岡本とは正反對な性格である。岡本にはとてもかうした器用な眞似は出来ないのだ。

◇「なに最早大概吐き盡したんですよ。あなたは我々俗物黨と違つて眞物なんだから、幸ひあなたのを聞きませう。ね、諸君。」

と上村は逃げかけた。(一四五頁八行)――

この男仲々要領がい。

◇「だつてねえ、理想は食べられませんもの。」と言つた上村の顔は兎のやうであつた。(一四六頁)現實至上的な淺薄低劣な性格をまる出しにしてゐる。

◇「譬へて見ればそんなもんで、理想に従へば馬鈴薯ばかり食つて居なきやならない。ことによると馬鈴薯も食へないことになる。諸君は牛肉と馬鈴薯とどちらが好い。」(一四七頁六行)――

この連中には人生の祕義も宇宙の神祕もない。眼中にあるのは物欲だけだ。物欲の満足さへ全うされるれば、それでも何の不平もない、晏如として惰眠を貪るだけである。飽食をして肥え太つてゐる豚。さういつた感を抱かせる。それもしたり顔の理窟などを捏ねるだけに、猶更厄介な生物といふ外はない。

◇「さうですとも。理想は即ち實際の附屬物なんだ。馬鈴薯もまるつきり無いと困る。しかし馬鈴薯ばかりぢや全く閉口する。」

と言つて、上村はや、満足したらしく岡本の顔を見た。(一四七頁一二行)――
これで一かどの眞理を道破した氣で上村は居るのである。

◇「ね、竹内君は御存知ですが、僕はかう見えても同志社の舊い卒業生なんで、矢張りその頃は熱心な信者の仲間で、言ひ換へれば大々の馬鈴薯黨だったんです。」（一四八頁六行）――

◇「何も不思議はないさ。十三年も昔の二十二の時で、それはお目に掛けたい程熱心なる馬鈴薯黨でね、學校に居る時分から、僕は北海道と聞くとぞく／＼して居たもんで、清教徒を以て任じて居たのだから堪らない。」（一四八頁一一行）――

深刻な心靈の苦悶の體驗を経て、求めざるを得ざるが故に求めつ尋ねつして入り得た宗教にして、宗教は初めてその眞實の價値を持つ。心靈の苦悶なき宗教が何になることぞ。それは宗教の形骸に過ぎない、宗教の幻影に過ぎない。その時代の上村は、宗教なくしては生き得られなかつたが故に宗教に入つたのではなかつた。彼は宗教の雰圍氣を享樂しようとしたのだ。本質を求めたのではなくして、從屬性を愛したのであつた。岡本ならば、まさに「感情の遊戯」と一蹴し去るべき底の淺薄な信教であつたのである。

◇「そして、やたらに北海道の話をして歩いて歩いたもんだ。傳道師の中に北海道へ往つて來たといふ者があると、すぐ話を聴きに出掛けましたよ。處が又先方は旨いことを話して聞かせるんです。

やれ自然がどうしたの、石狩川は洋々とした流だの、見渡すかぎり森又森だの、堪つたもんぢやない。僕はすつかり參つちまひました。」（一四九頁七行）――

◇「そこで田園の中央に家がある。構造が極めて粗末だが、一見米國風に出來てゐる。新英州植民時代その儘といふ風に屋根を急勾配にして、それから北の方へ防風林を一區劃とる。水の澄み渡つた小川が此の防風林の右の方からうねり出して屋敷の前を流れる。無論この川で家鴨や鵝鳥が、其の紫の羽や眞白な背を浮べてゐるんですよ。此の川に三寸厚さの一枚板で橋が架つて居る。これに欄干を附けたものか附けないものかと種々工夫したが、やはり附けない方が自然だと言ふので附けないことに極めましたよ。」（一五〇頁九行）

◇「先づ冬になると、何だか其の冬即ち自由といふやうな氣がしましてね、それに僕は例の熱心な信者でせう、クリスマス萬歳の仲間でせう。クリスマスと來ると、どうしても雪がいやと言ふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱が下つて居ないと嘘のやうでしてね。」（一五一頁五行）――

◇「それで冬になると雪がすつかり家を埋めてしまふ。そして夜は窓硝子から赤い火影がちらちらと洩れる。折々風が／＼と吹いて來て林の梢から雪がばた／＼と墜ちる。牛小屋でホルスタ

イン種の牝手がもうつと唸る。」(一五一頁一一行)――

此處に吾等は開拓者の意氣をも殉教者の熱情をも見得ない。見るは只、安價なる少年のセンチメンタリズムである。一言評すればこれは「道樂」である。彼は自らの感傷主義を享樂してゐるに過ぎないのである。熱烈なる信仰と殉教者の情熱とを以て、この北邊の處女地に自らの路を切り拓かんと眞實志ざす青年であつたならば、何を苦しんで、「橋に欄干を附けたものか附けないものか」などと愚劣極まる空想の遊戯に耽つてゐようぞ。

彼は又「冬即ち自由といふやうな氣がした」といふ。齒の浮くやうな、文學青年的な噓語である。彼は果して「自由」といふ事を切實に考へるだけの、羈絆拘束を経験したか。夢寐の間にも「自由」を思はずにゐられぬだけの深い精神的苦惱を味はひ得たか。恐らくはさうではあるまい。「冬」と言ひ、「自由」といふ語の持つ幻想に陶醉してゐるのではないか。彼の云爲する自由なるものは、眞實の自由それ自體ではなくて、精神の疾の昔に死んでしまつた形骸の自由でなかつたのか。

「クリスマスと來ると、どうしても雪がいやといふ程降つて、軒から棒のやうな氷柱が下つて居

ないと嘘のやうだ。」といふ。何といふ月並なことぞ。クリスマスと言へば雪を思ひ、梅と言へば鶯を思ひ、「この日天氣晴朗」と來れば必ず「一瓢を携へて筈を墨堤に曳く」とやらなければ承知の出來ない連中、これこそ哀れむべき因襲の俘囚ではないか。

「夜は窓から窓硝子から赤い火影がちらちらと洩れる」の、「折々風がごうつと吹いて來て、林の梢から雪がぱた／＼と墜ちる」のといふに到つては、まさに「感情遊戯」の絶好見本である。何處に眞劍さがある？ 何處に眞面目さがある？ 巫山戯切つた態度と罵られても一言もあるまい。かうした境地に安住の出來る人は幸なる哉である。

◇「其處ですよ、思想よりか實際の方がい、と言ふのは。覺悟はして居たもの、矢張餘り感服しませんでしたね。第一それぢや瘦せますもの。」

かう上村は言つてから盃で口を濕して、

「僕は瘦せようとは思つてゐなかつた。」(一五四頁一〇行)――

何たる不眞面目の態度であらう。唯一の心願の爲には、生命をも愛兒をも犠牲にして悔いぬといふ岡本の心持と比べて見よ。

◇だから馬鈴薯には懲々したと言ふんです。何でも今は實際主義で金が取れて、旨いものが喰へて、斯うやつて諸君と煖爐にあたつて、酒を飲んで、勝手な熱を吹き合ふ。腹が空いたら牛肉を食ふ。(一五五頁八行)――

縁なき衆生である。遂に救ふべからざる人物である。上村にあつては、理想は享樂である。ピフテキに添へた馬鈴薯である。現實の住み心地を一層よくするための調味料である。

◇「君はどちらなんです、牛と薯、え、薯でせう。」と上村は知つた顔に岡本の説を誘うた。(一五八)岡本の所謂「最も愚劣なる」主義を以て、一切を片づけてゆかうとするのである。上つ迂りな淺薄さを遺憾なく表してゐる。

三 併しながら、上村にはまだ物欲を美しい感情の遊戲で飾らうとするだけの趣味はある。ところが、綿貫といふ男に到つては、低劣至極な我欲を、臆面もなく剥出しにして、耻づる色もなく得得としてゐる。上村にはまだそれでも愛すべき所もあるが、綿貫に到つては、徹頭徹尾嘔吐を催すやうな下卑た性格である。

◇「さあ、其の先を……」と綿貫といふ背の低い眞黒な頬髯を生やして居る紳士が言つた。(一四四)

◇「一寸君、その『馬鹿野郎』といふやうな心持といふのは僕には了解が出来ないが……そりやどう言ふんだね。」

と權利義務の綿貫が眞面目に訊ねた。(一五三頁五行)――
權利と義務で凝り固つた男、生きた心が萎びてしまつて、法律の機械として金儲けのためにはばかり動いてゐるやうな男。

◇「ヒヤ／＼僕も同説だ。仁義道德だつて何だつて牛肉と兩立しないことはない。それが兩立しないと言ふなら兩立させることが出来ないんだ。そいつが馬鹿なんだ。」

と綿貫は大いにいきまいた。(一五五頁一二行)――
仁義道德もかう扱はれては惨めなものだ。綿貫にあつては仁義道德は、我利々々亡者的な淺間しい行動を、巧みに飾る假面として役立つに過ぎない。狼の本性を隠す羊の皮に過ぎない。我欲の手段となつた道德、世にそれ程惨めなものが外にあらうか。

◇「いくらでも君勝手に驚けばいいぢやないか。何でもないことだ。と綿貫は嘲るやうに言つた。」(一六五頁三行)――

◇「人に驚かして貰へばしやつくりが止るさうだ。平氣で居て牛肉が食へるのに、好んで喫驚した
いと言ふものも物數奇だね。は、は、は、は。」と綿貫は其の太い腹をか、へた。(一七〇頁五行)——
綿貫はかうした殺風景な俗物である。

四 綿貫は徹底した俗物だけに、下劣極まる主義でも、自分の主義をしつかり押立て、居る。とこ
ろが井山といふ男に至つては、それだけの定見もない、其の日次第のひよろりくした料簡で暮
してゐる不見識な俗物らしい。

五 竹内といふ人物は、温厚な君子らしく思はれる。そして松木といふ男、これは比較的純眞な心
を持つた快活な青年らしい。

◇「オムレッツかね。」と今まで黙つて眠りかけて居た、眞赤な顔をして居る松木、座中で一番年の
若さうな紳士が眞面目で言つた。

「はつ／＼／＼。」と一座が噴き出した。(一四七頁初行)——

◇「大變な清教徒だ。」と松木は又口を入れた。(一四九頁二行)——

◇みんなは唯黙つて岡本の顔を見て居た。松木と竹内は眞面目で、綿貫と井山と上村は笑ひを含

んで。(一六〇頁三行)——

◇「成程、こいつは益解りにくいぞ。」

と松木は呟いて、岡本の顔を穴のあく程凝視めて居る。(一六五頁九行)——

◇「僕はどちらへ屬するのだらう。」と松木は笑ひながら問うた。(一六九頁五行)——

愉快な彌次を飛ばして一座を笑はせてゐるあたり、餘程快活な愛嬌のある、人好きのする人物
らしい。そして、他人の所説を、熱心に傾聴して理解しようとするだけの眞面目さがある。綿貫
や井山等とはもとより段違ひな人物である。

六 最後に、一人、岡本に次いで最も興味を惹く一つの性格がある。近藤がそれである。この男は、
最初から黙つてゐる。上村の話が佳境に入る頃まで、他の人々の饒舌の間に伍して、只一人、爛
爛たる眼を凝然と据ゑて黙々として聴き入るのみであつた。何處か底の知れない、一癖も二癖も
あるべき人物である。

◇「君は詩人だ。」

と叫んで床を靴で蹴つたものがある。これは近藤と言つて、岡本が此の部屋へ入つて來て後も一

言も發しないで、唯ウイスキーと首引をしてゐた背の高い、一癖あるべき面構へをした男である。(一五二頁二行)——

線の太い、男性的な、豪放な性格。激情的な、竹を割つたやうな所のある、「力」の人物。さう言つた感じである。

◇「さうだ、先をやり給へ。」と近藤は殆ど命令するやうに言つた。(一五二頁一〇行)——
痛快な男だ。

◇「僕は違ふね。」と近藤は叫んだ。そして暖爐を後に椅子へ馬乗りになつた。凄い光を帯びた眼で座中を見廻しながら、

「僕は馬鈴薯黨でもない、牛肉黨でもない。上村君なんかは、最初馬鈴薯黨で後に牛肉黨に變節したのだ。即ち薄志弱行だ。要するに諸君は詩人だ。詩人の墮落したのだから無闇と鼻をひくひくさせて牛の焦ける匂を嗅いで歩く。其の醜態つたらない。」(一五六頁三行)——

◇「墮落? 墮落たあ高い處から、低い處へ落ちた事だらう。僕幸ひにして最初から高い處に居ないから、そんな見つともないことはしないんだ。君なんか主義で馬鈴薯を食つたのだ。好きで食

つたのぢやない。だから牛肉に餓ゑたのだ。僕なんか牛肉が好きで牛肉を食ふのだ。だから最初から餓ゑぬ代りに、今だつてがつくししない。」(一五六頁末行)——

◇「なに、要領を得ないたあ何だ。大いに要領を得て居るぢやないか。君等は牛肉黨なんだ。牛肉主義なんだ。僕のは牛肉が最初から好きなんだ。主義でも絲瓜でもない。」(一五七頁八行)——

この男決して凡骨ではない。餘程徹底した人生觀を持つてゐる。彼も亦岡本と均しく、主義の主張のといふ、輕薄な感情遊戯を蔑視する。主義の絲瓜のといふ不徹底な理窟を捏ね廻さず、心の赴くがまゝに任して煩い人爲的の規矩準繩を設けない。確に達識の士である。只惜むべき哉、餘りにも現實に淫して理想を忘れてゐる。

其の闘争的な豪宕な性格は、「墮落? 墮落たあ高い處から低い處へ落ちたことだらう云々」あたりや、「なに、要領を得ないたあ何だ。大いに要領を得てゐるぢやないか」などといふやうな口ぶり、方にもはつきりと表はれてゐる。

◇「其の説を承らう、是非願ひたい。」と近藤は其の四角な顎を突き出した。

◇「何だね、其の不思議な願と言ふのは。」

と、近藤は例の歴しつけるやうな言ひぶりで問うた。(一五九頁七行)――

◇「諸君は知らないが、僕は是非聴く。」

と近藤は腕を振つた。(一六〇頁二行)――

かういふ所にも近藤の氣象は鋭く表はれて来る。

◇「何のこつた。」

「落語か。」

人々は投げ出すやうに言つたが、近藤のみは黙つて岡本の説明を待つてゐるらしい。(一六三頁)

◇「寧ろ此の使ひ古るした葡萄のやうな眼球を剝り出したいのが、僕の願です。」

と岡本は思はず卓を打つた。

「愉快々々」と近藤は思はず聲を揚げた。(一六五頁二行)――

◇「矢張道樂でさあ、あつはつはつはつ。」

と岡本は一緒に笑つたが、近藤は岡本の顔に言ふべからざる苦痛の色を見て取つた。(一七〇)見よ、六人の聴衆の中、眞に岡本を理解し岡本に共鳴し得たものは、近藤唯一人であることを。

岡本も此の一人の知己を得たことを以て十分満足すべきものであらう。岡本とは全然型の違つた人物ではあるが、彼も亦一種の傑物と言はねばなるまい。

七 以上で、本課の研究に於て最も興味あるべき部分たる、篇中人物の性格吟味を終つた。次には短篇小説としての本篇の組立を見て見よう。短篇小説はその本質からして、興味を強く或一點に凝集せしめて、不必要な部分は一切取り除けてしまはねばならぬ。この作品を見てもさうで、必要な事件、冗漫な叙述は何處にもない。きつちりと固く緊つてゐる全篇の機構に一點のゆるみもない。興味の焦點は勿論、岡本の「吃驚したい」といふ願の説明の部分にある。他は悉くこの岡本の心持をはつきりと浮出させるための背景の役をしてゐる。

冒頭からして、冗々しい叙述などは一切弄せず、いきなり岡本といふ主人公を引き出して來てゐる。そして、倶楽部の二階の一座を簡單に描寫すると直ぐに、上村の現實至上論へとぐんぐん筆を運んでゆく。かういふきびくした所が短篇小説の特徴である。

この作品の構造を分解して見ると、次のやうになる。

主人公岡本の紹介 一座の有様の簡単な叙述

序部

罵倒論、……岡本の眞摯な精神的苦悶の告白……上村の輕薄な現實至上主義論近藤の主義
結尾部。

上村の議論は、岡本の告白を浮出させ引立たせんがための背景、或は對照の役目をなすものである。そして近藤の議論は、岡本のそれを引き出すべききっかけとして用ひられてゐる。結尾はもとより岡本の所論が近藤以外の人には理解されず、空しく俗輩の嘲笑の中に葬られてしまつたことの叙述である。

一六 千曲川のほとりにて

【作者の意圖】 作者が數年住みついた小諸城のほとりを願望低徊して其のやるせない綿々の情を抒べたもの。

【作者の個人的特徴】

散文方面の特徴に關しては、參考卷一第四課「水の御馳走」參考卷二第九課「生ひ立ちの記」及び參考卷四第一課「嵐」などを参照して戴きたい。
今作者の詩の方面の特徴について少しく左に引用したい。

x

藤村島崎春樹は明治廿年代の後半から詩を書いてゐるが、廿九年抒情詩の短唱に清新な歌口を示してから認められ、以後「文學界」を本據とし、兼ねては「帝國文學」や、後には「新小説」等に詩作を發表した。彼の新體詩は從來のものに比すると、多分の近代味をもつてゐる。その爲一見西詩的とも思はれるが、その詩の中樞は日本傳來のものであつた。尤も彼は西歐詩人の感化を

も相當に受けてゐるが、それは主として發想法上の事で、斯く身についた近代の衣を纏つてゐる彼の、血となり肉となつてゐるその詩的感情は、依然として日本の傳統の上にあつた。のみならず、彼の詩は用語と措辭の上で、直文・羽衣等擬古派の系統をも引いてゐる。従つて鐵幹の如き晩翠の如き明快な調子は求められなかつたから、樗牛等一部の評家から朦朧體といふ非難をも蒙つた。が、その詩を朦朧と感じ纖弱と爲すものは、評家それ自身の鑑賞力の不足を暴露したものである。藤村の詩は、擬古派の系統を引いてゐるもの、決してそれと同一のものではなかつた。そこに彼等に見られない卓抜な詩技によつて優秀な感情が盛られてあつた。それは努めて雅醇な用語を選び、種々の形式を試み、洗煉熟成された修辭的技巧によつて、氣稟ある青春の情熱を歌つてゐるので、從來の新體詩に比して少なからず新鮮な聲調と流麗な韻律に富んでゐた。彼は用語や措辭の上で擬古派の、又手法の上でロセッチの戀愛詩やスキンバーンの情熱の歌等ラファエル前派の影響をもうけてゐたけれど、その直接の影響は先進透谷の詩にあつた。而してその詩情に至つては近代日本に生れた彼獨自のものであつた。さうした聲調と姿態の中で、當代新日本の若人の清香な詩想と純眞な情感を歌ひ出したのであつたから、その藝術的な魅力は忽ちにして時人

を惹きつけずにはおかなかつた。それは營に殉情的な青年の憧憬を煽つた許りでなく、高雅を欲する成年者をも魅し去つた。(湯池孝——日本近代詩の發達)

特に本課の詩について——

藤村の詩は後年、本課の詩を載せてある「落梅集」あたりになると、だん／＼餘裕あり、落ちつきがあり、どこか思索的で、從來に比するとよほど歌ひ方が違つて來た。

しかしさうした事は思想的な特色であるが、そしてその爲に此の集は一體に沈靜の色調を帯びてゐるが、一方から言へば散文的な思想が多くて、や、ともすると調子が弛んで居る。これを詩として見る時は、上述のものよりも願望低徊の抒情的の方にすぐれた詩感が認められる。卷頭の此の「小諸なる古城のほとり」は其の尤なるものであつた。

この詩は朗々高歌するより、むしろ低唱微吟すべきであらうが、しかも集中の逸作であり、併せてかうした浪漫的感傷にいぶしをかけた様なものは、亦「落梅集」の一特色であつた。

【小諸の藤村詩碑】

島崎藤村氏が卅年前小諸にゐて、胸中の溢る、詩趣を落梅集その他で世に問うてゐた氏の貴い時

代を記念するため、有島生馬氏等が發起となり小諸の城趾不開の門の跡に建設中であつた詩碑は、漸く竣工六月廿四日(昭和二年)除幕式を行ふ事になつた。碑は高さ一丈巾一丈の大自然石の中に、有名な「小諸なる古城のほとり」の氏自身の筆を彫りはめてある。藤村氏は廿一日松江の旅行から歸つたばかりで疲勞してゐるので、次男翁助氏が出席した。

【解釋】

◇離齟 アクサク(或はアクセク) 小さなくだらないことにかゝづらつて、いそがしくこせついでゐること。

◇谷に下りて 「クダリテ」とよむ。

◇いざよふ 進まうとして進み得ず、行かうとしてとゞまつた體にいふ。ためらふ。次の「砂まじり水巻き歸る」で、このいざよふさまの實況が語られてゐる。流れもやらず、ゆるやかに渦をなして、一つところに停滯してゐるのである。

◇春淺く 早春、春さき。春になつたばかりの頃にいふ。

◇たゞひとり 作者が只獨り、願望低徊して去りもやらず、この千曲川の岸べに、やるせない今

昔榮枯の感にたへかねて、愁然としてたゞすんでゐる。「愁を繫(ツナ)ぐ」とは、愁はしい心をお願いして、恰も繫がれた舟かなぞのやうにそこにすつとたゞすみ通してゐるといふこと。

【鑑賞】

一 朗讀には低くしんみりとした調子でやりたい。

二 この四聯からなる詩は、何かしら漢詩の絶句の起承轉結の排列を思はせるものがあるやうだ。

第一聯 昨日とすぎ、今日と暮すも、すべてこれ運命乃至神の攝理のまゝで、小さな人力人智のどうにも出来ないものを、何をさう、こせつきあわて、豫見の出来ぬ明日明後日と未來のことをさきぐりして氣をもんでゐるのかと破題し。

第二聯 榮枯盛衰がいくたびか夢の如くくり返されたそのはかない出来事の跡をかすかに偲ばしめる城外の低いところ——谷に下りて河面を見ると、そこには、歴史は繰返す、榮枯は幾度か繰返されるといふ實證かのやうに、流れ去つたとばかり思つてゐた水がまた小砂を交へて渦巻きもどつてゐるではないか。と破題を承け、何もくよくよくすることはないと述べ。

第三聯では、古城と岸の波、即ちこの今昔の凡てを知つてゐる山河が何事をか相語り合つてゐる